

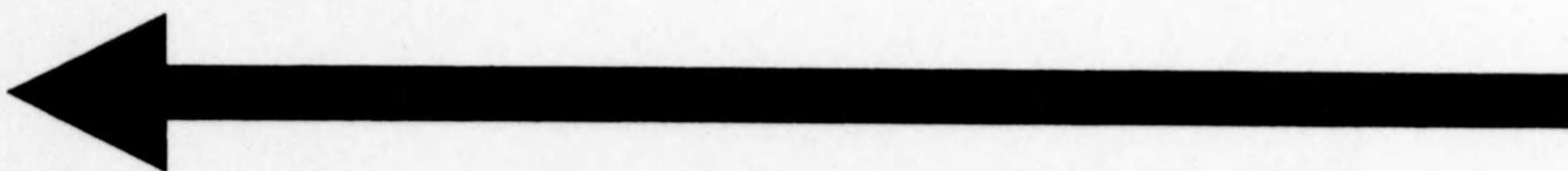
61-412



61
12



始



醫學博士 杉田直樹 著

優等生
犯罪
罪及精神病

東京 雄山閣 版



61-4/2

自序

「優生學講座」の計畫に當つて小生に遺傳と犯罪並びに精神病との關係と題する一篇を擔當執筆するやう御依頼を受けたのであるが、何分公私多用のため遽に執筆の準備をする違もなく荏苒數月を過してゐる間に、急に配本の都合から一ヶ月許りの間に脱稿しなければならぬといふ破目になつたので、そこで惚忙を忍びつゝ、全く涉獵比照の便宜のない名古屋の旅窓に於いて稿を起し、一氣呵成に綴り上げるの餘儀ないこととなつて了つたのである。由來私の書いたものには斯うした拙速式のものも他に類が少なくないのだから、之れも亦その一つとして御寛恕を乞ふことにする。實驗遺傳學方面の研究は篤學の士の努力により今や細緻精密の境地に入り、數學の範圍にまでも入つて自然の機構の雄大にして而も一糸亂れざる整正を思はしめる如き貴重なる業績に富んでゐるのであるが、精神病、犯罪の如き人の精神作用に關聯し且實驗も觀察も到底深奥に徹し得ざる方面の遺傳學的研究の結果は、今日まだ不明不確、單に推想と概括とに甘んせざるを得ない部分が少なからず存してゐるので、従つて本書の論述が多分に曖昧の色合を含んでゐることは誠に已むを得ない所として御諒解を得ておきたい。しかし大綱は既に擱まれてゐる。今後に於ける此の方面の研究の進歩

自序

「優生學と社會生活」重要正誤		頁	
二〇二	行	二〇六	頁
一九一	一	二一〇	行
一七六	二	二一五	行
一二四	三	二一七	行
一一八	四	二二六	行
一〇九	五	二二〇	行
八一	六	二二六	行
七二	七	二二八	行
七〇	八	二二九	行
五一	九	二三〇	行
四七	一〇	二三六	行
三九	一一	二二七	行
一二	一二	二二五	行
	一三	二一〇	行
	一四	二〇六	行
	一五	二〇九	行
	一六	二〇六	行
	一七	二〇九	行
	一八	二〇九	行
	一九	二〇九	行
	二〇	二〇九	行
	二一	二〇九	行
	二二	二〇九	行
	二三	二〇九	行
	二四	二〇九	行
	二五	二〇九	行
	二六	二〇九	行
	二七	二〇九	行
	二八	二〇九	行
	二九	二〇九	行
	三〇	二〇九	行
	三一	二〇九	行
	三二	二〇九	行
	三三	二〇九	行
	三四	二〇九	行
	三五	二〇九	行
	三六	二〇九	行
	三七	二〇九	行
	三八	二〇九	行
	三九	二〇九	行
	四〇	二〇九	行
	四一	二〇九	行
	四二	二〇九	行
	四三	二〇九	行
	四四	二〇九	行
	四五	二〇九	行
	四六	二〇九	行
	四七	二〇九	行
	四八	二〇九	行
	四九	二〇九	行
	五〇	二〇九	行
	五一	二〇九	行
	五二	二〇九	行
	五三	二〇九	行
	五四	二〇九	行
	五五	二〇九	行
	五六	二〇九	行
	五七	二〇九	行
	五八	二〇九	行
	五九	二〇九	行
	六〇	二〇九	行
	六一	二〇九	行
	六二	二〇九	行
	六三	二〇九	行
	六四	二〇九	行
	六五	二〇九	行
	六六	二〇九	行
	六七	二〇九	行
	六八	二〇九	行
	六九	二〇九	行
	七〇	二〇九	行
	七一	二〇九	行
	七二	二〇九	行
	七三	二〇九	行
	七四	二〇九	行
	七五	二〇九	行
	七六	二〇九	行
	七七	二〇九	行
	七八	二〇九	行
	七九	二〇九	行
	八〇	二〇九	行
	八一	二〇九	行
	八二	二〇九	行
	八三	二〇九	行
	八四	二〇九	行
	八五	二〇九	行
	八六	二〇九	行
	八七	二〇九	行
	八八	二〇九	行
	八九	二〇九	行
	九〇	二〇九	行
	九一	二〇九	行
	九二	二〇九	行
	九三	二〇九	行
	九四	二〇九	行
	九五	二〇九	行
	九六	二〇九	行
	九七	二〇九	行
	九八	二〇九	行
	九九	二〇九	行
	一〇〇	二〇九	行

は十分に期待し得られるであらう。本書は主としてクレベリン、ランゲ、ホフマン、ラフリン、其の他諸先進の著述より其の資料を仰いで及ぶ限り廣く此の方面の既得知識の輪廓を描くつもりで執筆したのであるが、暫らくは此の不滿な學問のありのまゝの姿のみを茲に紹介して、此の講座中他の精密なる科學的論述の部分と對照して、以て遺傳の現象の本態を體得して戴きたいことをお願ひする次第である。

本篇は小生の參加してゐる「日本民族衛生學會」並に「日本精神衛生協會」の衛生知識普及運動のために、多少の貢獻をなし得べきことを信じ、それ等の會の事業のため此の微業を捧獻したいと念願してゐる。幸ひに大方の博讀を忝うし得れば幸甚であるが、何分にも右様の次第で、此の書の内容が甚だ粗漏にして盡くさない所の多いことをくれぐれお詫申し上げておきたいと思ふ。

昭和七年二月十日

匡廬山房に於て

杉田直樹

優生學と犯罪及精神病 目次

第一章 緒言	一
第二章 精神病と特異素質	四
第三章 精神的素質の種類	九
感情型素質又は回歸性素質	一〇
理智型素質又は乖離性素質	一五
智能の素質(天賦)	二三
癲癇性素質	二五
素質の混合	二六
素質と外因との關係	二九
第四章 精神病の遺傳現象の綜説	四〇
第五章 精神病的變質綜説	七〇
第六章 變質徵候	七三
第七章 精神素質遺傳の各論	一〇八
智能天賦の遺傳	一〇八
能才及び天才の遺傳	一三三

第八章 主要なる精神病的傾向及び素質の遺傳の各論

第一節 躁鬱型(感情型又は回歸型)素質の遺傳

回歸型氣質の遺傳

躁鬱病の遺傳

第二節 早發性癡呆(理智型又は乖離型)素質の遺傳

乖離型素質の遺傳

早發性癡呆の遺傳

第三節 癲 癇

癲癇の遺傳

癲癇の素質の混合

第四節 精神薄弱症(低能)の遺傳

第五節 妄想性精神病

第六節 強迫觀念症

第七節 精神病の遺傳關係を研究する目的

第九章 犯罪發生の原理

第十章 犯罪性の遺傳

第十一章 犯罪性家族遺傳各論

第十二章 精神病者及び犯罪者の斷種法

斷種手術の變遷

斷種法の實施

斷種實施の學術的根據

斷種實施に關しての意見

第十三章 斷種法令の動機

斷種の實行機關

法令に定めたる斷種手術の様式

犯罪者に對する斷種法の適用

米國の現行斷種法令

北米合衆國優生學協會勸告斷種決議案

附錄第一 精神病學上の術語の釋義

早發性癡呆

乖離性素質

躁鬱病

定期性躁病又は鬱病

回歸性素質

無力性體質

關士形體質

肥滿形體質

目次	四
混合形體質	六
妄想	六
妄想性精神病	六
精神變質症	七
病的不徳症	八
麻痺性癡呆	八
癲癇	九
精神薄弱症	九
附録第一 感化院收容兒童に關する醫學的調査	二
(一) 緒言	二
(二) 調査結果概要	三
(三) 身長・胸圍・體重及び頭圍	五
(四) 身體的變質徵候	六
(五) 感化院收容兒童の性格的特質	三
(六) 不良少年に現はれる性行氣質と幼年期の原始的本能	三
(七) 本能發育の徑路より觀たる不良少年の分類に就いて	元
(八) 感化の原理に就いて	四
(九) 結論	四

目次終



優生學と犯罪及精神病

醫學博士 杉田直樹

第一章 緒言

精神病や犯罪性は濃厚なる遺傳關係を示すものだと言ふことは古い昔から多くの人々に着目せられた所であつて、既に世の云ひ慣はしになつてゐたほどであるが、學術の進運につれて段々とその事實が系統的に闡明せられ、その遺傳なるもの本態や又遺傳現象の法則が知られるやうになつてからは、此の知識を應用して所謂優生學 EUGENICS が勃興し、廣汎なる實驗、經驗、統計上の事實を基礎として人類素質の改善が企劃せられることとなり、一方には優良なる天賦才能の保續發展を

遺傳學によつて劃策すると共に、又一方には遺傳の源泉を溯つて精神病、神經病、精神變質特に犯罪、自殺、浮浪其の他の社會惡の種々相をば、社會組織の改良と相俟つて人間個性の内因の方面から漸減せしめて行かうと圖るやうになり、その學理的的研究の立場から實施上の成算が確立せられるに及んで、當今では之を社會重大の實際問題として一大啓蒙運動が開始せられんとする時運に立ち至つたのである。民族改善乃至民族衛生の聲は今社會の各層各方面に及び、痛切な國民の存亡の依つて關する衷心の絶叫となり、力強くも國民凡ての共鳴和響を得て、花々しい宣傳並に實行の時代に入つて來たのである。民族衛生の努むべき事業は多數にあるが、その中にも精神病者、精神變質者、犯罪者の發生防止の問題は、特に社會關係の最も喫緊なるものであつて、先づ第一に留意せられなければならない方面である。而して目下之等のものから社會の受けつゝある脅威や物質的損害が意外に甚大なるものであると共に、之等のものの剿絶を期するために要すべき努力や費用や時日も亦決して輕少のものではないのである。即ち斯くも勢強く上記のやうな社會惡が蔓延して來て今日の狀態に至つた迄には、その原因として不良因子の遺

傳の禍根が深く人間性の土中に張つてゐて、しかも長年月の間少しも刈り取られないことなく、はびこり放題に放任せられてあつたといふことに責を歸せねばなるまい。今私は本書に於いて、此の優生學的啓蒙運動の一助とする目的から、精神病及び犯罪と遺傳との關係を主題として、現在の醫學的知識の大體を紹介し、之に關聯して夫等の者の發生防止に對する根本的醫學的方法として最近盛に論議せられるに至つた斷種法の生ひ立ちと目下の實施後の成績大要とを附記し、以て一般諸賢に此の方面の知識を得て戴きたいと志した次第である。たゞ計劃が急であつた爲め、十分に準備し推敲する暇が許されなかつたので、随分杜撰な資料を用ゐてある上に、主として外國の文献にのみ傾いて内地の例證を蒐集する邊を得なかつたことを愧づるのである。又自分の専門とする精神病學の方面の術語、病名等を一々解釋をも下さずにそのまゝ、無遠慮に使用した爲め、此の學について豫備知識の乏しいお方には、多少の御諒解を得にくい所もあらうと思つたが、一先づ此の粗笨な姿で御一讀を博しておき、餘閑を得て次版にはせめて専門學的立場からの精細な叙述を卷末にでも附加させて貰ひたいと期してゐる。

第二章 精神病と特異素質

精神病は如何にして發生するかに就いていろいろの學説があるが、今日信せられる所では精神病を發すべき素因が、其の體質の上に豫め存在して居り、其の素因の上に更に環境其の他外界からの特殊の影響が作用して、始めて病的症狀を起すに至るものであると考へられ、然して其の特殊な素因をば精神病的素質と名づけて居る。一般に精神作用は身體の狀況と密接な關係に立つてゐるものではあるが、しかしいつも身體的の變化が始めに起つて之れに基いて精神的症狀が起つて來るものだと考へられない。併し一般に云つて精神作用も亦矢張り生物學的の現象であるから、其の機能中樞たる腦髓の組織或は全身内分泌作用等、身體的方の狀況と密接の關係あるべき事は云ふ迄もない。それに就いては後文に精しく述べやうと思ふが、何れにせよその人に固着する精神病的素質なるものを假定して考較する事は、遺傳學的研究を進める上に於いては便宜な事である。ヨハンゼン Johansen は精神的並びに身體的の種々な症候をば遺傳學の上から現象型

Phänotypus と遺傳型 Genotypus とに分ち、遺傳型なるものは即ち「素質」であつて、其の生物に固有な、即ち胚種に固着してゐる特質を指すものであり、此の一定の遺傳型素質の如何が其の個體の外界刺激に對する反應の形式を規定するものであると假定する。此の素質に對して外界の影響が種々な方面から働きかけ、其所で始めて種々多様な現象型が生ずるのであるが、其の現象型なるものは精神病學の方で云へば種々の精神症狀に當るものである。此の症狀そのものは遺傳的にそのまゝ家系に傳はるべきものではなく、單にその基礎となるべき素質のみが遺傳をするのである。言ひ換へれば素質とは其の生物が形態的に亦機能的に固有する所の特質を云ふのであつて、夫れは遺傳的に先系より受け又遺傳的に後系に傳ふる事を得べきものに名くるのである。此の素質に對し外界から種々働きかけ、夫れに因つて種々な症狀を發生させる原因となるべきものを「外因」と名づける。即ち素質 Konstitution と外因 Konstellation とが色々と相錯綜し相干涉して、始めて身體的にも精神的にも種々な病的の症狀を起すものなのである。今精神病の遺傳に就いて一般的に論ずる場合にも、精神病が遺傳すると云ふ事は、つまり此の精神病的素

質が遺傳する事實を意味するのである。而して種々な精神病に對し夫れ夫れに特殊な異なつた素質が果して存在するのであるか、或は唯一の精神病的素質に種異なつた外因が働らいて種々な精神病を發生するのであるか。夫れに就いては之れより段々詳述しやうと思ふ所であるが、恐らく精神病、神經病の幾多の種類に互り夫々特殊の素質が幾種類も存在してゐるに相違なからうが、之等の夫々の素質の遺傳因子は相互に極めて近似した性質をもつものであつて、特殊な外因或は刺戟條件に依つては彼れ是れ相互に變化する事もあり得るものと思はれる。又此の素質も、必ずしも疾病に關するものばかりではなく、精神上に於いては智力や感情や性格などの上に於ける正常の範圍内にある種々な特徴や程度等にも亦素質に因る生來性の差異が認められ、身體的方面でも個々の器官や器官系統に於ける局所性の素質と云ふ事も考へられるのである。何れにせよ、斯う云ふ個々の素質の要素が相集まつて其の「個人全體としての素質」を構成してゐるのである。夫れ故精神病の遺傳に就いて考察する前に、吾々は寧ろ普通の人間に見られる種々な精神的特徴の遺傳關係、又夫等に對する外因の影響等を研究し、夫れに依つて

略々精神現象の遺傳的關係の法則を明かにした上で、精神病の遺傳關係に論及するのが理解し易い順序であらうと思ふ。今或る個人に就き、其の現在有する精神作用、即ち智力、性格等の凡ての特質を精細に調査したとしても、其中何處までが素質的特徴であり、又何處からが外因の影響に因る現象なのであるかを定める事は非常に困難であつて、兎に角に外界の種々な條件と無關係に發生して來たものを以て素質的部分と考へるのが適當であらう。とにかく多數の人々の相互の比較によつて素質の現象と外因による影響等とを大體常識的に區別してお話を進めて行くことにしたいと思ふ。

一般に或る個人の精神的素質を考較する際には、智能、性格、氣質の三方面に別けて夫々を要素的に別々に考へるのが便利である。即ち其各方面に夫々素質的特徴並びに外因に因る影響が認め得られるのである。先づ第一に性格の方面を考へて見るに、性格とは個人が絶えず外界刺戟の變化に對し感情的並びに意志的の反應をする有様を凡て觀察し、その凡ての場合を總括して平均的に常に一貫して現はれる特徴をば、假りに其の性格的特徴と名づけるのである。性格は人によつ

ては其の幼少より成長の間を通じ終始一貫して少しも外部の境遇の變化等の爲めに影響せられて變化する如き事なく、一定不變の特質を保持する場合がある。例へば同一の両親の間に生れた多數の子供が全く同様な家庭的境遇に於いて、同様な方法で教養せられたにも拘らず、其の各個人皆夫れ夫れ異なつた特有な性格的特徴を現はす事があるし、又之れに反して同じ家系に屬する同胞が種々銘々に異なつた境遇に生育して行つたに拘らず、相似た性格を示すと云ふ例もある。云ひ換へれば性格には本來種々な異なつた型があるのであつて、境遇は變つても、その型が一生涯を通じて變らずに保持せられ、如何に外界の刺戟を受けても容易く變化されるものではないと云ふ事が判る。即ち性格の基調となるべき一定の型は其の個人の生涯の間、外界の影響を蒙らずに保持せらるゝもので、蓋し素質に屬するものと考ふべきである。然して此の性格型の素質は、後ちに述ぶる如く遺傳關係に於いては特有な遺傳因子と認むべきもので、而かも此の遺傳因子たる性格的素質は經驗上遺傳に當つても甚だ力強く外界の影響に對して抵抗性を持ち、その家系に固着するものである。智力の方面に就いても、特に優れた智能の天賦の

素質は、外界の影響に對して可なり強く抵抗して現はれるもので、其の人の境遇如何に拘らず、機會ある毎に優秀な智能の銳鋒は必ず何處かに現はれるものである。次に氣分即ち其の人の外界の出來事に對する感情の發動の仕方にも、亦素質的傾向の著しく見られるものであつて、生來樂天的の人は多難な境遇に陥つても其の氣分の爽快さを失はないし、夫れに反して生來氣分の陰鬱な人は、たとひ幸福な境遇におかれても尙強く他人の不幸に同情したりなどして、何時も自分の氣分を曇らせて居る傾きがある。斯う云ふ氣分の夫々の特質は幼少の頃から既に現はれ、生涯を通じて著しい變化を受けずに持續するものである。此の氣分的特徴も亦後ちに述ぶるが如く著明なる遺傳傾向を示すものである。併し性格、氣分其他の上でも、或る部分に於いては、外界の影響によつて左右せられ易い點も偶まあるので、殊に非常に強く且永く持續する外界刺戟に對しては、強固なる性格といへども段々と變化を起す事を免れない。例へば周圍の人々から頻々に窘迫せられる様な事が長く續くと、遂には甚だしく他人を猜疑し又畏怖する様な卑怯な弱い性格が出來上る。始めには白紙であつたものでも、生活上屢々偏した印象の

みを受けるとその色に染められて了ふものである。又種々の性格の中或る型では外界の影響如何に依つて多少發達の方向を變換し、元々同じ素質から出て、生育する間に異なつた性格になつて了ふやうな事も有り得るのである。例へば俗に「かたぎ」と名づけて同一の職業や地位に在る人々にはどこことなく共通な性格上の特徴が現はれ、役人かたぎ、藝人かたぎ、職人かたぎなどが生じ、又同じ町村に住むとか同じ様な程度の生活状態の中に永く居ると、又夫れ夫れその境遇に共通な一種の性格的の變化が認められる様になる。「山の手かたぎ」學生かたぎなど之である。之れは恐らく性格的素質の中に謂はゞ中性の、どつちにもなり得る様な部分が存在してを、夫れが一定の外界刺激の持續に依つて皆が一定の方向に變つて行くが爲めであらうと思はれる。しかし夫れは假説に過ぎないが、とにかく性格其のものは單純なものではなく、種々な要素作用から成り立つて居るものであつて、其の中に生來性固定的な部分と、教育により變化せしめ得べき部分と、又環境によつて變化せられる可能性のある部分等があるのであらう。然かしてその中如何なる特質が固定的であるかと云ふ事は、決して必然的ではない。同一の特質

であつても甲の人に於いては固定的であり、乙の人に於いては變化し得べきものである等の、いろいろの相違はあるのであらう。即ち吾々の性格的傾向の遺傳し得べき程度は必ずしも常に同一強度のものでなく、色々な度合があつて、同じ性質の特質であつても非常に堅固な素質として遺傳するもあり、亦時には種々な條件で變化し得る様な、微弱な固着性を以て遺傳する事もあるらしい。斯く考へて來ると、遺傳研究の上で素質の取扱ひ方は又一層複雑になる譯で、つまり其の遺傳特質の種類別を考へると共に其の分量をも考へなければならぬことになる。そして外界の影響に依つて變化されると云ふ場合にも、本當の外界からの刺激と身體の内部から發する刺激とを別けて考へなければならぬ。其の身體内部の刺激と云ふのは、例へば身體的發育の影響で吾々の性格が變つて行くやうな事があり得るから、青年期には青年期特有な性慾の發動とか、空想性の亢進とか、種々な他の年齢に見られない性格上の特徴が起つて來るが、老年期に入ると又老年期に特有な頑冥固陋な自我的な性格を作つて來る。之等は外界の影響によるのである、其の人の身體内部に起る生理的變化が其の性格や氣分の上に影響を及ぼして

變化を起させるのであつて、之れが又時としては種々な特異精神病發生の誘因となる事があるので、例へば早發性癡呆と名づける精神病が青春期に身心の變化を來すべき時期に於いて發病し易いと云ふ事實も、此の點について大いに注意しなければならぬ點であらうと思ふ。

或る個人の性格的特徴の構成や又は精神病の發生などに當つて如何なる程度までその生來性の素質が關係して居るのか、又如何なる程度まで外界の影響が關係して居るのか。それを知るには出來得る限り精細に其の人の從前の生活史を調査しなければならぬ。精神病醫は特に精神病者の一々に就いて遺傳歴を精細に調べるのみならず、其の個人に就いて身體的並びに精神的の發育の模様、外界環境との關係殊に發病の原因と認めらるべき種々な内外の事情等を調査して、其研究資料として居るのである。然して外部からの影響と認むべき條件が其の分量及び性質に於いてさう著しいものと認められないときには、其の精神病發病の原因をば主として遺傳因子即ち素質の上に歸せねばならぬ。斯うして研究を重ねて來ると、多くの種類の精神病は大抵内因性のものであつて、何等外界よりの原因

なくとも發病するもののやうに思はれる。況して同一の種類の精神病が一家系の中に於いて頻繁に現はれる場合には、益々夫れが遺傳性内因性の疾病であると考へなければならぬ。即ち其の發病に外因と認むべき因子の少ない精神病ほど素質的原因の強いものであり、之れに反して一定の外界の原因影響なければ決して生起せない如き精神病は寧ろ素質的の要素の少なきものと認むべきである。夫れ故此の關係を次の様な式で現はして居る。其の式は

$$K = \frac{W}{S}$$

で、Kは疾病を意味し、Sは外界の原因、Wはその個人の外因に對する抵抗力の度を意味する。例へば酒精中毒性の精神病の如きは同じ程度に大酒を飲んでも凡ての人が皆同じやうな精神病に罹るものとは限らない。某の精神病に罹るのは、同一度のSに對して其のWの少ないもの、即ち素質的に酒精に對する抵抗力の弱いものが、病に罹るのである。此の場合に於いて、抵抗力の弱いといふ事がつまり其の人の病を發すべき生來性素質を意味するのである。又憂鬱症を例にとつて見ると、之れに二種の病型がある。即ち些細な失敗や失望等に當つて、突如激しい憂

鬱症を起すもの、即ち内因性のものと、特に重大な或は永續する原因があつて始めて憂鬱症を起すもの、即ち反應性のものと、之れである。その両者が憂鬱症として發呈して居る症狀の度は同じやうであつても、兩者の原因Sと素質Wとの一々に於いては、上記の如く必ずしも同一とは見られないので、内因性のものでは素質的原因が主であるから、其の治療に當つても素質の改善を治療の主體としなければならぬ。相當重大な原因に基いて反應性に起つた憂鬱症では、素質の關與する度が比較的少ないのであるから、唯單に境遇の改善を圖つてやれば、夫れだけの處置で治療するものである。さう云ふ意味で精神病や神經病の治療には、外因如何を餘程顧慮してやらなければならぬ事が多いのである。併し此の憂鬱症の場合にも、素質なるものは決して單一なものではなく、身體的方面のものもあらうし、精神的刺戟性亢進によるものもあらう。又意志薄弱と云ふ如きものもあらう。之等を一樣には考へることは出来ないだらうけれど、兎に角理論上素質と外因との關係は今例示した如きものに外ならぬのである。

併し種々な精神病の病型を通じて觀察すると、此の素質と外因との關係は上述

の如くに何時も簡單に考へるわけには行かない。或種の性格異常の如きは、素質と外因との双方が相俟つて始めて起ると看做すべきものがある。ガウプ(Gaup)の擧げた例に依ると、或る極めて篤實な道德的な上流の生活をする夫婦者が生後數ヶ月の子供を養子に迎へた。此の養子の實の親はあまり其の家庭の模様が芳しくなくて、父は盜癖・虚言癖のある者で、其の上で大酒家で、生計亦至つて貧困のものであつた。併し此の子供は養父母の温かい愛情により何の不足もなく生育せられ、成規の教育も施されたのであつたが、段々年齢の進むに従つて性格上に種々の缺點を現はして來た。必要もない事柄に虚言を言つたり、ちよくちよくと盜癖を示す様な事が起つたりしたので、養父母は教育に依つて極力之れを直さうとしたが、どうしてもその効果がなかつたので、遂に此の子はその貧しい實家に戻される事になつたと云ふ。此の例を見ると、子供に現はれた道德性低格は疑ひもなく親から傳はつた素質的のものと言はねばならぬ。即ち純良な境遇に生ひ育てられ、充分な教育が施されたにも拘らず、其の實の親の持つて居つたと同様な反社會的傾向が強く、其の子の性格の上に現はれて來たのである。併し若し其の子が實

父母の家に於いて育てられ、そして虚言癖や盜癖などを現はしたとしたならば、誰も其の結果に對して、夫れは教育の不完全の爲めとか、或は親の惡習を見習つた爲めとかと解釋するであらうけれど、此の例の場合では決してさう云ふ理由は認められるわけには行かない。即ち此の場合では育ての養父母が全く正しい人であつたから、どうしても環境的影響と云ふことは出来ない。さりとて之れだけの事實から凡ての道德的性格者をば全然素質的のものと斷定して了ふ事も考へものである。素質的のものも無論多くあらうけれど、此の子が實の兩親に育てられた場合を想像せられる如くに、環境の影響に依つてその素質的特徴が助長せられるやうな事も亦あり得べきことと考へなければならぬ。

不平不満に富んだ不愉快な性格(病的紛争症の如き)は偶然其の人の境遇の不幸な爲めに作り出されるやうな事もあり得べきであつて、必ずしもいつも素質にのみ重きを置くことは出来ないかも知れないが、併し或る家系では一家の者皆舉つて斯う云ふ不愉快な氣分の持主であるといふ如き例が屢々見られるのである。何れにせよ、斯ういふ性格は多少の差こそあれ、素質が要素をなすものと考へなければならぬ。

ればなるまい。

又或る大酒家で慢性酒精中毒に陥り、非常に感情の興奮性が激しくなり、猜疑心が強く、自我心の病的に高いものがあつた。此の人は極く年の若い頃から大酒に親んで居つたのであつたから、さう云ふ場合に醫師は誰しも其の性格異常を慢性酒精中毒性症狀であると解して居る。併し一方に此の人の家系の者を調べて見ると、其の家系の中には飲酒の習慣のない人でも同様な性格異常を持つて居る者のある事が認められた。して見ると此の性格異常は必ずしも外因(酒精中毒)によつて來れるものと云ひ切る事も出來ず、或は素質的のものかも知れない。又此の大酒家の子に同様な性格異常を生じた場合には、従前の學說では之れ亦酒精中毒のため其の胚種に發育上の缺陷を生じた爲めであると解したのであるが、之れもさういふ外因(酒精中毒)に因るとせずとも、父から傳はつた遺傳的の性格異常の素質に因ると解釋出來ぬことでもない。

今上に擧げた例を玩味して見ると、種々複雑な精神的現象を遺傳的の立場から解釋するに當つて、素質に重きを置くべきか、外因に重きを置くべきか、色々判斷上

の岐路に遭遇する場合が少なくない。外因が明かに存在してゐても、素質と此の外因との關係(s-w)が異なるに依つて、同じ外因から種々の程度の疾病が発生することがあるのであるが、臨床的には著しい外因しか眼に映じないから、之れに依つて素質の關與する度合を其の病症の強さのみで判定して了ふ事は出来ない。又病的素質を遺傳系統に就いて調べる際に、病名は記載によつてわかるけれど、之れを發生するに至つた外因の程度は一々記録に明記されてゐない爲め、唯同じ名の疾病が傳はると云ふことだけから、一概にその發病を遺傳的素質に因ると定めて了ふ事も出来ないし、又之れに反して同一の原因が共通に存してゐたからと言つて、それを直ちに外因のみに歸して解釋して了ふわけにも行かない。之等兩者を詳細に調べた上で遺傳因子の關係を確定的に究める事は、今日の研究方法を以てしては到底不可能の事である。夫れ故現在の精神病遺傳に關する學問的知識は著しく其の根據の薄弱な臆説も亦ないとは謂はれないのである。

第三章 精神的素質の種類

廣く人類全體を見渡すと、各個人により其の身體の體質的素質が一樣でなく、非常に多種多様のものである事は廣く世に知らるゝ所であるが、其の精神的素質も亦非常に複雑且多種類のものであつて、其中には正常の範圍と認められる智能や性格上の諸種特徴もあり、又病的と認められる異常の症候もある。殊に精神能力の方面に於いて、智能上の素質に就いて云へば、其の優れたものでは天才、才能の如き世に稀なる優秀者から、下つて白癡、其他の低能者に至る間、種々の種類及び段階の素質上の相違がある。今特に「理智」上の素質即ち天賦の才能の方面と「氣分」上の素質即ち感情刺戟性の強弱の方面とを對立せしめて、遺傳上の事實を少しく考察して見たいと思ふ。夫れには精神病の種類の中で、早發性癡呆と躁鬱病とが夫々の兩極端に位して居る特徴ある疾患であるから、今之れを標準としてその特徴を比較して見るのが捷徑であると思ふ。クレチメル Kretschmer は人間に感情型又は回歸型素質 *Zyklothyme Konstitution* と理智型又は乖離型素質 *Schizothyme Konstitution* と

の二つの素質的特徴を區別し、回歸型氣質傾向が特に病的に強く現はれる精神病が躁鬱病であり、乖離型氣質傾向が特に病的に強く現はれる精神病が早發性癡呆であると言ひ、一般普通人に見られる種々な性格の型は右兩極端たる精神異常の範圍に屬さないものでも、此等の兩極端の中間の、其の何れかの一方に偏よつて居るところに當るものだと考へて居る。即ち何人でも今述べた兩極端の氣質の何れか一方の分子を多く有し、他方の分子を少しく混へてゐる氣質者で、其の兩者の混合の割合によつて無數に其の種類があるわけである。そこで寧ろ躁鬱病の方に近い様な氣質の特徴を持つて居るものを一般に回歸型の素質者と言ひ、其の反對に早發性癡呆の方に多少とも傾むいて居る様な氣質傾向を示すものを乖離型の素質者と名づける。

感情型素質又は回歸性素質

氣分が此の素質に屬する人々は社交的で愛想よく、人なつこい氣質で、いつも心持が陽氣で、天真爛漫な開放的で且無邪氣であるから、直ぐに周圍の人達と親しみ

易い。どことなく人情に細やかで同情心が深く、時には過度なセンチメンタルにさへなり易い傾きがある。従つて怒つたり喜んだり又悲しんだり、色々外界の事情に對して感情を動かす事が多く、嬉しい時には雀躍して躁やぎ廻る代り、一旦失望すると全く悲觀して憂鬱になつて了ふ。同一の人で平生快活と抑鬱との兩方の氣分の間を時々交替的に動搖して示す人もあるし、亦躁やぐか鬱ぐか何れか一方に偏つて、素質的に氣凝つて居る人もある。大抵の場合にはいつでも躁やいで快活の様に見える人でも、どこか沈鬱な點をも持つて居るし、其の代り平生無口な陰氣な人であつても時々思ひがけなく諧謔的な上機嫌を示す事もあるものである。即ち同一人に斯う云ふ躁的と鬱的との分子が相混合して存在して居る如き時には、其の混合の割合を氣分率 *Stimmungspportion* と呼んで居る。極端な者では躁揚病に近いほど多血質的なものもあり、又陰氣なものでは常に寡言寡動、無關心のやうであつて、然かも心の奥深い所には温かい同情を潜ませて居る如き者もあり、その中間に色々な程度のもものが澤山存在するが、大抵の人は平生波のうねりの様に爽快と沈鬱との兩極端の間を絶えず氣分が動搖して居るものなのである。

併し其の人の平均的の氣分の中點は兩極端の何れか一方に偏つて存在して居るものである。

氣分の躁やぐ場合には金儲けの大事業を夢み、性愛とか飲食とか享樂的生活の方面に興味を持ち、凡ての事を現實的に考へて理想や空想を嫌ひ、満身の力をこめて花々しい活動をなし、色々な計畫企業をなし、周囲の人々ともよく調和して圓滿に社交的に事を運ぶものである。多辯で、見榮坊で、他人を喜ばせる事を自分の樂しみとして居る。併し夫れと反對の陰鬱な氣分に陥つた場合には、靜かに自分一人でこつそりと満足を求め、然かもその思念は人道的であつて、理論よりは寧ろ感情によつて外界を眺めて批判しやうとする。従つて人を指導したり事業を企てたりするにはあまり適當しないが、何か一つの仕事に堅實に従事して、あまり突飛な事を考へ出さないでこつこつ働く點に於いては、事務に適し、決して他人と衝突をする様な事がない。斯う云ふ人の中には非常に宗教心が深く、宗教的理想から人知れず社會奉仕的に盡力して居る人も世に尠なくない様である。其の外色々個々の場合を觀察して見ると、其の間の混合型、中間型のものが澤山にある。例へ

ば愉快な愛くるしい氣輕な働き手もあり、獨り靜かに自分の生活に満足してゐて、何事につけても、他人の困難な場合に當つては心よく相談相手となる様な同情家もある。此等の感情型の氣分の素質者は非常に感情性が豊かであるから、お互の周囲の友人達から、此の素質者を指摘する事は決して困難なことではない。唯前にも述べた如く氣質の常に變換する様な人もあり、亦比較的其の變換性の乏しい様な人もある點に注意すべきである。

此の回歸型氣質の特徴があまりに著しく病的とも云ふべき程度になつて現はれた場合には之を躁鬱病の中に數へなければならぬが、實際躁鬱病患者の家系には躁鬱病に迄ならずとも、斯う云ふ回歸型氣質の者が甚だ多くあるのを認められるのである。遺傳的研究によれば斯う云ふ感情型の家族に於いては色々な程度の回歸型氣質者が多くあるのみならず、其の身體體型に於いても、すんぐりした肥滿型 *Pyknische Typus* を呈する者が多い。少年の頃は著しい肥滿を示さないでも、中年以後に於いて肥滿型に變つて行く様な者も尠くない。兎に角クレッチメルは躁鬱病者には肥滿型の者が多く、又肥滿の體型の者は大部分回歸型の氣質者であ

ると云ふ事實を多數の實例に就いて證明して居る。

併し如何なるものにも種々な變型はあるものであつて、斯う云ふ回歸型氣質者にも、時としては全くクレッチメルの擧げた條件に適しないやうな變型者もあるのである。即ち抑鬱性の人で事業の失敗などに當つて急に非常な心配症となり、遂に全く自信力を失つて了ふ様な結果になるものが往々にあるが、時としては憂鬱になると共に非常に人との交際を嫌ふ様になり、他人に盾をついて圭角の多い氣質になるものもある。しかし之れは始めから純粹な回歸型の氣質者とは考へられない事で、多分乖離型の氣質が混合してゐるのに因るのであらう。又抑鬱性の人で氣宇が狭く、街學的な人、又大層穿鑿好きで他人の私事を根掘り葉掘り知りたがる人、又は大層怒り易くて好訴的に些細の事にこだはり、何時までも妄想的に之に固執する様な人などは、矢張乖離型の傾向が多分に混じてゐるのである。素質的に抑鬱を示す人でも乾燥無味な生眞面目で少しも諧謔をも解しない人、氣が小さくて世間や人々を敵視して寂しく孤獨に暮す人、神經質の人、感情の冷酷な人、不平不満の多い人等は、完全な典型的の回歸型氣質のものとは名づけられない。又

一方に輕き爽快の氣質を持つものでも、氣分おちつかず浮氣で放逸で、且怠け者で、少しも他人と調和せず、喧嘩ばかりしてゐる様な人は、亦回歸型の中には數へ難い。斯う云ふ人々を調べて見ると、其の家系の中に早發性癡呆型の氣質異常の人々があつたり、又其の本人の身體型も純肥滿型とは云へないで、寧ろ後ちに述ぶる無力型・闘士型の特徴を混入してゐる點を見られるものが多い。

理智型素質又は乖離性素質

上述した所と丁度反對に、乖離型の氣質者では表面上には不平家、皮肉屋であつたり、或はぼんやりして何事もわからない様な様子をして居つても、併し實際其感情性は冷淡残酷で、然かも自我心が強く、些細の事でも直ぐに己れに不利な事は不快に敏感するものである。そして進んでは他人との交際を求めず、獨り靜かに何等の干渉掣肘を受けずに生活する事を好むが、さりとて自分で自分の欲求を抑制する事はせず、又反省しても其の思考や感情は明瞭な純眞さを示さない。多くの優れた乖離型氣質の人の自敘傳等を見ると、斯う云ふ氣質者の内的精神生活が如

何に複雑なものであるかと云ふ事がわかるのであるが、併し俗人に於いてはたとへ乖離型氣質の人でも其の内の生活をはつきりと他人が攪む事は到底出来ない事が多いほど、無邪氣さを缺いてゐる。

回歸型の氣質に躁と鬱との兩極の間に種々な移行の程度がある如く、乖離型氣質には精神の刺戟性即ち俗に云ふ神經過敏と遲鈍即ち精神的無感覺との間の種々な程度の相違が認められる。一方の極端では宛かも「おじき草」の如く一寸でも觸れば直ぐに夫れに對して感動を發し、殊にいつも不平不満で何事にも腹ばかり立て、居るといふ様なものから、他面には全く世間の事に關知せず、少しも自發的の行動をしないで、いつもぼんやりしてゐる如き人に至るまでである。多くの乖離型氣質の人は上記二つの中間に位して、あまり神經過敏でもなく亦冷淡でもなく、同一の人の中に同時に過敏な所と冷淡の所と色々な混合の程度に於いて混つて居るものである。神經過敏の度の著しい所謂神經質の人で其の程度が嵩ずると、著明な貴族的の冷淡さを示し、日常の交際も極く限られた少數の人の間だけに止どまり、趣味も亦狭く、自分の氣に向かぬ事に對しては、全く關心しない。又其の

反對に極端に遲鈍なものでは、その精神作用は早發性癡呆患者の末期に見らるゝ癡呆状態に彷彿たるものである。此の兩極の状態が同一人の性格の中に混在して居るので、冷酷氷の様なものにも、亦觸れば肌を傷つける如き鋭い感覺が潜んで居るのである。従つて其の人の外部に現はれる言動の上のみから其の人の性格の裡に潜む鋭さは到底判断することの出来ぬ事がある。此の神經過敏と無感覺との兩要素の混合してゐる割合を感覺率 *Psychästhetische Proportion* と名づける。回歸型氣質者の氣分率が時期に依つて波の如くに動搖すると同じく、乖離型氣質者の感覺率も年齢の變化に伴つて其の割合を變じて來る事が屢々ある。クレッチメルCrecheの觀察では、普通人は其の青春期に於いては極端な神經過敏的態度を示すものであるが、中年に至ると段々と感覺性が練れて來て其の過敏症を失ひ、且非常に堅固な落ち着いた方向に變じて行くものであるといふ。早發性癡呆等の精神病が青春期に發病することが多いと云ふのも、恐らく斯う云ふ自然の氣質の轉期に當り、夫れが極度に變化して發生する疾病と見るべきであらう。少年の頃より極めて内氣な神經質な子供が、青春期に特に病的に激しい刺戟性亢進を示し、人生問題の

煩悶等の爲めに自殺企圖などを敢てするに至るものが往々あるが、併し年をとると段段と其の傾向がとれて行く。又壯年に入ると共に極めて冷酷な無口な無趣味な氣質者に變つて、之が一生持續するやうなものもなる。其の極端な場合には、云ふまでもなく早發性癡呆と名づくる精神病に陥るのであるが、一般の人で此の乖離型氣質の傾向を有するものは、大抵は神經質の程度に止まるか、或は無感覺な冷淡な人と云ふに止まるか、まづ其の邊の度合にあるものが一番多い。

此の乖離型氣質者の感情は圓滑でなく、どこかに角があつて急激に極端な感情に突變する傾きがある。此の點は回歸型氣質者がどこか圓滿な所を示すのに丁度對立して居る。乖離型氣質者は自分一人であつて自然と激しい精神の緊張を起し、遂には堪え難きに至る程に苦惱する事がある。其の結果が突然外界に爆發して激しい感動の突發を示すやうな事が屢々ある。即ち乖離型氣質者では、激しい感情が突然爆發的に現はれるといふ點に其の特徴があるのであつて、決して何時も同じ様な氣分を持續してゐる事が出来ない。即ち自分で自分の感情をなだらかに調節して行く事が出来ない様である。従つて乖離型氣質者の他人との關係

は非常に親しい信頼を示すか、或は甚だしい敵意を示すかの兩極端に走ることが多く、其の中間のなまぬるい關係をつゞけることは堪え難い所である。社會的關係に於いては乖離型氣質者は全く社交と隔離して高踏的に暮らすか、或は周圍と何等の深い結合なく唯上邊だけの形式的の交際を續けると云ふに過ぎない。併し夫れにも色々の度があつて、社會をこはがる者もあり、亦社會に對して不平をいだく者もあり、敵意を持つもあり亦無關心な者もある。何れにせよ、外界と己れとはさう密接な相互關係なく、自分一己が孤立的に生活する様な態度であり、社會に對して關心するのはつまり社會が自分の理想通りに行かない事を不平に思ふ事に外ならぬのであつて、決して社會の向上利益を希ふが爲めではない。併し時には極く親しい三三の友達との間に斷金の交りを結んで生涯淪らないものもある。今早發性癡呆患者の家系を調べて見ると、矢張斯うした乖離型氣質の色々な型を示して居るものが比較的多く見られる様であるし、又自然や藝術に對する愛好者種々な狭い深い趣味に浸るもの、平生世潮に對して不平不満に富む者等の異常性格者が多い。感情の爆發性の爲めか宗教的熱狂者、或は主義に献身的努力する

者なども乖離型氣質の變形として現はれる事が多い様である。

乖離型氣質の變形としてはその外色々ある。生真面目な人、空想的な夢を逐ふ人、ひねくれ者、執拗者、種々な畸人、變人、神秘的な豫言者、發明に熱中する人、術學的の人、利己的の人、凡て之等は理智型乖離型氣質者の變形と看るべきものである。尙クレッチメルに據れば、之等乖離型氣質者一般を通じて其の身體の方面を見ると、多くの者は無力型 *Astheniker* (虛弱型 *Leptosomer*) と名づけ、瘦形で肩幅が廣く、皮膚の色蒼白く背丈高く、比較的腰幅の狭いやうな人が多く、又其の他に闘士型 *Athletiker* と名づけて、筋骨の逞しい特殊な體形に屬するものも多くある。尙混合型 *Dysplastische Form* と名づけて、内分泌の異常に因つて生ずる一種の病的な體型を持つ者もあるが、前に述べた肥滿型 *Pykniker* に屬するものは甚だ少ない。

乖離型氣質者の中極端な病的傾向を示すものは即ち早發性癡呆患者であつて、此の者は度々述べた如く青春期に於いて發病するが、本病者では發病前と發病後との性格氣質は全く異なつたもので、即ち發病に因つて急激に性格氣質等に急激な病的變化が起るのである。併し病的とは云へない程度に於いて乖離型氣質者

は大抵青春期に性格氣質の變化を示す者が多い事は、前にも述べた如くであり、従つて此の時期に生殖腺内分泌等の影響に依つて其の氣質に變化を起す事は、青年に通有の現象と認むべきであつて、教育上大いに注意しなければならぬ所であらう。併し中には青春期に氣質の變化を示さないですつと快活な社交的な氣質を持續して來た者が、比較的晩年に近づいてから急に乖離性に變つて行くものも無いでもないが、大抵の場合には乖離型の病的な性格は普通の乖離型氣質から變化してくるもので、回歸型氣質のものが後年に突然乖離型に變る如き例は實際上稀にしか見られない事である。

智能の素質(天賦)

氣質の素質に附加して簡單に智能の素質に就て述べておきたい。今日では誰も吾人の有する智的才能(天賦)は遺傳的即ち生來性素質的のものたることを疑ふものはないが、其の固有の天賦の力を十分に發揮せしめるか否かについては、教育、訓練、環境、伴運等色々な外界の狀況も亦大いに關與するのである。しかし如何

に其の環境は不遇であつても其の個人の天賦の才能の穎幹は何所かにいつか現はれるものである。素質的の才能如何と其の人の爲し遂げた事業とは、別問題であつて、事業の成否には外界の偶然の狀況が重要な影響を與へるものなること云ふ迄もないが、外界の事情は同一であつても、天賦の才に乏しいものは、偉大な仕事を成し遂げる事は到底出來ない。所謂智能の根本能力とは、種々な精神的要素作用の結合したものを云ふので、例へば注意作用、注意集中作用、記憶作用、抽象作用、結合作用 *Kombinationsfähigkeit* 判断作用、觀察力等それらの凡てをひつくるめたものが天賦の才である。之は勿論氣質や氣分と密接の關係があるので、持續的の良き氣分と相俟つて始めて其の智能の働らきが無礙に發動するものである。智能の素質の程度に就いては普通の用語に従へば、其の時代人の平均の藝術的並びに學問的能力よりも優れた能力を示すものを能才者 *Talent* と云ひ、夫れに加へて尙豊かな創造的能力を具へ從來の人々の見出し得なかつた方面に其の智能技能發揮の地を開拓し得たやうな特殊な人物を天才者 *Genie* と名づける。天才者の事業の輝かしい完成は、勿論不斷の努力に依るものではあるけれども、其の人の素質の中

にも根ざす特有な能力から湧き出づるものである。此の力の衝動に驅られて眠勉してやまず、遂に絶大なる作業の能力を發揮し、且其の天與の優れたる智能の働きの助けをかりて始めて所謂天才的創造事業が成り立ち得るのである。此の際無論其の者の感情性も亦其の仕事の遂行の上に重大な弾力となるものである。夫れ故、智能の天才的素質の發揮も其の氣質の素質と密接な關係のあるもので、天才的能力の方向と氣質の方向とが相協合して種々の能力發揮の特色が現はれる。即ちクレッチメルに従へば、大抵次の如き種々な區別を生ずるものである。

	感情型 回歸性 氣質	理智型 乖離性 氣質
精神の過敏性及び氣分	氣分は爽快と沈鬱との間に種々の混合を示す	神經過敏と冷酷無感覺との間に種々の混合を示す
精神作用の速度	動搖著しく、敏活と悠々寛々との間	突然飛躍することあり又ゆっくりして遅きことあり、思考及び感情共に速度變じ易し
精神運動性	外界刺激に適應し、自然にして温雅	屢々刺激に適應せず、不自然にしてなだらかならず、突然行動阻礙せらる
體型	肥満型	無力型、闘士型、其他種々の混合型多し
詩人	寫實主義者、諧調主義者	戯曲家(感傷派) 小説家(浪漫派) 形式主義美術家

學者	直觀的 記述的經驗主義者	嚴密なる論理家 系統組織家 形而上學者
指導者	大膽なる政爲者 無礙的事業家 實際的政治家	純粹理想家 專制君主及び熱狂家 冷靜なる打算家

回歸型氣質をもつ天才は、藝術的方面に於いては所謂藝術家かたぎで、人生を少しもこせつかずに眺める氣宇があり、諧謔好で大衆文學向きの文人となるし、學者、研究家としては主として實驗的觀察的の研究に従事し、夫れを正確に觀察叙述するに妙を得、又一面には巧な表現で通俗的に解説し學術普及の爲めに努力する。政治家實業家として少しも勞を惜しまず世話好きで、従つて會社や政黨の創設者となり、主義の爲めに勇往邁進して其所に新事業の天地を拓く如き活動家となるものである。

乖離型氣質をもつ天才にありては、上記とは全く相反した傾向を示すもので、一般に空想性が旺盛で、全く現實世界を超越した高遠な理想を逐ひ、人間の地上生活に就ては比較的冷淡な態度を示すものである。夫故、詩人や藝術家としては形式や傳統を尊ぶ作家又は古典的な藝術家となり、詩を作れば叙情詩、小説を作れば浪

漫、戯曲を作れば悲劇の作者となる者が多い。一面には諷刺と皮肉とを以て人事世事を批判する辛辣なる批評家も出来る。學者としては煩瑣な哲學的考察を喜び、學問に體系をつけ、一貫した理論的研究に傾く。政治家、實業家としては冷酷にして嚴肅な、そして道義的感情的の鋭い理想的君子人として、部下を假借なく處罰するが、併しどこまでも理智的で正義に基き固い信念を以て闘ふ人であり、商業に従事しても非常に算盤が細かく、一錢たりとも忽せにせぬ代り、又非常に綿密な思慮によつて計企的の金儲けをする。上に擧げた所は即ち天才の大體的傾向を示したのみで、其の人の境遇、其の他外界の影響に依つて色々複雑な徑路をとるものなることは云ふ迄もない。

癲癇性素質 Epileptische Konstitution

氣質を基本として考ふれば、回歸型及び乖離型の二大群に分かつべき事は上記の如くであるが、此の二群の中に納め得ない特殊な性格の型が他に澤山あるが、その中精神病學的に特に注意しなければならないのは癲癇性素質である。變態性

慾等は精神異常と認むべきものであらうから茲では論外とするが、癲癇性素質に就いては少しく詳説しておきたいと思ふ。眞性癲癇は云ふまでもなく一種の素質的の疾病であつて、其の眞の原因は未だ明かでないが、家系の劣性遺傳因子として現はれる様である。眞性癲癇症患者を仔細に調べて見ると、癲癇性全身痙攣發作、精神發作(失神發作)の如き特異の徴候としての症狀は更めて云ふまでもないことであるが、其の外に此の發作を呈しない平常時にも癲癇者には特異な癲癇性異常性格が認められる。且癲癇者の家系には癲癇發作は有せずとも、此癲癇性異常性格の傾向を明かに示すものがかなり多く見られる。レーメル Römer の研究した所によると、癲癇者自身は無論、其の同胞で癲癇を有しないものでも、一般に其の性格は自我的に傾き、些細の事より憤りを發して暴行などに出で易い。即ち一旦怒りを發すると夢中になり、意識濁濁の間に我知らず暴行に出づるものらしい。従つてそのため結婚生活者も往々離婚になることが多いと謂はれ、尙其の家系に亘つて廣く調べて見ると、性格が物靜かで、他人との交際を嫌ひ、孤獨を喜び、しかも吝嗇且慾張であり、然かも神佛に對する信仰心の強いものが甚だ多い。之等の特

質は乖離型氣質に非常によく似通つて居る。實際に癲癇の家系者に於いては乖離型氣質並びに其の病的變型の氣質、即ち早發性癡呆等の見られる例が割合に多いのであるが、さりとて癲癇の家系者にも回歸型氣質を持つものが全然現はれないと云ふ譯でもない。

尙レーメルによれば、癲癇の家系者には特異な性格異常をもつ者が多い。非常に自分と他人との區別が八釜しくて、自分の権利を飽くまで主張し、自分のものを他人に貸すことをいやがり、他人が無斷で自分のものを使ふとすぐ憤慨する。何事にも不平をぶつぶつ訴へる。然かも飲酒に對して非常に抵抗が弱く、飲めば病的酩酊を起し易い。又之等の者では突然に其の感動が爆發し、怒りを發すると無鐵砲な亂暴をする。つまり平生から抑壓した感情の内部的壓抑が斯う云ふ機會に一時に爆發するものであらう。併し平生の感情は一般に他人に對して冷酷で、同情心、博愛心等は乏しいが、併し他人が自己に對して親切な態度を示さない、非常に憤慨をする。斯う云ふ特殊な性格をば癲癇様性格 Epileptoide Charakter と名づけ、必ずしも癲癇發作を持たないでも現はれる事がある。然かも斯う云ふ特異性

格の持主は其の身體的體型に於いて身長が高く、筋肉よく發達し、闘士型のものを見る事が比較的多いと謂はれて居る。

素質の混合 Konstitutionslegierung

素質は上に述べた如く必ずしも回歸型とか乖離型とか云ふ一定の型に嵌まつたものばかりが現はれるのでなく、時には其の兩者の中間に位する移行型で、兩方の特質を兼ね備へてゐるものも屢々見られる。氣質に於いて兩方の特質が混合して居る様に見える者にあつては其の體質も亦肥滿型と無力型(或は闘士型)との混合の様な特徴を具へてをり、遺傳系統に於いても兩親から其の双方の氣質の因子の流れを併せて汲んで居ることが證明せられる事が多い。従つてクレッチメルは之れを異なつた素質が遺傳因子の混合によつて同時に現はれたものと解して居る。例へば父は模型的な闘士型體形を具へ、孤獨的な乖離型氣質を持つて居る。母は肥滿型體形でその氣質は著しい回歸型のものである。しかし決して二人とも精神病的のものではない。其の兩者夫婦の間に生れた子供を見ると、一男

兒は母親そつくりの體質、氣質の持主であつた。他の一男兒は少年、青年の頃は快活な打解けた氣質で、體形も肥滿型に近いものであつたが、三十歳頃からその氣質が變つて來て、夫れと共に體形も亦闘士型に近いものになつて來た。又一女兒は丁度此の兒と同じ様に、始めは快活な社交的な氣質であつたが、四十歳頃から段々と乖離型氣質に變つて來て、遂に四十五歳の時早發性癡呆の様な精神病に陥つた。其の體形は始めから通じてずつと無力型のものであつた。夫れからもう一人の男兒は非常に眞面目な學問好きな嚴格な人で、然かも孤寂でなく、友達に對しては大層友誼の厚いものであつたが、其の氣質は乖離型と回歸型とを丁度半々に混合した様であり、體形に於いては殆んど無力型のものであつた。此の人は後ちに精神病に罹つたが、夫れは回歸型氣質者に屬する所謂回歸性抑鬱症であつた。今茲に例示した家族に就いて考へて見ると、兩親の持つて居る特質が混合して兒の素質として存在して居り、夫れが同時に兩親双方の特質が混じて現はれた者もあり、又或年齢期まで其の一方が主となり、其の時期以後に他の一方の特質が主として代つて現はれて來たと云ふ如き者もある。此の氣質、體質の年齢による轉換は、興味

のある事實であつて、或る例では躁鬱病の父と早發性癡呆の母との間に生れた娘が、十七歳の時に始めて興奮的精神病に罹り、夫れから以後十五年間は週期的に躁病と鬱病とが交互に現はれてゐたが、つひに最終の躁病の状態から段々好訴的となり、つひに好訴妄想を形成し、三十二歳の時に明かな早發性癡呆性症狀を發呈し、結局不治の癡呆状態に陥るに至つたものがある。

斯うした類例は屢々多くの學者から擧げられて居るもので、遺傳學上から云ふと優性轉換 Dominanzwechsel と名づけ、即ち一定の時期までは兩親の中の或る一方から受けた特質が優性として現はれるが、後に之れが轉換して消失し、他の一方の特質が優性として現はれる様になる。そして其の兩者が同時に混合して現はれて來ることはないのである。此の優性轉換は動物界に於いても實驗的に屢々見らるゝ事であつて、ラング Lang の報告に依ると、蝸牛の殻の赤色種と黄色種とを交配すると、其の子蝸牛の最初の殻のぬけ替への時には黄色くて、次のぬけ替への時には赤い殻をつくるさうだ。斯う云ふ例は他にも屢々ある。人間に就いても歐洲人と「ホツテントット」人との混血兒は青年期には風采が歐洲人の様に見え、老年

になると「ホツテントット」特有な醜い様子になるし、尙毛髪の色や形なども年齢とともに優性轉換を行ふと謂はれて居る。従つて今述べた氣質の上に於ける優性轉換も又之れに類する現象と考へる事が出来る。

次にカーン Kahn の報告に依ると、マン Mann と名づくる家族の病歴を見ると、父は躁鬱病者であり、母は眞面目な冷酷な交際の嫌ひな乖離型氣質者である。其の娘は回歸型氣質で、非常に活潑な感情性を有し、然かも其の氣分が回歸性に變化して、時には抑鬱となり又時には躁やいで多動多辯且色情的になる。其の他時々發作性に精神異常状態を起すが、其の時には全く早發性癡呆の様な精神症狀を示すけれども、間もなく夫れは完全に治癒經過して了ふ。然かも此の發作を度々繰り返して起したに拘らず、性格は少しも變化を來さなかつたといふ。此の例で見ると前に擧げた優性轉換とは異なつて、明かに回歸型氣質を保持し、夫れが特有な經過を示して居るのであるが、時々精神病的發作を起す時に限つて早發性癡呆の症狀が現はれるのであるが、夫れがなほると再び回歸型氣質に歸る。即ち之れは時々其の現象に於いて轉換を示すものと考へられる。

何れにせよ、此等は理論的に云へば、乖離型氣質の遺傳因子と回歸型氣質の遺傳因子とが混合して、同時に其の子に傳はつて居るのであつて、兩氣質の中間に屬するものと言ひ得る。即ち兩種氣質の特性は遺傳因子として其の儘に夫れ夫れ獨立的に後系に傳はるもので、即ち氣質の素質に對する遺傳因子なるものが存在する事の證明とする事が出来るのである。

精神病學上初老期憂鬱症 *Involutionsmelancholie* と名づくる疾病は、大抵四五十歳位の頃から徐々に憂鬱症の如き症狀を發して來るもので、男子よりも婦人に多く、然かも初老期憂鬱症では心氣性 *Hypochondrisch* 或は虛無性 *Nihilistisch* の強い妄想を有し、苦悶を伴ひ、然かも早發性癡呆者の様に其の感情は寧ろ鈍麻して割合に平氣冷淡な顔貌であつて種々な苦情を訴へる。其の病の轉歸は躁鬱病の抑鬱症の様に完全な跡もなく治癒して了ふ者もあり、亦夫れ以來性格が變つて來て、丁度早發性癡呆の如き特有なひねくれた異常性格に變つて了ふ者もある。此の疾病は内分泌の異常に依つて體質的に發するものであると考へられて居るが、多分さう云ふ更年期に當つて元來混合して藏有してゐた遺傳因子が現はれて來るものなのであ

らう。中間遺傳 *Intermediäre Verbindung* の素質として乖離型と回歸型の兩氣質が混合して同時に現はれて來るものもないでもない。

素質と外因との關係

素質的に遺傳因子は潜在して居つて夫れに對し外界の影響が如はつて茲に始めて、其の素質的傾向を持つた反應性症狀を起す如き精神異常の一群がある。普通人でも、例へば近親者の突然の死に遭つたと云ふ如き不幸の場合には、回歸型氣質者ならば悲歎の涙にくれるであらうが、乖離型氣質者ならば格別夫れに就いて甚だしい悲哀の感動を起さず靜かに諦觀して、却つて神經質的に種々死に基く將來の心配や疑惑を胸に思ひ浮べるであらう。即ち乖離型氣質者は打算的の自我に依つて如何なる出來事に對しても夫れを直ぐに感情性に訴へず、其の後果如何を考慮する態度に出るものである。斯く同一の出來事に對しても夫れに對する反應状態は素質の相違によつて相異なるものである。病的の例で言へば、普通に起り得べき些細の外界刺戟に對しても容易に病的反應を起すやうなものを異

常素質者 *Neuropathic und Psychopathe* と名づけて居る。夫れには精神的反應症狀に異常ある者もあり、亦身體的に特殊反應を起す者もあるし、又兩者相伴なつて起る者もある。例へば慢性酒精中毒に罹つた際に特に幻覺性精神病 *Halluzinose* を起すのは、即ち其の體質的異常反應と看做すべきであらう。カインの例によると非常に感情刺戟性の強い自我的傾向のある夫人で、然かも社交的の性格を持つた人が、四十一歳の時から興奮性の精神病に陥り、臨床的には緊張病と云ふ診斷であつた。然かるに死後解剖して見ると尿毒症の所見が著明に見られたので、之れは恐らく尿毒症に當つて「緊張病様の反應」を呈したものと診斷をせられた。此の人の妹並びに其の母の妹は共に早發性癡呆患者であつた。夫れ故此の人は云ふまでもなく乖離型氣質即ち早發性癡呆の遺傳因子を持つて居つたのであるが、偶々尿毒症に罹つた際に、其の反應狀態として普通人に見られる如き尿毒症の症狀とは異なつて、其の遺傳素質的因子がそこに現はれて、早發性癡呆と思はしめる様な精神症狀が発生したのであらう。熱病等に罹つた際に矢張同様の遺傳因子が影響して色々熱性譫妄症の間に早發性癡呆様の一時的症狀を起す如き例も人のよく知る

所であるが、前に述べた慢性酒精中毒による幻覺症の如きも、必ずしも酒精中毒のみと言はず、微毒によつても幻覺症が起る事實も顧慮しなければならぬと思ふ。一般に云つて熱病の際の譫妄狀態も大抵早發性癡呆性氣質の遺傳因子を持つた者に屢々起り易い現象なのである。

フィッシャー *Fischer* は症候性癲癇 *Symptomatische Epilepsie* に就いて興味ある説を述べて居る。普通の人でも頭部外傷や藥物中毒其の他の原因によつて全身痙攣症狀を起す可能性をもつてゐるが、レドリック *Redlich* の言ふ所によると、過般の世界戦争の際に頭蓋に外傷を受けた者は多數にあつたが、其中、大脳皮質運動中樞領域の外傷をうけて全身痙攣を起した者もあり、又痙攣を起さなかつた者もあつた。又他の部位の外傷で痙攣を發したものもあり、この部分の外傷に必ず痙攣が伴つたと云ふ如き特異性は認められなかつた。即ち痙攣發作を起すのは必ずしも皮質運動中樞の外傷に歸すべきではなくて、何か其の他に別の原因がなければならぬと考へられる。フィッシャーはその痙攣の起原を血管運動中樞並びに其の他の交感神経系中樞に存する旨を述べたが、何れにせよ同じ部位に外傷を受けても、人

によつて其の反應症狀が異なると云ふ事は、恐らく各個人に於いて癲癇を起し易いことゝ起し易からざることゝの差違が、素質的に存してゐるのであると考へなければならぬ。夫れには腦ばかりのものでなく、或は副腎の如き内分泌器官も關與して居るのかも知れない。とにかくフィッシャーに依れば、特異な素質者は其の感情發動の調節として運動の障礙を起すものがある。例へば非常に興奮すると、興奮と共に血管や筋肉に著しい運動障礙を起すに至るもの等は之で、斯う云ふ者が概して外傷によつて癲癇性癲癇發作を發し易い傾向がある。前に述べた癲癇様性格異常を有する者などは、斯う云ふ頭部外傷の際、或は色々の腦疾患の際等に癲癇様發作を起し易い傾向がある。然かも斯う云ふ者の家系を調べて見ると、癲癇様性格異常者が非常に多い事がわかるといふ旨を述べて居る。

メッゲンドルフエル Meggendorfer は麻痺性癡呆も亦特異な素質者に起る疾病である事を述べて居る。即ち特異の體質者は傳染病毒素に對する防禦作用が特に強く、所謂先天性免疫性を持つ如くに、同じ微毒に罹患しても中樞神経系の抵抗強いために麻痺性癡呆に陥る事を免かれる様な特異體質者があると共に、又之れに

罹り易い様な特異體質者もあるのだと云ふのである。又カルプブスチによれば、同じ麻痺性癡呆に罹つても、色々異なつた臨床病型を呈するのは、矢張り素質の差によるのであつて、例へば麻痺性癡呆の中非常に激しい興奮や誇大妄想等を示すもの(誇大型)は、其の家系を調べて見ると、回歸型氣質即ち躁鬱病性の遺傳因子を持つ者であり、之れに反して始めから進行性に癡呆に陥つて行く所謂遲鈍型の麻痺性癡呆にかゝるものは乖離型氣質或は早發性癡呆の遺傳系統を持つ者に見られるのだと云ふ事である。即ち之等によつて見れば、外界の原因に依つて生ずる所謂外因性精神病であつても、其の者の精神的素質即ち遺傳因子の如何によつて色色と其の臨床症狀の相違を來すものであると云ふ事も認めねばならぬ。

第四章 精神病の遺傳現象の綜説

精神病は一般に主として家系の遺傳負因によつて發生するといふことは、古くから云ひ慣はした所であつて、結婚等の場合に相手方の家系の精神神経病的遺傳負因の有無に深く關心することは、世上誰しもよく知れる如くである。しかし専門學術的に研究して見て、精神病の遺傳といふ事實が如何なる種類の疾病に、如何なる法則並に數値に於いて行はるゝものであるかに就いては、今日遺憾乍らまだ十分明確な結論には到達してゐないのである。

併し一般に精神病の發生には、生來性の素質 *Anlage* と外界刺戟、即ち其の生活状態 *Lebensverhältnisse* 等とが相俟つて、始めて發病の重要な因子となるのであつて、即ち其の個人の性格的構成の裡に、既に精神病に罹るべき或る條件を豫め備へてゐるものであり、而して此の素質的の條件は身體の他部の疾患に於けるよりも、精神病・神経病に於いて特別に著しい色合を持つてゐるものなのである。さてこそ古くから一般の人々にも精神病と遺傳との關係の濃厚密接なことが顯著な事實

として注目されるに至つたのであつた。佛蘭西のモールレル *Mord* の如きは、精神病の遺傳は世代を重ねるに従つて段々増悪するものだといふ説を主唱し、之が一時歐洲人の間に廣く信せられたのである。即ちモールレルに依れば、初代に神経質・品行浪費・放逸等を示したもので、其の子の代には卒中・重い神経病・酒精中毒等を起すやうになり、更に孫の代、即ち三代目に至ると變質現象は更に一層進んで、精神病・自殺・低能等の者を生じ、第四代目には生來性の白癡者や畸形者など極端な者を生じて、遂にその家系は滅亡して了ふに至るものであるといふ。ゾラ *Nola* やトーマス・マン *Thomas Mann* などの小説の中には、此のモールレルの變質進行説をとり入れた資料を叙述してゐるものが多くある。此のモールレルの説は今日の研究結果に照して考覈して見れば、大分誇張して述べられた嫌ひがあることは、掩ふべくもないことであるが、しかし佛蘭西學派の中には現今でも尙此の思念に膠着してゐる學者も滿更ないでもない。即ち之等の人々に従へば、内因性精神病と呼ばれる原因の尙不明な一群の精神病（早發性癡呆等）は、一般に此の遺傳的變質的素因に基いて生ずるものであつて、此の病群に屬する種々の精神病はその病像は多型で

はあるが、凡てその精神病を發すべき素質又は傾向が遺傳して、それに因つて發生するのである。即ち其の病型又は症候は一樣でなくとも、その多型性 Polymorphな變化し得べき (Transformierend) 遺傳因子そのものは、世代の進むと共に段々増悪しつゝ傳はつて行くものであると解せられてゐる。實際多數の臨床上の實例を通視して見ると、中には兩親及び祖父父母の有してゐた身體的並びに精神的の特質が、そのまゝ瓜二つのやうに子孫に傳はるものもあり、又時としては子供に起る精神病が、其の發病時期・病型・經過等の些細の點に至るまで、父母或は同胞のそれとよく相互に彷彿してゐる如き例にも屢々ぶつかるのである。しかしさうした例は極く稀な異例ともいふべきであつて、多くのものでは單に發病の傾向が遺傳するといふ程度に止まつてゐる。しかし従前多くの學者のとつた統計を見ると、重症の精神病計りでなく、輕症の性格異常のやうなもの、又は卒中發作の如きものまでも、廣く精神神経病の遺傳といふ中に一所くたに混合してその數字を出してゐるので、その爲めに、その統計的數字は、區々として一致せざる所多く、その高いものでは精神神経病の遺傳率は九〇%に上るといふものから、低い所では僅か四%に過ぎ

ないといふものまであり、全くまち／＼であつて、従つて、精神病の遺傳率についてはまた十分信頼すべき結果に到達してゐないと云はなければならぬ。

ホルレル Koller (1895) は健者及び精神病者三七〇人に就き其の家系の最近親者に精神病的異常者が幾何あるかを調査した所、健者では五九%、精神病者では七六・八%であつたと述べてゐる。又ヂエム Dirm (1905) は健者一一九三人、精神病者一八五〇人の家系の近親者に就いて精神異常者の有無を調査して、次の如き結果を得たと發表してゐる。

	% 家系近親者全部		(内譯) 兩親		(内譯) 間接系者 (祖父母・伯叔父母)		(内譯) 傍系者 (同胞)	
	健者	精神病者	健者	精神病者	健者	病者	健者	病者
精神病者	七、一%	三八、三(五、四)	二、二%	一八、一(八、二)	四、〇%	一〇、九%	一、〇%	九、三%
神經病者	八、二	二、〇(〇、二)	五、七	一、〇(〇、二)	一、三	〇、二	二、二	〇、八
酒客	一七、七	一六、〇(〇、九)	一一、五	一三、三(一、二)	四、九	一、八	一、三	〇、九
卒中患者	一六、一	四、一(〇、三)	五、九	三、二(〇、五)	九、七	〇、七	〇、五	〇、二
性格異常者	一〇、四	一四、九(一、四)	五、九	一二、八(二、二)	三、七	〇、七	一、〇	一、五

自 殺 者	一、一%	一、〇(一、二)	〇、四%	〇、五(一、五)	〇、六%	〇、三%	〇、一%	〇、二%
合 計	六六、九	七八、二(一、二)	三三、〇	五〇、三(一、五)	二九、〇	一五、二	五、〇	一二、七

(括弧内の數字は健者の家系に精神病の現はる、數と精神病者の家系に精神病者の現はる、數との割合を示す)

此の表を見ると、一般に健者の家系の者にも精神異常の現はれる率が決して低いものではないといふ事實が分る。而かも健者の家系の者に精神異常の現はれる率が六七%にも上つてゐるのに、精神病者の家系の者に精神異常の現はれる率が七八%に過ぎずして、僅に健者系の一二倍に止まるいふことは、如何にも精神病發生に對する家系遺傳の危険率が比較的低いことを物語るやうである。しかし之を直接に兩親からの遺傳關係だけに範圍を狭くして計算して見ると、稍々その率が高くなつて、精神病者系の方が一・五倍に上るのを見る(上表第二段)。其の他の間接系の遺傳の率を見ると、精神病者の家系に於いては却つて健康者の半分に過ぎないが、傍系遺傳の率に於いては二倍半を示してゐる。一方にコルレルのつた統計表によると、兩親からの精神病遺傳率は健者系では二八%なのに、精神病者

系では五七・三%に上り約二倍に達してゐるが、全體の家系近親者を總計したものに就いて云ふと僅に一・三倍を示すに過ぎないと報告されてゐる。

ヂエムの表によつて見ても、精神病者にしてその兩親に精神病者を有するものは、健者に於けるよりも約八倍強に上り、その同胞に精神病者を有するものは同じく九倍強に上つてゐるが、その他の親族關係者統計では此の率は二倍半位にしか過ぎない。神経病や卒中者に就いてはヂエムの數字は何等遺傳的關係を示してゐないが、自殺及び性格異常の者に於いては、兩親の直接關係に於いて多少遺傳負因の影響の存在することが認められる。酒客に於いても兩親の直接關係に於て多少遺傳負因の顧慮すべきものあるを示してゐる。兎に角に精神病の遺傳關係に於いて、兩親が精神病である場合に特に濃厚な關係を示すものであることは疑ふべくもない。

それ故精神病の遺傳に就いて考察する場合に於いては、單にその病症の種類如何によつても其の遺傳關係の程度が異なるのみならず、その家系近親度の相違も亦顧慮しなければならぬ譯であつて、中々簡單に之を一括して數字化して現は

すことは、不可能の事のやうに思はれる。しかしピルツ Pilsa が二〇〇〇人以上の精神病患者に就いてその遺傳關係を統計的に調査した處によると、親が酒精中毒者である時其れによる子に對する遺傳は、同じく酒精中毒症や癲癇、癡愚等となつて現はれること多く、又親が自殺或は感情性精神異常を示した場合、その子に躁鬱病として一括せられる疾病として現はれることが多いやうに認められる。又癲癇患者の先系にも甚だ屢々癲癇者を見るし、其の他の發作性の精神神経疾患に於いても先系に偏頭痛を持つ者等の見られる例が多い。麻痺性癡呆、腦動脈硬化、老人性癡呆又は憂鬱症等の患者の先系に卒中患者の見られる例も亦多く、早發性癡呆、悖徳狂の患者の先系に性格異常者が多く、又早發性癡呆や偏執病のものの先系に精神病的素質者が比較的多いやうである。又老人性癡呆者の後系に麻痺性癡呆や動脈硬化症のものが多く、精神薄弱者の後系に早發性癡呆者が多い。尙著しいことは脊髄癆や麻痺性癡呆は、麻痺性癡呆者や早發性癡呆者の後系者に少なくない。又酒精中毒性精神病を發した者に就いて調べると、やはり同様な精神病を發したものの子孫に多いやうである。以上の外、一般に通じてピルツの調査成

績を見ると同種の精神病の直系の遺傳關係が概して濃厚であるやうに思はれる。

ライヌ Reins が體質性不機嫌症者に就いて調査した所に従ふと、その病者の子孫には同様の精神異常のみならず、その精神病の種々な變型乃至特有なる回歸性精神異常 *Zirkuläres Irresein* を有するものが多いことを述べてゐる。或一家系に於いてはその父母系の中の一方の祖先系には躁病性の人が多く、他方の祖先系には鬱病性の人が多く、而して此の兩系のもものが兩親として婚姻してから後に生れた者の系統には、種々の異なつた時としては躁と鬱との兩極端に著しくかけ隔たつたやうな性格異常者が、同胞の中に現はれてゐるのが認められたといふ特異の例證さへ舉げられてゐる。

今迄舉げた統計は、單に先人學者の觀察や記録の中からかき集めて計數を擧げて見たに過ぎないもので、之だけでは少しも遺傳學上の證例としてその學說を樹てる資料とはなし得ないのであるが、メンデルの遺傳法則が生物學上に證明せられて以來は、人間の疾病にもやはりさう云ふ一定の法則に従つて遺傳する事實が存するのではないかと云ふことが疑はれ、リュートン Ruten は特にミンヘン大學の

クレベリオン教授の教室に在つた頃から、多くの精神病について其の遺傳的關係をメンデル法則に照合して解決しやうとして努力をしたのであつた。本講に於いては讀者は既に基礎學的の遺傳法則一般に就いては他の講述によつて詳密に知得せられて居ることと信するが故に、メンデル法則そのものに就いては、特に更めて茲に述べないことにするが、今その中、本講の理路を行る上に極く肝要な點のみを抄出して、讀者の注意を喚起しておきたいと思ふ。それは、遺傳因子 Gen なるものは、父及び母夫々の側に特有なものであつて、發育及び外界の刺戟で多少の影響は受けることがあるが、元來その家系に固有なる特質を固く藏してゐるものである。之が精子及び卵子の双方に於いて、夫々の核染色體 Chromosomen 内に藏有されてゐる。今卵子が受精して胚種となると、その胚種内で染色體の減數分裂現象 Reduktionsteilung が行はれ、精子中の遺傳因子と卵胞中の遺傳因子とが相合體するが、父系及び母系の如何により、此の双方からの遺傳因子が偶然相互に全く同一質なることもあるだらうし、(此の場合を同種胚成 Homozygie といふ) 又相互に異なる質のものゝ合することもあるらう(此の場合を異種胚成 Heterozygie といふ)。其

の異種胚成の場合には、双方からの遺傳因子が相共に並立して、子の形質の上に同様の勢力を以て現はれて來ることもあり、(之は中間遺傳 Intermediäre Vererbung と名くる現象で、例へば白粉花などに於いて白花種と赤花種とを交配すると、兩因子が交つて桃色花の新種を生ずる如きことを云ふ) 又は一方の遺傳因子 a が他方の因子 b に一時打ち勝つて一方因子の a のみが子に現はれ、(之を優性因子 Dominant といふ) 他方因子の b は、消失はしては了はないけれども、一時全くその子の心身には現はれて來ずに了ふ、(之を劣性因子 Rezessiv といふ)。然るに此の双方の因子 a b を共に藏有してゐるもの同士が更に交配して、今度そのものの子へ二個の同一優性因子 aa 又は二個の同一劣性因子 bb が偶然包有されることになる、その因子 a 又は b による現象がそこで著甚に現はれて來る。即ち一旦劣性因子として形質の上には現はれずに潜在してゐた特性(即ち b による現象)が、今度はその子の代に再び其の特質を顯現して來るのである。之を隔世遺傳 Atavismus といふ。併し中間遺傳現象(cd)の場合には、同様の遺傳因子(夫々 cd)を藏有するもの同士が交配すると、第三代目には同様の中間遺傳の現象を示すもの(cd)の外に、祖父と祖母との双方

の夫々の遺傳因子(c及びd)による特性(即ちc及びd自體が夫々分離して現はれて來るものである)之を純粹系にかへるといふ。

精神病に於ける遺傳の現象を考察する場合には、生來性に心神現象の上に来る種々の異常症候の有無を見て、其の現象をば直ちに遺傳因子そのものと早呑込をしてはならぬ。即ち精神病的遺傳因子を藏有してゐる者でも、事態によつては生涯或は或年齢期迄、全く健全に過すものもあり得るし、又或精神病は單に兩親からの單一な病的遺傳因子のみで發生するものではなく、多數の種々な種類の遺傳因子が偶然一定の組合せをしなければ發病しないといふものもある。しかし各種の夫々の遺傳因子 Gene はその個々別々に一定遺傳徑路をとつて傳はつて行くもの故、假に a と b との二つの劣性遺傳因子が相合しなければ發病しないといふ如き疾病ありとすれば、兩親に夫々 a b 双方の劣性遺傳因子が藏有されてゐるとしても、發現の機會は十六交配について一回といふ割合になる。若し a と b と c との三種の劣性遺傳因子が相組み合わせはされなければならぬとすれば、その機會は六十四交配につき一度といふことになる。それ故、實際上産兒數の比較的少ない人

間界に於ては、斯うした複雑な遺傳因子の組み合わせを要する疾患の發現は、それが遺傳現象として起ることは明かであるにしても、その機會は非常に稀有なものと云はざるを得ないであらう。比較的單純な構成を有する生物について實驗遺傳學的に研索した結果によつて見ても、個々の遺傳因子、即ち「ゲン」の數は非常な多種多數に上るのであるから、人間の如き高度に發達した生物に於いては、斯ういふ心身の特質の遺傳因子にしてその個々が夫々獨立に遺傳の法則に従つて其の家系内に傳へられて行く「ゲン」の種類の実數は、事實上到底數へ上げることの出來ないほど夥しいものであらう。して見れば、一と組の兩親の間に生れる數人の同胞者之間には、決して同一の遺傳因子の組み合わせのみを各々が傳へてゐるといふことは決してなく、夫々の者が皆相異なつた遺傳因子を荷つてゐるべきは當然である。たゞ單卵性双生兒の場合のみは、二人が全く同一の遺傳因子を持つてゐるべき筈のものであるから、此の場合には双生兒の双方に於いて、心身に全く同一の遺傳的傾向を示すべきものと斷じても宜しからう。之については更に後文に詳説する。尤も各個の遺傳因子「ゲン」は、凡てが皆個々別々に獨立的に遺傳するといふもの計

りではなく、或病的の遺傳因子はいつも一定の性別染色體と結合してゐて、爲めに伴性遺傳(血友病、色盲の如きは男性にのみ現はれる)の現象を來すものであるのである。又染色體はいつも規律正しく兩親双方の分を半ばづゝ交換するとも限らず、時にはその一部を消失したり、又その分裂が不完全であつたりするやうなこともあるから、それらの事情の爲めにも、遺傳因子はいろいろの影響を蒙ることがあるであらう。又一定の遺傳因子から必ずしも一定の症候が現出するとも限らず、その現象は變化を受けて現はれることもあり、一定の遺傳因子が存在してゐても同時に存在する他種の遺傳因子の爲めに種々の干渉を受けて、その發現の症候に變化を蒙ることも有り得るのである。殊に一定の病的遺傳因子も他の同在する全體の遺傳因子の配合如何によつては、その發現の現象にいろいろの變化を來すことがあるもので、その形式は必ずしも一律でない(異種發現 Heterophanic)。又優性遺傳因子、劣性遺傳因子と云ふ區別も永久不變のものではなくて、時には優生轉換 Dominanzwechsel といふ現象が起り、今迄劣性であつた因子が突然に今迄優性であつた因子にとつて代つてその症候を現はして來ることもある。斯く實驗遺傳學の

方面の研究によつて遺傳の現象が多岐多様であることが分つたので、之が人間の遺傳現象に於いても、同様に複雑に現はれ得るものとすれば、實に人に於ける遺傳現象の法則を證明することは甚だしく困難の事業となるを免かれない。特に人に於いては、實驗的研究が不可能であるから、一層その法則の確認がむづかしいこととなる。それ故、今日迄の精神病の遺傳研究は、偶然に學者の觀察に上つた僅かの家系調査の材料等によつて推察を進めて行かねばならないし、それに今日迄實驗的研究の材料に供せられて來た動植物界の遺傳因子は、極めて單純な且顯著な形態上のもののみで、それを「ゲン」の代表として遺傳法則の研索を進めて來たのであつたが、人に於いてはさう云ふ遺傳因子の種類は極めて多數に存在してをり、殊に精神作用上の事は尙更複雑で、その種々の「ゲン」の間の關係が決して單純なものではあり得ないことも、吳々も念頭におかねばならぬことと思ふ。

臨床遺傳によつて種々の精神症狀の發呈するのには、メンデルの法則により種々多數の遺傳因子の組み合せによつて起るのみに止どまらず、外界の種々の刺激も亦少なからぬ影響を及ぼすものである事は疑ふべくもない。例へば單卵性

双生兒でも、兩人を同時に同一境遇において育てれば、兩者よく相似た形態や性質を現はすものであるけれども、若し兩者を異なつた場所において、或は異なつた方法によつて育てるときには、夫れ々異なつた症候現象を示すといふ實驗の結果もあつて、即ち臨床上の症候は、單に一定の遺傳因子のみによつて規定せられるものではなく、外部の影響により色々な多様性を示すことのあるものである。従つて遺傳によつては單に其の素質的特質或は外界の刺激に對する反應性及び其の反應の特性現象等が傳へられるのみであつて、決して症候其のものが其のまゝの形で遺傳せられるものではない。然して心身の種々な臨床症候は寧ろ平生絶えず及ぼす外界環境等の影響によつて發生するものであり、時には強い遺傳素因が存在してゐるに拘はらず、外界の影響如何によつて却つて夫れが少しも症候として現はれることなしに仕舞ふ様な例も亦決して稀有ではない。殊に精神病の中には、其の種の遺傳因子を藏有して居り乍ら、夫れが早い年齢の頃からは現はれず、年を経て後ちに始めて現はれて來る如きものがある。殊に多くの人は老年に於いて老耄性癡呆と名づくる精神病(老碌)に陥り易い素質を持つて居るのであるが、

之れは假令其の素質が先系から遺傳したものであるにしても、決して若年の頃より現はれると云ふ事はない筈である。ハンチントン氏舞蹈病と名づける神経病は、中年に至つて始めて症候が現はれて來るものであるが、其の家系の遺傳關係は極めて著甚なものと認められて居る。しかし此の病的遺傳因子を持つて居る家系のもので、幼年で早死すると、此の疾病の素質を受けついで居つたかどうかの判定が出來兼ねる場合が屢々ある。又遺傳による病的素質が現はれやうとしても、其の發現の以前又は發現の中途に於いて、他の種々な影響によつて妨止せられ、又は隠蔽せらるゝに至る事も往々ある。例へば非常に優れた音樂上の才能を素質的に持つて居るものでは、同時に生來性遺傳的に輕微な難聽症等を有してゐても、それは注意せられずに過して了ふ事もある。又其の反對に音樂上の才能を遺傳素質的に持つて居る筈の者でも、兩耳の後天的疾患によつて聽器の機能が幼時から障礙されてゐると、其の才能が遂に現はれることなしに了ふ事があり得る。殊に熱性傳染病に對する免疫性の有無の如きは、其の病氣流行の好機會がなければ認知せられないもので、例へばコレラ毒素に對して特に強い感受性を持つて居

る人であつても「コレラ」菌に侵される機会がない限り誰も夫れを認める事が出来ないわけである。夫れに反し先天的免疫性を遺傳的特質として有してゐるものは、平生の場合に往々偶然に認め得られることもあるのである。併し特別な外界の事情ある場合には、遺傳的に相當の免疫性を有してゐる人でも、ふと傳染病に侵される事がないとも云へない。例へば、身體の衰弱強度の疲勞等のある場合には思ひがけなく傳染病に感染する事があり得るものである。夫れと同様に精神病の方面に於いて見ても、其の遺傳的の罹病素質は必ず一定症狀として現はれるとは限らず、種々の外界の事情によつて、夫れが思ひがけなく強度に現はれる事もあり得べく、亦全く現はれずに経過する様な事もあり得るのである。殊に其の著しい例を挙げれば、「ヒステリイ」性素質者の場合の如きは、その人の境遇や生活状態が好適な時には、相當強い「ヒステリイ」性素質を有する者と雖も、一生涯其の病的傾向を發現する事なしに過す事も出来るのである。之れと同様に癲癇様の全身痙攣を起す素質は、殆んど何人にも多少はその傾向が存在して居る遺傳因子なのであるが、所謂癲癇病者に於いては、些細な内外の刺戟からいつも全身痙攣發作が

誘發せられるのに、一般の人々では腦膜炎とか頭部外傷とか、又は特殊の藥劑の中毒とか云ふ様な特別な機因が加はらない限り、此の發作を起すことはないのである。併し斯う云ふ様な外界の機因さへあれば、何人にも同様な精神神經病的反應を必發するかと云ふに、さうではなく、實際には、やはり既に遺傳的にその反應性の素質が存在してゐる所へ、偶々特殊な機因が作働して、始めて之れを起すものなることは疑ひないのである。

動植物學の方面の研究や觀察によれば、時としては不明の原因によつて新しい遺傳形質が突然に發生して來る事實があるとの事で、之れは外界の事情によつて惹き起される事もあり、又種々な胚種の自發的の變化によつて其の染色體の分配又は混合の仕方にも不規律な現象が起つて、夫れに基いて惹き起される事もあるらしい。此の突然に遺傳因子即ち「Genotypus」の變化が起生するが爲めに、動植物の變種又は異常形態の數が豊富にされて行くのであつて、之れを特發變種發生 Idio-variation 又は偶發變異 Mutation と呼ぶ。併し之れに關する吾々の今日の知識は未だ甚だ貧弱なるを免れないのであつて、精神病學や神經病學の方面に於いて斯

う云ふ事實の存在を明かに證明するほどの域にはまだ達して居らない。

リューデン Rüdin が早發性癡呆患者の遺傳關係に就いて綿密な調査を遂げた事は前に述べた如くであるが、その結果によると早發性癡呆は或二個の潜在性遺傳因子が相合して始めて出現する疾病だと考へられるのである。何分人間では一家族の數が比較的に少ないので、夫れ故其の家系の研究を徹底的に數字を以て比照して調べる事は不可能の事であるが、此のリューデンの提説は其の後の他の學者の調査の結果と對照して見ても、恐らく正しいものであらうと思はれる。即ち此の提説に據れば、吾々人間の大多數のものには早發性癡呆に罹りやすい一種特殊な潜在性遺傳因子を藏有して居るものなのであつて、其の中の特別な二個の因子が胚種に於て偶然相合されると、そこに早發性癡呆なる疾病を發生するに至るのであるらしい。然かるにカイン Kain は之れに反對して、早發性癡呆を生起する遺傳因子は同病に獨特なものであり、即ちシゾイド Schizoid と名づける特殊の遺傳因子が優性に遺傳せられ、夫れによつて早發性癡呆が生ずるものである旨を其の遺傳學的研究によつて主張して居る。併しカインも亦父及び母の双方から其の

遺傳因子が傳はり、胚種に於いて兩者が相合しなければ早發性癡呆は生じないと述べて居る點に於いては、やはりリューデンの提説と同様な數字的の結果に達して居るのである。併し乍ら早發性癡呆或は其の病群中に數へらるべき精神病の發病の經過を見ると、どうも只單に遺傳因子の作用のみで起るものとも確信せられ難く、他に有力な外因も考へなければならぬと思はれる。殊に單卵性双生兒の場合等の觀察によると、前記した如く外界の影響も仲々發病の誘因として無視し難い重要な因子である。恐らく本病の發生には、特殊な素因だけが遺傳せらるゝものであつて、之に對して外界の特別な影響と相俟たなければ發病には至らないものであらう。何れにせよ症候の比較的複雑な精神病の幾多の種類に就いて一明確に特異の遺傳因子の干與して居る程度を、單に統計的研究のみによつて決定しやうと云ふ事は、非常に不完全なことでもあり亦甚だ困難な事でもあらう。躁鬱病に對してはリューデンは多數の材料に就いて遺傳の研究を重ねて居る。躁鬱病に就いては古くから夫れが優性の遺傳關係を持つものである事は學者間に認められて居つたのであるが、リューデンは本病の發生には一個の特異優性遺

傳因子と、二個の劣性特異遺傳因子とが合體する事を必要とする旨を述べて居る。又眞性癲癇に於いては、それが單純な特異劣性因子に因つて遺傳するものなる事は略々明かな事實である。併し癲癇に類似する病氣には、非常に複雑な多種の病型がある。今其の一二例を列擧すると、例へば「ミオクローニス」Myoklonusと名づくる病氣の如きは、明かに單一な劣性遺傳因子による遺傳關係を示すものであるが、ハンチントン氏舞蹈病 Huntington'sche Chorea の如きは、恐らく單一な優性遺傳因子によつて遺傳するものであらうと言はれて居る。尙老耄性癡呆の發生には、二個の異なつた優性遺傳因子の相合することが必要であるとメッゲンドルフェル Megendorfer が述べて居る。即ち大脳機能の老衰現象を比較的早年の頃から起しやすい素質と、もう一つは老年期に於いて精神病的反應症狀を起しやすいといふ素質との兩個が必要であると云ふ。之等の種々な精神病の遺傳現象としての學説は、其の觀察や調査の上に非常な困難が伴ふ關係上、何れにせよまだ單に學者の想像といふべき範圍を出でない臆説に止どまつて居るに過ぎない。

上に述べたものは、まだ幾分統計的の調査研究によつて其の遺傳傾向の存在を

確かめ得られたものに就いて述べたのであるが、其の他の多くの種類の精神異常症に對しては、まだ遺傳關係の不明な點が少なからず存するのである。其の中でも特に生來性遺傳性の精神薄弱症即ち低能に就いては、從前から多くの學者が興味を持つて研究を重ねた所であるが、併し低能の發生は單純な遺傳の現象とのみ考へる事は出來ない様である。低能の中その軽度のも、即ち癡愚魯鈍等の病型に屬するものは、往々遺傳關係によらずとも、主として外界の影響、殊に幼時の腦病或は頭部外傷等によつて誘發せられるものが少なくないけれども、大體に於いては遺傳的のものが多く、即ち單一性の優性遺傳因子に因るものと認めて差し支へない。併し白癡の一型として、家族性黒内障性白癡と名くるものは、明かに特異の劣性遺傳因子に基いて生ずるものであると云はれてゐる。白癡が遺傳的に生ずる事はよく云はれる所であるが、併し多くの白癡者はその生殖能力が不完全であるから、白癡其のものが直接に遺傳するといふ事は考へられないことである。次に「ヒステリイ」性の素質に就いては、メドウ Meadow の研究の結果によれば優性因子に因つて遺傳するものであるといふが、もと「ヒステリイ」は其の臨床的症狀が非

常に複雑多岐なものであるから、外見上「ヒステリイ」症状を呈するやうに見える疾患にしても、必ずしも夫れは單一な遺傳關係のみに因る現象と即斷する事は出来ないであらう。又強迫觀念症の如き病者が代々發生する家系等も屢々見られるが、之れに就いて研究した人は、之れを優性遺傳現象だと云ふものもあり、又劣性遺傳現象だと云ふ人もある。恐らく單純なものではないのであらう。

精神變質症に關する遺傳現象に就いても、確實な法則はわかつて居らないし、又第一に臨床的に精神變質症なる名稱の包含する範圍も未だ確定しては居らない。唯ライス *Reiss* やクレッチメル *Kretschmer* 等は、内發的精神異常の極く軽度なものを斯く名づけると考へて居る。之れに就いてエルゲル *Jörgel* は、*ゼロ* *Nero* と名づける一浮浪人の家系に就いて調べた事があり、*エコノモ* *Economo* は一好訴狂者の家系を調べた事があり、ライスやラート *Radt* 等は犯罪者の家系等を調べた事等もあるが、其の結果についてはまだ充分に一致點を見出す事が出来ない。然かも之等を通じて同種疾患の直接の遺傳現象は明かに見られる事がなくて、寧ろ色々な種類の精神神經異常者が同じ家系の中から現はれ、著しいものになると躁鬱病性の

兩親から早發性癡呆の子供が生れたといふ如き例等も擧げられてある。カイン一派の言ふ所に據れば、兩種の異なつた精神病的遺傳因子が相合すると、之れによつてその病氣の症状や經過に特殊な現象を起して來るものであると云ふ。例へば早發性癡呆の各種の病型の中、妄想性癡呆型又は「バラフレニイ」の如きものや、或は興奮と昏迷との時期を交互に示す緊張病や、或は寛解期を屢々挿んで週期性に増悪を來す緊張病の一型の如きものは、恐らく早發性癡呆の遺傳因子と躁鬱病の遺傳因子とが相干涉し合つて發するのみならず、恐らく多少其の兩性因子が夫れ／＼獨立性に交互的に優性として現はれて居るものと看做すべきではないかと考へられて居る。斯う云ふ風に考察して來ると、精神病の病種名を嚴重に區別して定義立てすることは、ちよつと困難のことのやうに思はれる程である。最近クレッチメルは身體の形質と氣質との間に密接な關係がある事實を摘出し、且其の身體的體型の特徴も亦濃厚な遺傳的傾向を示すものである事實を證明して居る。之れに就いては別に再び詳述する積りであるが、此の身體的體型特徴に於いても、今日クレッチメルを立てた純粹な型に屬する人は實際には寧ろ少なくて、種々の

混合移行型の方が多數に認めらるゝと云ふ如くに、精神的方面に於いても、單に氣質や性格の上計りでなく、其の精神病的症狀の上に、同様に複雑な色々な混合移行等の現象が起り得るのではないかと想像せられるのである。併し遺傳研究の上で躁鬱病とか早發性癡呆とか云ふ如き病名を以て多數の病者を總括して、集群的に其の遺傳關係を調査する事は、簡單の様であつて實は却つて、その研究の結果を混雜に陥らしめるものであるかも知れない。例へば同じ早發性癡呆であつても、幻覺の著しく起るものもあり、又妄想の著しく起るものもあり、亦之等の症狀が少しも認められないものもある。夫れと同様に躁鬱病の中にも、幻覺や妄想の往々著しく現はれて來るものもあり、亦一向現はれないものもある。普通健康の人でも時々抑鬱性不機嫌症を呈するものもあり、亦時として幻覺等の症狀さへ起す人も稀ではない。身體的の遺傳因子に就いて云つても、身體一部の個々の畸形等が夫々の遺傳系統を示す事があるのであるから、精神病的現象に就いても、今述べた様な個々の幻覺とか妄想とか云ふ如き一二の症狀が、夫々獨立的に何等か遺傳關係を示す様な事實がありはしまいか。さうして夫等の症狀が色々な精神病種の經過

の中に挿入せられて複雑な臨床症候を呈するに至るのではなからうか。斯う云ふやうな立場から臨床的の遺傳研究を再び見直して、精神病的症狀の遺傳研究に就いて再考を拂ふ必要がありはしないかと考へられるのである。又一面に其の家系に屬するもの全部について精細に検査して、如何なる種類の精神異常症候が遺傳的に密接の關係があるかと云ふ事實を、更に見直して検討して見る必要がある。例へば早發性癡呆患者の家族を検査してみても、本病と著しい性格異常者との間にどう云ふ分配的の關係があるか、躁鬱病患者の家系を調べて、本病と他種の精神病的特徴との間に如何なる關係があるかと云ふ如き調査をも、任直して見なければならぬ。メッゲンドルフ¹は早發性癡呆者の家系の中には反社會的傾向を示す性格異常者が多く見られる旨を述べて居る。斯う云ふ風に遺傳因子は一個であつても、其の基地から色々異なつた症候が現はれて來る事實は、生物學上の遺傳研究にも屢々其の例が見られるのであるから、此の意味に於いても家系調査の結果を調べる事は重大な意義があるものと謂はなければならぬ。

シームス² Siemens の研究によれば、双生兒の臨床的研究は非常に興味のあるも

のである。殊に單卵性双生兒は遺傳學的に云へば、其の兩人の夫々持つ遺傳因子の量及び質はともに全く同一のものであるべきであると考へなければならぬ。夫れ故に、若しも遺傳のみの原因で生活上の諸現象が規定せられるものならば、單卵性双生兒の兩人に於いては、全く同一の形質が現はれねばならぬ筈である。實際上大體に於いて此の事實は認められて居る。然かるに往々外界の影響の異なるによつて單卵性双生兒の兩人に種々の異なつた現象の生起する事實が全然ないでもない。併しさう云ふ場合には凡てその原因は外界の影響の異なるが爲めと解しなくてはならない。此の意味で、シトメンスは色々な經驗をして居るが、殊に精神病學的方面に於ける多數の實例から歸納して、外界の影響さへ同一ならば單卵性双生兒の兩人はともに同一病氣に侵され易いものと考へて居る。之れに關する系統的研究の結果はまだ充分でないけれども、將來双生兒に發する精神病等に就いて更に廣く觀察を進める事は興味が多い研究と思はれる。

上來述べた精神病の範圍に於ける遺傳の事實を總括して考へて見ると、精神病其のものは遺傳關係の濃厚なる事疑ひないけれども、併し狹義に於ける全く同種

の疾患が其の儘遺傳する事はないらしい。唯遺傳的には外界刺戟に對して或反應を起し易いと云ふ素質が傳はつて、之れに對し複雑な外界の原因が加はる事によつて、始めて特殊の精神病型を發生するのであつて、其の精神病に固有な症狀或は固有な病名を限定すべき特殊の單一遺傳因子が、果して存在するものかどうかは、まだ一考究すべき餘地があると思はれる。併し傳染病性精神病に於いても、或る熱性傳染病に罹つた際に、精神病的異常反應を起すといふ事に就いての特別の精神病的遺傳因子が豫め存在して居る事が必要であると考へられるし、麻痺性癡呆は微毒が腦髓を侵す事によつて生ずる疾病なることとは言ふまでもないが、併し微毒に罹つたものの全部が麻痺性癡呆になるのではなく、やはり其の家系に屬する特殊の精神病的遺傳因子を有するものに限つて之れを起すので、然かも其の病型の多種多様なことも、やはり遺傳因子の性質如何によつて然からしめられるものであらう。飲酒家が慢性酒精中毒に罹り、又慢性酒精中毒性精神病殊に酒客譫妄や酒客幻覺症等に罹るのにも、特異の遺傳因子の關係が必要なものと考へられる。酒客に於いて嫉妬妄想の發生するのも遺傳關係は明かに存する。斯う考へ

て來ると、所謂精神病の遺傳因子なるものはビルンバウム Birnbaum の述べた如く、一種の傾向的の意義を示すものに過ぎないのであつて、夫れが直ちに複雑なる疾病單位そのものを現はすものではないらしい。併し夫等の種々の遺傳因子の結合の仕方や、或は外界の刺戟の影響によつて、始めてそこに一定の疾病種別を構成するものであらう。又器質的疾患に罹つた場合にも、その人に或精神病の遺傳因子が存在する時には、特別な病型を作ることがある。例へば腦動脈化症の場合にもそれが純粹の器質的症狀を起すのみに止どまるものもあり、亦神經質の症狀を伴ふもあり、時には躁鬱病様の精神症狀を起すものもある。麻痺性癡呆に於いても、特に著しく回歸性精神異常の症狀を現はす病型もあるし、亦早發性癡呆様の症狀を示す如きものもある。之等は單に病氣に侵される腦の局所の關係に因るものとのみは考へ難く、恐らく遺傳的の精神病の特異の素質が關與して居るためではないかと察せられる。即ち精神病の遺傳因子の作用は、斯くの如く協同的關係が著しいものと認めてよろしからう。

第五章 精神病的變質綜説

前にモレルの提説としての變質進行説を舉げて、人々の持つ精神病的遺傳素質は世代を重ねる毎に段々と其の程度が増強せられて行くものであると云ふ事を述べたが、併し之れは人類全體に見られる事ではなく、唯特殊な家族のみに往々起る現象であつて、恐らく元來其の家系に相當に強い精神病的遺傳因子が存在して居つて、夫れが不幸にも同様な遺傳因子をもつ者と結婚を重ねた爲め、その不良な遺傳因子が段々とその力を強めて行つて、さう云ふ特異の現象を起すに至つたものであらうと解せられる。併し博く多數の實例に就いて見ると、精神病的遺傳因子を持つて居る家系の者でも、世代を重ねる毎に必ずしも段々病者が多く出るやうになるとは限らないで、其の間に配偶者として全く健康なものや或は同質の病的遺傳因子を持つてゐない家系の者等が選まれ、夫等の因子が入り込んで、却つて變質が増進する代りに、再生の機轉によつて病的遺傳因子の力が弱められて行く様な例も亦實際尠なくないのである。併し今日世間一般の通念として、近親

結婚が忌まれ、法律に依つても夫れが禁止せられて居る程であるが、之れは單に道徳的觀念の上から近親結婚を避けようとするばかりでなく、モーレルの變質説をかりるまでもなく、近親結婚によつて其の家系の中に潜んで居る遺傳因子、殊に精神神経病的遺傳因子が、其の力を段々と強めて行く危険が事實の上から證明せられたに因るものである。併し病的の遺傳因子が近親結婚によつてその子孫に強められて行く半面に、優良な素質の遺傳因子も、亦近親結婚に因つて段々と強力となつて傳へられて行く可能性もある。即ち智能や技能上の天賦も、遺傳的に優性となつて傳はるのであるが、併し不良な病的現象の方が著しく目立つが爲めに、斯う云ふ遺傳原理の明かにせられなかつた時代には、單に近親結婚を危険なものとして解したのであつた。殊に生來性の聾啞或は色素性網膜炎の如きは、近親結婚によつて非常に顯著に現はれて來るものであるし、尙世界的に云へば、多くの猶太人又は歐羅巴の由緒の古い貴族の家系等を見ると、近親結婚の風習の爲めに隨分と不具者精神缺陷者等が多數に現はれて居る。我國でも九州の五家庄とか、越後三面村、神奈川縣下等の今尙近親結婚の行はれてゐる土地に於いて調査した結果

を見ると、矢張他に比しては比較的著しく近親結婚の遺傳的弊害を看過することが出來ない様に思はれる。然るに之れに反して近親結婚でも、その夫婦が共に心身健康であつて、加之何等か精神的或は身體的に優良な素質を有して居るものであると云ふと、其の子孫に於いて其の優良な特質が一層強度に現はれて來る爲めに、却つて良好な望ましい結果が期待せられることがある。動植物の實驗に於いても優良な遺傳素質をもつ種を近親の交配によつて益々優良にし、其の特質を純粹な遺傳因子として其の種に固着せしめるやうな實驗が行はれて居る。我國でも徳川時代までは、畫家とか刀鍛冶とか、いろ／＼な技能上の特徴を持つて居るものの家系では、一子相傳の世襲制度が行はれ、同じ職業者の間に於いて優秀な技能者との間に血族結婚を續けて行つて、其の優良な特質を段々と強めて行つた様な風習が行はれたのであつた。併し動物の實驗結果に見ても、近親交配を長い世代の間續けて行くと、一方には受胎仔數の減退を來し、且各個體の心身生活能力の減退が起つて來るのを免れないのである。人間でも近親結婚の風習として行はれる村落では、人口の漸減、虚弱者の増加が見られると言はれて居る。夫等の種々な

現象から見れば、寧ろ優良遺傳因子を双方が具へて居り、然かも其の血縁の遠い男女の間に結婚を奨励する方が、生物學的優生學的には有利の様に考へられる。人間に於いては幸にして血族結婚を道義的に避ける様な思想が、古くから行はれた爲め、今日では此の方面はあまり世の問題にならなくなつて來たが、併し成るべく血縁の遠い者の間に結婚が行はれる方が、双方のもつ優良の遺傳因子が夫れれ、獨立的に力強く現はれて來る爲めに都合がよいと言はれるものゝ、あまりに甚だしく兩親双方の間に其の形質がかけ離れて異なつて居る場合、例へば兩親に甚だしい年齢の差があるとか、或は從前の身分や生活狀態等に著しい差違があるとか云ふ場合には、たとひ同一種族の間でも、あまり其の結婚は好ましくない。況して人種の異なるものの中には餘程注意せねばならぬ事が多い。異人種間の雜種、即ち混血兒は、經驗上その心身の出來の悪いものが多いが、夫れは一體に各人種毎に特有な特異遺傳因子は、永い年代世代の間に夫れれ、其の種族のものに固定的になつて了つたものが多く、夫婦間の人種が著しくかけ離れて異なつて居る場合には、其の双方の遺傳因子の特質も亦著しく違ふから、夫れが結婚に依つて相合さる

と、各々遺傳因子の間の均衡が障礙せられて、双方の人種に共通な、寧ろ人間に共通な最も下等な性質は其の子供に於いて強められて行く代りに、夫婦双方が夫々個人的に固有してゐる良き遺傳因子は、お互ひに調和しないで、其の間の均衡が破られるために、良き特質は寧ろ力を失つて消失して了ふ傾向がある。夫れ故、斯う云ふ雜婚が長い世代に亘つて續くと、其の結果其の種族の者の一般の心身の特質は低下して、其處に新たな不良の特質を持つた新しい人種が出來て來る事になる。

上に述べた様な現象は、夫れによつて其の家系の者全體の近親結婚によつてその不良素質が強められて行くもので、つまり元來精神病的な不良な遺傳因子が、不幸な夫婦間の組合せによつて、段々と其の現象として現出する力を増強するものに外ならず、其の當事者の家族は不幸であらうけれども、それはその家系のみならず、人類全體としては格別に其の性質が低下するものでもなく、又遺傳學上から云つて全く新しい特別な病的遺傳因子が発生して來たと云ふわけでもない。夫れ故、斯う云ふ現象は個々の人々の優生學的知識とその努力とによつて、段々と取り除いて行く事は不可能ではないと思ふ。

然るに一面に胚種其のもの、即ち精子又は卵子の性質は夫々全く正常のものであつても、之れに外界から種々な障礙や影響を與へることによつて、遺傳因子の宿つてゐる染色體にいろいろな變化を起さしめて、其の結果としてそこに新らしい、謂はゞ病的の遺傳因子を造り出して行く事があると云はれてゐる。若し斯う云ふ遺傳傾向の上に異常を生じて來た胚種が、胎兒として生れ出る前に死滅して了ふときには、夫れでその特性の遺傳關係は絶えて了ふけれども、假に斯う云ふ新しい病的の遺傳傾向を持ったものが生育して、更にその子孫を生んで行く場合に於ては、今まで其の家系に見られなかつた特殊な素質を、新たに後系へ傳へて行くことになる。さう云ふ實例が實際世に乏しくない。今其の實驗例について云へば、例へば「ラヂウム」或は「レントゲン」線の如きもので胚種を照射すると、胚種に斯う云ふ特質變異 *Idiovariation* を發生する事實は屢々認められる事である。併し其の確かな原因は今日まだ明かにせられてゐない。兎に角、斯う云ふ様な現象を吾々は狹義に於ける變質 *Degeneration* od. *Entartung* と呼ぶのである。即ち變質とは其の家系に新たなる不良な遺傳的特質を發生する事であつて、然かも其の遺傳的特質

は一般人類の生活目的に對しては好ましくなく、やうな傾向であり、然もさう云ふ不良の特質が發生するが爲めに、寧ろ今迄有つてゐた優良な好ましい特質が、却つてその犠牲となつて失はれて行く場合が多いのである。之は單に一時的の疾病などとは異なつて、變質は其の本人一代にのみ止まらずして、永く子孫にまでも同様の不良特質が傳はつて行き、然かも夫れが段々世代を重ねて蓄積して行くと、遂には其の人種全體の遺傳特質を不良化して了ふ危険がある。即ち變質によつて人類全體に段々と好ましくない特質を蓄積させて行くものである。斯くして、さう云ふ變質的遺傳傾向を持つて居るものを廣く變質者と呼ぶのであるが、變質者は多くは一般社會生活に適合しない特質を持つて居るが爲めに、屢々之れを社會生活から除外しなければならぬ必要に迫られる事が多く、従つてさう云ふ變質者の發生を成るべく防止したい爲めに、優生學に於いては著しい精神病者と相並んで、此の變質者に對しても其の發生豫防の方法に關して重大な注意を拂ひつゝあるのである。

變質現象は家系の中に新たに發生した遺傳因子であるにも拘はらず、丁度田の

面に發生する雜草の如くに非常に力強く増進して行き、又良好な性質の因子を犠牲にして増進して行く傾向がある。殊に變質者は一般に健康人よりも子孫の繁殖率が多くて變質者の同數の世代内の子孫の數は健康人よりも多いのが統計上の常である。従つて自然のまゝに放任して置く時は、變質現象はその家系内で世代と共に益々進行して行き、自づと之れが消滅する如き事はない。斯くの如き變質を新たに構成して行く原因は種々あるけれども、特に著しいものとしては、慢性疾患、例へば結核、微毒並びに種々の慢性中毒、殊に酒精中毒の影響が一番甚だしいと言はれて居る。併し統計的にまだ之等の事實を明確に證明したものは無い。微毒や酒精が其の患者自身の心身のみならず、其の子孫の心身の上にも不良な影響を及ぼすといふ事實は誰しも疑ふものはない。殊に斯かる者の子孫には種々の度の精神薄弱者、癲癇者、精神病的性格異常者等が多く見られ、又先天微毒として腦髓の局所性發育障礙を示すものも亦尠くない。併し之れが新しい不良なる遺傳因子を構成するものであるか否かは直ちに斷言し難い所である。何故ならば、夫等の子供の次の代に、同様な、或は一層不良な素質をもつ孫が生れたとしても、夫

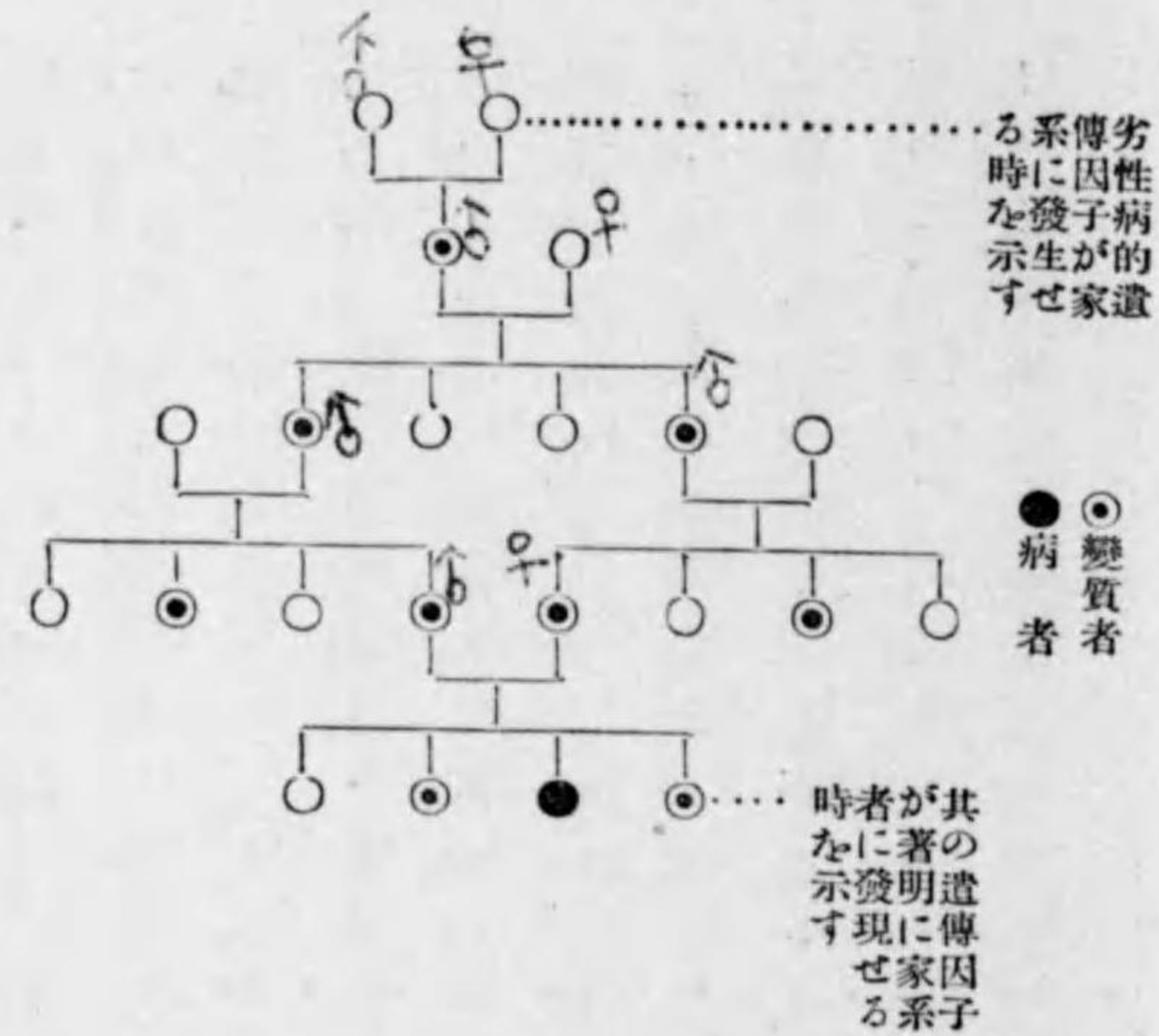
れが直接に不良遺傳因子の影響によつて生じたのであるか、或は子に傳へられた親の微毒或は酒精の重大な作用が間接に關與して居るのであるか、其の邊の説明は未だ明かではない。少なくとも多くの酒客は、自身が遺傳的に既に精神病的の素質を有して居るものが多いから、従つて其の子に精神缺陷者が生じたとしても、夫れを以て直ちに酒精のみの害毒に歸する事は出來ず、或ひは其の家系に本來存する不良の遺傳因子と酒精の害とが相干渉して生じたものであるかも知れない。

メツゲンドルフの研究に依れば、麻痺性癡呆者の子供の中天死したものを除けば、遺傳因子によつて説明することの出來ないやうな障礙を特に示すといふものはなく、麻痺性癡呆者の子供に現はれる精神病的の特質は、微毒とは無關係のものである如くに思はれる。酒客の子供に就いても亦同様な研究結果が發表せられて居る。フスベルは微毒患者の孫、先天微毒患者の子等には、全く健康なものが澤山ある事を述べて居る。夫れ故微毒及び酒精の不良なる影響は唯單に其の直接の子供に於いて短命とか腦の器質的障礙とかを起す位に止どまり、夫れに依つて其の孫の代までも微毒及び酒精の影響を傳へるものではない事が考へられ

るのである。夫れ故若し微毒及び酒精の影響により何世代かの後までも不良な變質的の遺傳因子が傳へられる事實が認められたとしたならば、夫れは胚種其のものに既に不良の素質傾向が存在してゐたものと考へねばならぬと思ふ。

一般に現代の人類に於いては従前から不良な遺傳因子を劣性の形に於いて其の素質の中に潜在せしめて居る事が多いので、従つて種々な結婚的配合によつて例へば次圖に示すが如くに、永い世代の間、劣性因子として現象に出でずに潜んで來た特質が、偶然同種劣性因子の複合の機會に數代の後ちに突然現はれて來る様な例がまゝある。さうすると、如何にもその代に新らしく不良な遺傳因子が出現して來たかの如き感が與へられるのである。今日迄の研究に於いて遺傳傾向の存在は明かだとされて居る病氣の中にも、百年或は數百年の間其の家系に同一の病氣が少しも現はれずに經過し、然かも全く偶然なるが如くに或世代に其の病氣が突發する如き現象が往々認められるのは、恐らく斯くの如き遺傳的の關係に因つて來るものであると思はれる。

斯う云ふ風に考へて來ると、酒精や微毒等の外因によつて變質現象を誘起する



ことがないと言ひ切る譯にも行かず又必ず、あると斷言する譯にも行かなくなるが、恐らく特殊の個人の遺傳的特質として或特異素質が存在して居り、此の素質と酒精中毒との兩因が偶然相俟つて始めて著しい中毒性の精神異常等を起すものと考ふべきであらう。然かも此の所謂素質は酒精に對してのみ反應を起す譯ではなく、種々の他の外界原因に對しても夫れ夫れ異常反應を起すべき特性を持つて居るものであらう。一方に今日の生物學的研究に依れば、出生後に獲得したる心身の性質が果して遺傳すべきものか、又遺傳する事實があるとなせば如何なる形式をとつて遺傳するものかについて不明の點が甚だ多く、又胎生學の研究に於いても、斯う云ふ遺傳上の事實は明かに證明されるまでに至つて居らない。従つて中毒や疾病や其の他の

外因的影響が直ちに新らしい遺傳因子として作動するか否に就いては、まだ確定的な學說を樹てる譯には行かない様である。

次に今日の複雑な社會生活の間に不良の素質を持つものが所謂逆淘汰の作用によつて一層繁殖増加して行く様な事實はありはしないかどうか、之も考へて見なければならぬ。従前は醫學の進歩の幼稚の爲めか、或は一般人の兒童に對する愛念が比較的冷淡であつた爲めか、とにかく乳幼兒死亡率は非常に高く、出生した子供の數の約四分の一は生後一年以内に死亡して了ふ割合であつたが、文化の進むと共に此の率は漸減して來て現時では十五乃至二十「パーセント」に低下して來た。併し之れは決して生れ出づる子供の心身素質が丈夫になつた爲めではなく恐らく従前は自然淘汰の作用で虚弱のため死を免れなかつた様な疾病者或は先天的虚弱者が、醫療の力によつて辛うじて死を免れる様になつたためと考ふべきである。従つて比較的不良なる病的遺傳因子を持ちつゝ尙生存する如き者が人口中に増加して來たと考へる事も出来る。一方に生物學的統計によつても、心身に不良な素質を持つものは却つて健全者よりも繁殖率が高いと云ふ事實も前に

指摘して置いた所である。又生存競争の激甚の爲め比較的優良な素質を持つものが、生活難等の爲めに、其の生殖能力の最も旺盛且良好な時期に結婚生活を営む事が出来ないとか、或は色々な經濟的關係などから産兒制限などをやるために、繁殖率を減退せしめようとする傾向があるのに反し、上流及び下層階級の比較的不良の病的遺傳因子に富んでゐる家系のもの達が、一層産兒率を高めて來ると云ふ結果となり、之も人口中に變質者の割合を多くする一因となるのであらう。殊に統計的に見て、酒客の家系は一般に産兒率が高い。之れは身心の素質に因る事もあらうし、又酗酌の影響で不用意な交媾が行はれ易いのに因るものでもあらうが、然かも酒客の家庭に生れた子供の死亡率は豫想される程高いものでなく、結果に於いて酒客の變質的素質を遺傳したものが世間に段々に増加して行きつゝある事は否めないことである。酒客のみならず、聾啞者、結核患者、犯罪的傾向者の家系に於いても、比較的産兒率の高い事は周知せられて居る所である。一面に身心健全なるものが經濟的關係などから其の生殖能力の旺盛なる時期に結婚生活を営む事が出来ないで、却つて遊蕩などに耽る爲め、梅毒淋病其他の花柳病に罹

るものが多く、之によつて其の健康なる素質を有する子供の産出率を著しく減退せしめて居るらしい。之は世界大戰前戰中並びに戰後の統計等を夫々照し合せて、花柳病の蔓延と産兒率との關係を考察して見ると明かに肯かれる事である。殊に戰爭や職業的偶發事故或は職業的疾患等に依つて、身心健康者がその壯年期に於いて生殖の効果を擧げない中に死亡して了ふものが可なりに多いのである。之等種々な文化的原因が相交錯して、今日の文明諸國に於いては、目下漸次出産數の減少を示し來つたし、一二の文明國に於いては既に出産者數よりも死亡者數の方が多くて、年と共に人口の低下を示すと云ふ如き憂慮すべき現象を呈して居る所もあり、一方に國民全體の身體的並びに精神的素質が段々と低下しつゝあるといふ事實も亦證明せられて居る。目下の情勢によれば、産兒率は國民中の知識階級・有産階級並びに社會的地位の高い階級に於いては、夫れ以下の階級に於けるよりも遙かに低く、然かも經濟的見地からの産兒制限が公然と論議せらるゝに當つて、實際の産兒調節實行者は下層階級よりも寧ろ中産以上の階級の者に普及して居る如くに認められる。斯くて社會的統計によると、精神病者・神經病者・犯罪者

自殺者其の他の精神變質者の數は益々増加に向ひつゝあり、酒精煙草等の消費量も逐年増加しつゝあるのである。フアールベックがスエーデンの貴族で社會的に非常な優位に在る都會生活者の家系について調査した結果によると、初代は特殊な精神的能力を備へた優れた人物で、己れの努力に依つて其の地位をかち得たのであつたが、二三代も経たない中に其の家族の産兒率が著しく減退し、中には結婚する能力のないものまでが多數に生じて來、其の上に酒客や精神病者等も現はれ、又生れた子供も夭死するのが多いし、又特に著しい事は、男子よりも女子の方が著しく澤山に生れて來るといふ事實であつた。

尙明かに認められる事實としては、精神作用の上に特に優れた天賦の能力を持つて居る者の家系では、男子の出生する率が甚だ少ないと云ふ事で、之は經驗上認められる所である。恐らくさう云ふ家系の男性に結合すべき或遺傳因子が特に天才者に於いて力が弱く、女性に結合すべき遺傳因子の爲めに逐はれて了ふが爲めであらうが、其の生物學的の説明は今日未だ明かではない。一體に男胎兒の抵抗力は女胎兒よりも弱いやうで、流産・早産等に因り死んで生れる胎兒の性は男兒

の方が遙かに多い事は既に認められてゐる事實である。之を要するに、今日の文化生活の影響のみならず、現今に至るまでの永い人間社會生活の結果として、上記の如く不良變質の遺傳因子を増加又は増強せしむべき原因は、非常に澤山に存在するのであり、今後に於いても酒精其の他の中毒的影響、心身を劣悪ならしむべき種々の社會的影響、並びに逆淘汰に因る不良な家系の増加等の事實は、益々進行して行くに相違ないから、今日に於いて特に優生學的の見地から社會並びに各個人に於いて新たなる生活上の方向轉換を行はないう限り、多數の文明國民の將來の運命は甚だ寒心すべき道程にあるものと言はなければならぬ。

第六章 變質徵候

現代人の間に見られる變質現象としては如何なる身心の變化が認められるか。今日醫學の方で變質と呼んでゐる現象は、社會の文化が複雑となり社會の種々の現象や生活の様式が益々多岐多様となり、其の變轉の「テンポ」は益々早められつゝある。今日の健康人はその環境の進化し行くに對して自ら其の生活を指導して、此の社會の進運に追隨して行くべき順應能力を有して居る筈である。然るに中には生來性に身心異常傾向があつて斯う云ふ社會生活に適應して行く事の出来ない様な素質を具へて居るものがある。之を吾々は精神變質者と呼ぶのである。尤も身體及び精神の種々な疾病によつて缺陷を生じ、後天的に社會生活適應性を失ふに至つたものは別問題である。しかし神經質者や「ヒステリイ」者の様に感動や心身過勞や其の他の種々な一時的的原因によつて容易く其の精神作用の平衡を失ひ、精神病的状态に陥るやうなものも、其の素質としては矢張り社會生活不適應者と看做さなければならぬ。斯う云ふ神經質者は平生靜かな生活を營んで居

る間はよく之に堪へて行くが、都會などの競争の激甚な生活に巻き込まれると、忽ち其の神経系の働きに破綻を起して、日常生活にさへ堪へられなくなる。然かも吾々の都會生活は段々と社會關係が複雑微妙になつて行き、職業的にも身心の活動は益々或一方に偏する様になり、或る者は毎日頭腦ばかりを使ひ、又或る者は「スポーツマン」や投機業者の様に、感動的に極度な精神的緊張の生活を頻繁に繰り返してゐる様な仕事に絶えず従事し、つまり其の精神作用に極度な無理をしなければならぬ状態である。一面にさう云ふせは、しない精神傾向は外部から強ひられるのみでなく、生れつきの傾向としてさう云ふ偏頗的な身心活動に墮して行くものでもあらう。經濟的には極度の「エゴイズム」に陥り、思想的には熱狂的にある空漠な理想を逐うて現實界に突き進んで行かうとする様な、向う見ずな傾向が起つて来る。對人關係に就いて感情が極めて尖鋭化して苛々しくなつて来るのに反し、自然界との親しみからは益々遠ざかつて行つて、大自然からの感化影響を受ける感受性が段々と減少して来る。健全なる本能作用は漸次その力が減退し、食慾色慾其の他の情慾に就いては其の本能的傾向が段々と不自然となり、産兒、育兒等

に關する本來の生殖本能の働きは失はれて来て、人々は自分の家庭や子供を愛する心が少なくなり、つひには自分の生命への執着さへも失つて軽々しく自殺をする如きものが段々殖えて行く。社交的本能に基く秩序、禮儀、廉耻、徳義等の感情は段々と減退して反社會的傾向を有する者の數が増加して行く。之等は凡て今まで人類が理想として努力して来た本來の社會的生活の傾向に相反するものであつて、つまり人類一般に共通する良き素質傾向の廢頽減失を意味するもので、つまり人類が今まで保持して来た本能の遺傳的素質を逆轉せしめて行く現象と考へざるを得ない。然かも世界戦争以後に於いては各國とも急激に斯う云ふ現象が増激して来た事實を見ると、此の戦争による人の生活的苦惱或は種々な生活條件の變化等が、個人的生活に影響して、斯う云ふ變質的思想傾向を齎した點もあらうし、又前に述べた如く戦争等を原因として種々優生學的條件に反する變質的な不良遺傳因子の增強が起つて来た爲めとも考へられるのである。併し之等の人類の性格や思想傾向等の變化して来たに就いて、夫れが腦髓に如何なる解剖的變化を伴つて居るかといふに、それはまだ全く明かでない。併し一面に身體的外表的の

方面から云ふと、身體的の種々な局所的の變異の特徴は獨立の遺傳因子として家系に傳はつて行くものであり、殊に解剖生理上正常でない所謂不具畸形に屬する如き異常形質でも、矢張り遺傳因子として根強く傳はつて行くものなのである。斯う云ふ身體的變質性は、大抵劣性遺傳因子と考ふべきものであるが、之等が多くは同時に變質的の精神病的遺傳因子と屢々結合して居るものゝ如くである。即ち従前から精神病者、精神薄弱者、犯罪者等の精神病的缺陷を有してゐるものに於いて、比較的頻繁に斯う云ふ身體的畸形即ち變質徵候が現はれるのを認められてゐたのであつて、従つて一面に之等著明なる身體的變質徵候の存在を以て其の家系に於ける精神病的變質の傍證だとさへ考へられたほどである。實際今日でも精神病者、犯罪者其の他精神病的缺陷又は異常を有する者には、身體的變質徵候を多量に伴ふものが多いのであるから、茲に之れを一顧して置くことは必要であらうと思ふ。

身體的變質徵候の最も著しく現はれる局所は、骨格殊に頭蓋、齒牙、上下顎、口蓋、耳殼、眼、生殖器官等であつて、全身的に來るものでは、骨格發育の左右不均齊、全身皮膚色素缺乏等があり、其の他皮膚一部に於ける變化としては母斑、毛生の缺如又は過多、毛の發生の場所の異常等がある。中樞神経系の機能異常の症狀としては振顫、筋肉痙攣、吃音、斜視、發音不明症、遺尿、眼球振盪等が數へられる。何れにせよ、個々の變質徵候は非常に多種類のものであつて、一々詳細に之れを茲に述べる事は煩はしさに堪へないが、先づ別表に示す如きものが其の主な代表的のものである。實際上之等身體的變質症狀を最も多量に示すものは、大脳の高度發育障礙に基く白痴及び痴愚者等であつて、其の他には精神病者、精神變質者、犯罪者に見られる例が甚だ多い。或る人の報告では精神病に罹つた婦人が其の病氣の發作期間中だけ特に著しく口鬚が發生したのを見たと言ふ如き例もある。之は一時的に起る機能性的變質症候である。

併し之等の身體的變質徵候は決して精神變質者に特有なものと看做すべきではなく、健康者にも亦屢々見られることがあるし、又精神病者であつても少しも著しい變質徵候を伴はないやうなものもあるから、變質徵候だけの有無によつて其の者の精神變質ありや否やを判定して了ふ事は甚だ危険である。恐らく如何な

る家系にでも今日現存の人間には、多少とも精神變質的の不良遺傳因子を藏有して居らないものは一人も存在しないであらうから、偶然其の一二が現はれると云ふ事は、その人の精神變質の有無に拘はらず、あり得る事である。レンツ(Lenz)は人の容貌に就いてさへ其の甚しく醜くいものは無論一種の變質徵候と見るべきであるが、著しく美貌なる事も亦一種の變質徵候と考ふべきであると述べて居る。無論精神的に云つても或る能力に於いて著しく劣つて居る事も變質の一種であると共に、又著しく優れて居る事も亦變質の一種と考ふべきである。言ひ換へれば今日現存の人間で全然變質徵候を少しも有して居らぬものは恐らく一人もないであらうけれど、唯夫等の變質的遺傳因子の結合の具合によつて其の變質徵候が精神的方面に於いて社會生活に不適應なる傾向を示すものを、特に吾々は精神變質者として顧慮を拂ふものであつて、社會生活に適應し又社會生活に有利なる能力を備ふる變質、例へば天才者、能才者、其の他特殊の技能に優れて居るもの等は之亦變質ではあるけれども、之れを特に優良變質 *Dégénère supérieur* と名づけ、さう云ふ遺傳因子は寧ろ之を助長せん事を望んで居るものである。然して身體的變質

徵候は凡て之等の精神的變質の遺傳因子と特別な結合をなして居るものであるとは言ひ得るけれども、其の兩者の間に一定不變の關係の存することは認められない。斯く考へると一面に變質徵候を全然有しない所謂絕對健全なる身體に於いては、寧ろ社會的に有利な優良特質をも亦具へないものと考へられないでもない。言ひ換へれば吾々が單に遺傳學の上から變質と呼んでゐるものは、廣く社會的生活に不利なる特異の病的傾向が遺傳因子としてその家系の中に存する時、之を優生學上除去するを望む如き場合に、多少の悪い意味を含ませて斯く名づけてゐるものと解して欲しい。

身體的變質徵候表

(一) 全身

1. 侏儒

② 巨大體格

- ③ 年をとつても小兒性の體格を有するもの
- ④ 男であつて女性體格を有し、又女であつて男性體格を有するもの

(二) 軀幹

- ⑤ 右半身と左半身とに著しい發達上の差違を示すもの
 - ① 脊柱の彎曲
 - ② 脊椎の數の異常
 - ③ 脊椎披裂症あるもの
 - ④ 斜頸
 - ⑤ 胸廓に鳩胸とか漏斗狀胸とかいふ／＼の異常あるもの
 - ⑥ 先天性に「ヘルニア」あるもの
- (三) 四肢
- 1. 手足の指や趾の數が多過ぎたり足りなかつたりするもの
 - 2. 生來性の脱臼あるもの

(四) 頭部

- 3. 先天性の指の癒着あるもの
 - 4. 第五指の末節が生れつき十分に伸びないもの
 - 5. 扁平足
- (四) 頭部
- 1. 水顛(巨頭腦水腫)
 - 2. 小顛
 - 3. 長顛
 - 4. 斜顛
 - 5. 短顛
 - 6. 塔顛
 - 7. 後頭隆起
 - 8. 才槌形の頭
 - 9. 後頭骨後部の削げたるもの
 - 10. 顛頂の凹んだもの

11. 前頭骨上眉弓が異常に肥厚せるもの
12. 毛髪の色が異常
13. 毛の渦巻の多數なもの

(五) 顔面

1. 下顎又は上顎の突出せるもの
2. 顔面頭蓋と脳頭蓋との大きさの不均なもの
3. 生れつき下顎が削げて缺如してゐるもの
4. 前額の削げたもの
5. 大おでこ(前額突出)
6. 顴骨突出
7. 顔面左右不均の著しいもの

(六) 眼

1. 生來性の盲目
2. 眼球頗る小なるもの

3. 眼瞼裂が斜めであつて眼尻が著しく上つたり又は下つたりしてゐるもの

4. 内眥贅皮

5. 眼瞼缺損症

6. 虹彩缺損症

7. 虹彩着色の左右不同

8. 虹彩に斑紋あるもの

9. 瞳孔の卵圓形なるもの

10. 瞳孔の位置中央に存しないもの

11. 眼底に色素を缺けるもの

12. 生來性脈絡膜缺損

13. 色素性網膜炎

(七) 鼻

1. 鼻中隔が甚だしく斜めなるもの

(八) 耳

2. 鼻梁が異常に低いもの
3. 鞍鼻
1. 耳殻の小なるもの
2. 耳殻の頗る大なるもの
3. 左右の大きさ及び形状の著しく不均等なるもの
4. 耳輪の缺けたるもの
5. 耳輪の上部が劇しく折れ曲つたもの(モレル型の耳)
6. 耳輪の縁に尖つたものあるもの(ダーウイン型の耳)
7. 耳輪の上端の尖れるもの(ツェルコピテクス「猿型の耳」)
8. 匙のやうな型をしてゐる立耳
9. 前耳輪脚の曲れるもの
10. 前耳輪脚の數多きもの
11. 耳輪窩の狭小なるもの

(九) 口

1. 過大
2. 過小
3. 唇の異常に厚いもの
4. 兔唇
5. 口蓋隆起
6. 口蓋乃至懸雍垂の左右に分裂し居るもの
7. 口蓋の異常に狭きもの、高きもの、低きもの、急なるもの
8. 齒列の不整なるもの
9. 第二門齒の萎縮
12. 耳輪窩に横走の隆起線あるもの
13. 前耳輪が耳輪に比し著しく高いもの(ウイデルムート型の耳)
14. 耳下垂が頬に密着してゐるもの
15. 前耳輪の一部又は全部を缺けるもの

10. 門齒間隙
11. 乳齒の生じないもの、又は後年迄脱落しないで存在するもの
12. 齒尖の方向の異常

(十) 生殖器

1. 辜丸の小なるもの
2. 辜丸の隠れたるもの
3. 尿道上破裂
4. 尿道下破裂
5. 包皮繫帯の異常なる部位に存するもの
6. 半陰陽
7. 無毛
8. 兩角形子宮等

(十一) 皮膚

1. 副乳(乳房多數あるもの)
2. 男子にして乳房を有するもの
3. 産毛が残留するもの
4. 異常に夥しく毛髮の生ずるもの
5. 兩側の眉毛が中央にて互に接合するもの
6. 一部の色素缺損症(しろあざ)
7. 魚鱗癬
8. 生來性禿頭
9. 毛深き質、多毛症
10. 母斑(ほくろ)の多き人等

第七章 精神素質遺傳の各論

本章及び次章に於いては精神異常の各種の現象型 *Phänotypen* に就いて其の遺傳の型式 *Vererbungsmodus* od. *Erbgang* 並にそれと體型との關係、他の精神素質 *Psychische Konstitution* との關係等を各別に考究して見たいと思ふ。しかも前にも屢々述べたる如く、今日の此の方面の研究資料は未だ十分でないので、従つて之より記述する事柄にも十分の科學的正確さを持つてゐる材料の比較的少ないことは甚だ遺憾の點ではあるが、中には研究者の多大の努力と慧眼とを察せらるべきものも亦あり、大體に於いて、之等の資料を通觀して考察して見ると、信賴すべき興味ある結論も得られるわけで、此の方面に於いて將來の研究を促進すべき重要な暗示も此の中から得られることと思ふ。

智能天賦の遺傳

兩親の智能的素質がその子に遺傳するといふことは随分古くから云ひ慣はし

たことであつて、多くの家庭を見渡して見ても、兩親の良き能力又は不良な智能素質(低能)が子供の多くのものに遺傳する如き例は甚だ屢々あり、時には父か母かその一方の才能と同一程度の才能が子に現はれることもあり、又父と母との双方の異なつた才能が子に於いて相混合し、或は相合併して現はれることもあり、又時には父か母かの複雑な才能が多數の子供に分配されて、各兒に少しづつ現はれるといふものもある。従つて此の方面では確實な遺傳の法則と云ふべきものも立てられない。シヨールペンハウエル *Schopenhauer* は意志は父より遺傳し、智能は母より遺傳する」と云つたが、時として之によく適合するやうな例も見られることがあるが、今日では必らずしも通則とすることは出来ない。その適合すると云ふのは即ち賢い母から學校の成績のよい男兒が生れ、低能な母からは成績不良な兒が出来る。又勇敢な忍耐力強い父から同じ様に堅忍不拔な性格をもつ男兒が出来、卑怯な虚言癖のある父から同様な缺陷をもつ不良性の男兒が出来るといふやうな例が往々見られるといふのである。メービウス *Meibius* も男兒の才能は母に似、女兒の才能は父に似ると云つてゐる。實際男の兒はその智能は母より享け、道義的性情

は父より享けるものが多く、女の兒は父の方より智能の才賦を受け、その性格はむしろ母に彷彿としてゐる如きものが多いやうであるが、しかし之は一般的法則とは云ひかねる。兎に角父よりも母よりも、夫々遺傳すべき素質要素は多種多様なものであるから、従つてその子に於いて素質要素が混合や分配を來す仕方も亦甚だ複雑であること申す迄もない。智能作用は決して生物學的に云つて單一の作用ではなく、多數の遺傳的精神要素、中に氣分の要素迄も相合併して、複合的に構成せられてゐるものなのである。

レンツ Lenz は才能は恐らく體性男又は女に伴ふ遺傳因子であらうと云ひ、ペーテルス Peters は之を事實上に證明したといつてゐる。即ちペーテルスは一一六二人の兒童の學業成績を集計して、之を父母及び祖父母のそれと夫々比較して見た所、大體に於いて女兒の學業平均點數は男兒の平均點數と同じだが、數學と實體の學(即ち歴史・地理・博物學)に於いては男兒の方がかなり成績が宜かつたと云ふ。それから兩親の平均點と兒童の平均點とを比べて見ると、兩親の平均點が悪ければ悪いものほどその兒童の平均點も亦劣つてゐるといふ事實を見た。父と母と

が共に「中等」の成績の場合には、その一方が「上等」他方が「下等」の場合よりも、「中等」の兒童の生れる割合が多いのである。又父と母とが「上等」と「下等」とならば、混合の遺傳によつて兒童の「中等」のものが多かりさうなわけだが、事實は豫期したほど多くないのである。又通例兒童の成績は父又は母の何れか一方に偏してその學課成績の分配例へば算術はよく出来るが綴方は出来ぬ等が酷似するもので、學課目の中でその一部は父に他の一部は母によく似た成績の分配を示す(つまり混合の遺傳)といふ如き例はむしろ少ないのである。それ故ペーテルスは之はメンデル法則によつて特質分離の現象を示すのだと考察してゐる。

今兩親と兒童との智能の比較を性別に研究して見ると、注意すべき結果が得られる。母と女兒との間の相似は、父と男兒との間の相似よりも七〇%多い。その中間に父と女兒との相似、母と男兒との相似が來るのであるが、父と男兒との相似に比して父と女兒との相似は一二%多く、母と男兒との相似は三〇%多い。レンツは此の間に精神的の性特徴と性に隨伴する精神の特異遺傳因子との二要素を假定し、母と女兒と近似するものは兩者が二個あるべき女性染色體の伴性遺傳因

子を藏有する方の一個を共通に持つてゐるためだと説明してゐる。即ち此の場合、性が同一だから精神的性特徴が兩者とも同一で、爲めに其の特質が強く現はれるのである。父と男兒とでは性は同じなのにも拘はらず、あまり近似しないのは、男性染色體は唯一個であつて、父子に共通せられることがないからである。父と女兒との近似の場合が父と男兒との近似よりも多いのは、前者では性染色體が共通であり得るのに、後者では共通し得ないからである。さういふ説明は一應の解釋としてはよく事實に適合するやうに思はれる。しかし全體、性染色體だけによつて解しようとする時には、父と男兒と智能能力の相似てゐるといふ事柄を説明することが出来なくなるし、又學校の成績の點數だけで人の天賦の全體を代表させて考察するといふことも、決して完全とは云へない。

又ソルンダイク Thorndike 等は同胞の間で學業成績が近似してゐるものが多いといふ事實を擧げてゐる。又五十人の双生兒を相互に比較して、双生兒の間では一般の同胞の間よりは二倍の程度に於いてよく學業成績が似てゐると述べてゐる。尙ハイマン及びウィールスマ Heymann u. Wiersma は平均的に云つて、母と子と

の智能の近似は父と子との近似よりもその度が大であると云ひ、之は性染色體が母には二個あり、父には一個しかなく、之が子に傳へられる機會を不等にする結果であると解釋してゐる。しかし性に伴つて遺傳せらるべき精神作用の上の特異素質は、ほんの一部分の能力に過ぎないのであつて、決して全部の智能能力が伴性遺傳をするものではないことをレンツは特に主唱してゐる。

能才及び天才の遺傳

天才や能才は一體如何にして發生するものであるか、従前多くの學者からその家系の遺傳系統其の他が詳密に調査せられ、その發生に就いての多くの學說が公けにせられたのであつた。精子と卵子と双方の核物質が相合して、そこに新らしい胚種が構成せられるのであるが、此の際に兩親双方の夫々にもつ遺傳的素質が相互に抑制せられて、どちらも現はれず、了ふこともあるし、又時にはその素質が一層促進せられて、増強して現はれて來ることもある。メービウス Mochius はゲーテ Goethe の天才的素質は決して單に兩親夫々の者の能力を加へ合せたといふ丈け

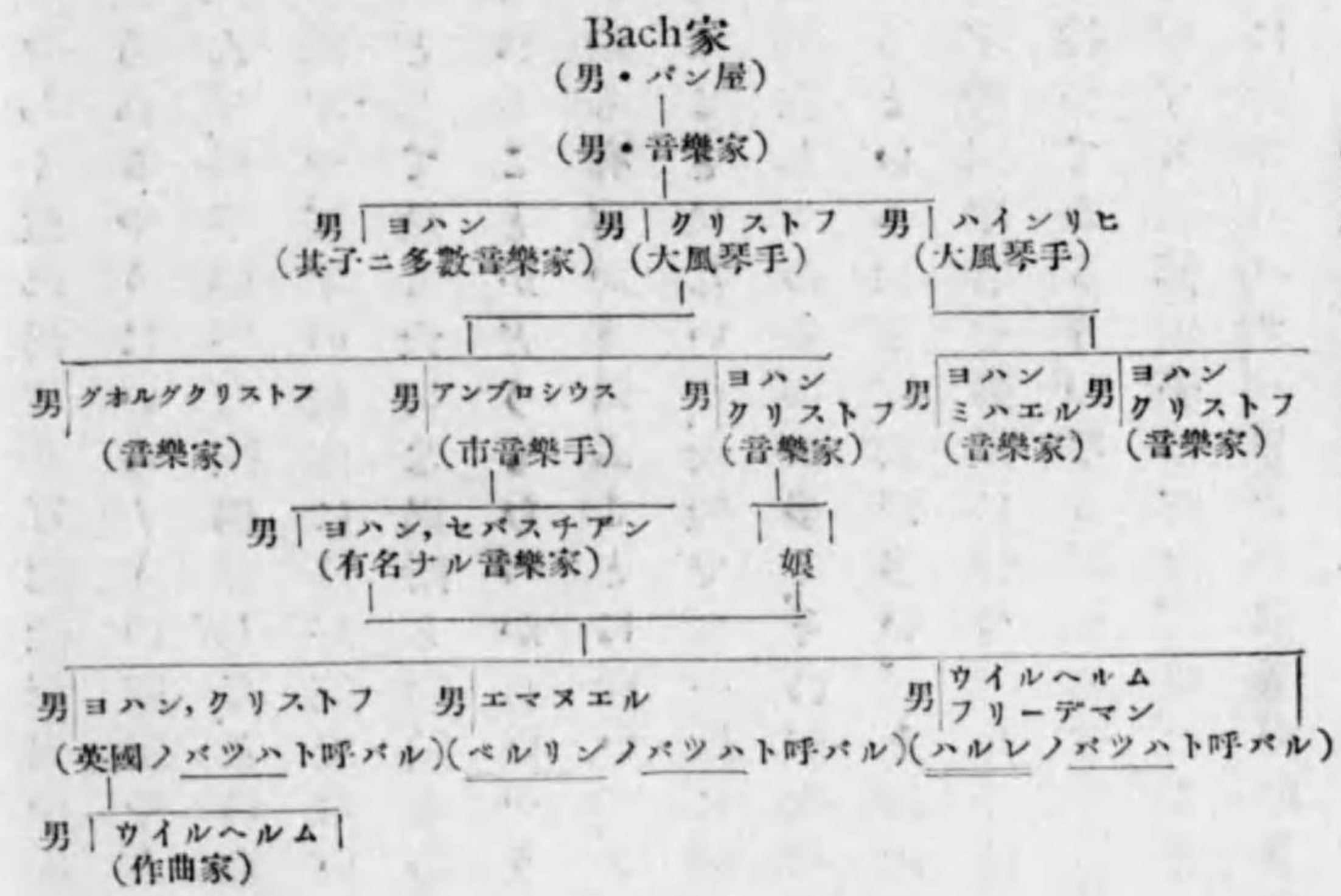
では説明出来ないことである。恐らく良好な状態が神秘的に結合して此のやうな輝かしい結果となつて現はれたのであらうし、その遺傳素質の質そのものみの事もなく、その結合の仕方にも亦特異なことがあるのであらう。何故なら遺傳素質の要素としては、ゲーテもその妹も同一のものを持つてゐるべき筈だが、その妹は決して能力に於いてゲーテに比すべくもない平凡の人であつたのだからと述べてゐる。一體ゲーテの父方及び母方の先祖を調べて見ると、その古い頃には兩者の社會的地位は非常に懸隔のあつたもので、父方の人々は大抵職工か町人か、同様な地位の卑い仲間から妻を迎へてゐるのである。然るに母方の人々は大抵智能の優れたもので、その人々の妻も亦同様に智能階級の家から迎へられてゐるのを認められる。之と同様に身分の低い人の俸が社會的にも智能的にも優れた地位の人の娘を嫁に迎へ斯くて段々其の家系のものゝ才能が家系的に向上して行くといふ實例は多く世に見られる所である。天才の發生には斯う云ふ家系上の特質を認められることがかなり多い。

ライプマイル *Reilmayr* はその天才研究 (*Die Entwicklungsgeschichte des Talentes und*

Genies. 1908) に於いて近親結婚(同一家系のもので同一の天賦を具へてゐるもの間の結婚をいひ、必ずしも親等の極く近いもの間の結婚のみを指して云ふのではない)が、天才發生と重大の関係ある旨を指摘してゐる。即ち藝術的の遺傳的才能といふものがまだ人性の上に乏しかつた時代には、斯う云ふ才能ある家系の者の近親結婚によつて段々その天賦の才能が強められて行つたのである。それ故史を見て斯かる藝術的才能をよく保持し得た民族を見ると、風習として近親の結婚を尙び、種族の違つた人との血の交はりを嚴重に禁止してゐる事實を認められるのである。ライプマイルによれば、血族結婚と天才の發生、即ち民族文化の發達との間には重大の関係がある。即ち同家系、同種族間乃至同地位、同階級間の近親結婚(廣義)により、智能、性格の極度の發達が生じたのであるが、しかし此の同族間の結婚が餘り長い世代の間、偏よつて持續すると、その好良な遺傳因子が其家系に固着して了ふと共に、又種々な害毒も同時に生じて來る。即ち其の弊害と云ふのは、才能賦質が一方に偏よつて狹隘となり、極端な固陋となつて、進歩もなく融通性もなくなつて了ふことである。もと天才はその精神作用の跳躍と活動とが特色であ

り、それには高調に達した才能、即ち家系の遺傳因子が、他の家系の異なつた而かも才能の秀いでた別の人の血と交はらねばならぬ。斯くて優れた才能を有する異なつた家系の間の血の混合によつて、世に稀なる能才・天才の發生を見るに至るものであるとライプマイルは説いてゐるのである。ウエストフール人 Westphalen は一般に世に聞えた忍耐強い、勤勉な、敬神的な、且道義心の固い人々であつて朴訥であるが、しかも賢明であると云はれてゐる。之は長い間の地方的血族結婚の結果、努力と忍耐とによつて斯う云ふ物堅い「根本的性格」がその人民の間に出來上つて來たのであらうが、しかし悲しむべきことには一人の天才も此の土地からは出たことがない。之に反してライン地方や南獨逸地方では嘗て血族結婚によつて能才の遺傳因子を貯へた二つの異なつた種族が相合されて混血したためによるか、その地の人民の特性は快活で、天才者も屢々出現してをるのである。之を總括的に考へて見ると、その人種の血統が比較的純潔であつて、相當永い間その先系に近親結婚が行はれ、しかも又他族との混血も適度に行はれ、父方及び母方の藝術的素質が高潮に發達した際に於いて、その遺傳因子の結合によつて能才又は天才が

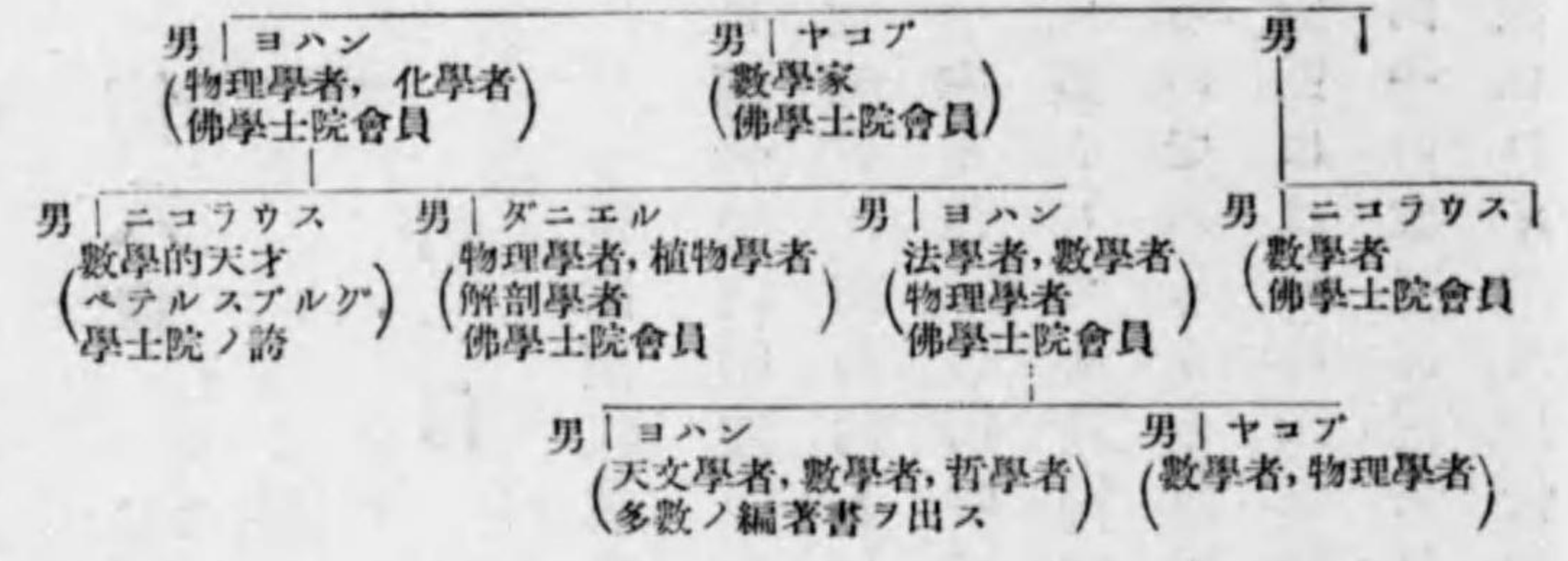
花々しく生れ出づる可能性が生ずるといふことになるらしい。大都會の市民に見られるやうにいろ／＼の階級や人種や出身地の違つた人間同志がごつちやに住んで、得手勝手な配偶をして、その血が混沌として滅茶苦茶に交つたのでは、どうも能才や天才の發生には好適でないらしい。大都會の市民にとつては天才の性格として最も大切な忍耐と勤勉との根本性格 *Wurzelcharaktere* が素質的に醸成せられることがどうもむづかしいやうである。天才發生には父系と母系との何れが最も有力かと云ふことに就いて、ライプマイルはその何れも重要な度に於いて劣ることはないが、女性では一般に素質的に包有してゐる能力も外部に現はれず、に潜在してゐる事が多く、それが次代の男兒に至つて始めて急に天才として發現するといふ如き實例が多い。それ故母自身はさほどの能才者でなくとも、母系に能才者・天才者を多數に持つ場合には、その家系から天才者の發現する有力な因子を持つてゐるものなる旨を述べてゐる。ゲーテやナポレオンに於いてその母方の有する遺傳因子の有力だつたことは、史によつて明かのことであるが、しかし一方に音楽家 *Bach* の家系の如きは、五代に亘つて十五人も優れた男性音楽



家計りを生み出してゐるやうな特別の例もある。

世には音楽的の才能と哲學的數學的の才能とが同一家系のものに現はれることが往々あり、其の間に何等か深い關係がある如くに考へられ、メンデルズゾーン Mendelssohn の一家の如きその好例とされてゐる。又博學的數學的自然科學的才能が何代も引つゞいてその家系の者に現はれることも屢々ある。瑞西のベルヌイイ Bernoulli 家、本邦の箕作吳家、三宅秀家の如き屢々此の例に引用される。又大政治家的統率的才能の直接遺傳の例としては、フリードリヒ大帝 Friedrich der Grosse、カルル大帝

Bernoulli 家



Karl der Grosse 等がよく例に擧げられる。しかしゴールトン Galton 等の廣汎な優生學的の研究によつても、偉人の傳統に就いての確かな法則はまだ今日明かにされてはゐないのである。

天才者の後裔に就いてライプマイルの擧げた統計を見ると、天才者には結婚しない者が比較的によく、又結婚した者でもその産兒の數は一般普通人に比して著しく少なく、男家系だけで三代後までもつゞいたやうなものは極めて稀であるといふ。そして天才の家系のもつ良き遺傳因子は多くは女子の後系によつて傳はるものであつて、男子系だけでは早晚死滅して了ふのが常である。此點でフリードリヒ大帝の家系が大侯から遂にワイルヘルム一世(カイゼル)に至る迄五代も傳はつたといふのは實に異例とすべきであると云はれてゐる。

第八章 主要なる精神病的傾向及び

素質の遺傳の各論

第一節 躁鬱型(感情型)又は回歸型(素質)の遺傳

回歸型(素質)の遺傳

前に感情型回歸型の遺傳素質が特異の遺傳因子に屬する旨を説明したが、右の感情型(素質)は精神病としての躁鬱病と遺傳學的には密接な關係があるので、同一家系の者に同時に夫等の現はれる例は非常に多いのである。クレッチメルは氣質としても精神病としても、躁揚の傾向と抑鬱の傾向とは別種の遺傳因子によるのであらうと假説し、或家系には主として爽快性氣質の人が多く現はれ、又他の家系には抑鬱性氣質の人が多く現はれるといふ例證を挙げたが、又一面には同一の家系に爽快な氣質の人と抑鬱の氣質の人が、同胞中に於てさへ混合して現はれて來、又感情交代性氣質者 *Zyklothymiker* や躁鬱病患者の如くに、同一人

で兩状態が回歸性に出現する如き者も亦見られることがある。そこで假説としては兩親の一方に躁の遺傳因子があり他の一方に鬱の遺傳因子があり、その双方が子に同時に傳はるときには、その子に於いて定期性優性轉換 *Periodische Dominanzwechsel* の理に依つて躁鬱病が起るのであると述べられた。しかし多くの家系例を見ると、又此の感情交代性氣質がそれ自體特異の優性遺傳因子として傳はるやうに考へられる遺傳様式を示すものも見られるのである。

時として兩親の一方が回歸型(素質)者で、その他方が乖離型(素質)者であるやうな場合には、その子に兩型の混合型 *Zyklus-schizohyme Temperamentslegung* が現はれることがある。それに就いては系譜表の例について参照せられんことを願ふが、時としては又優性轉換のやうに、少年時には感情型(素質)を示してゐ乍ら、壯年に至つて漸次氣質が變化して遂に早發性癡呆を發病するに至つたといふ如きものもある。世に屢々見る中年期に於ける氣質の一變するものの如きは斯う云ふ現象に屬すると解すべきものが少なからずあるのであらうと考へられる。

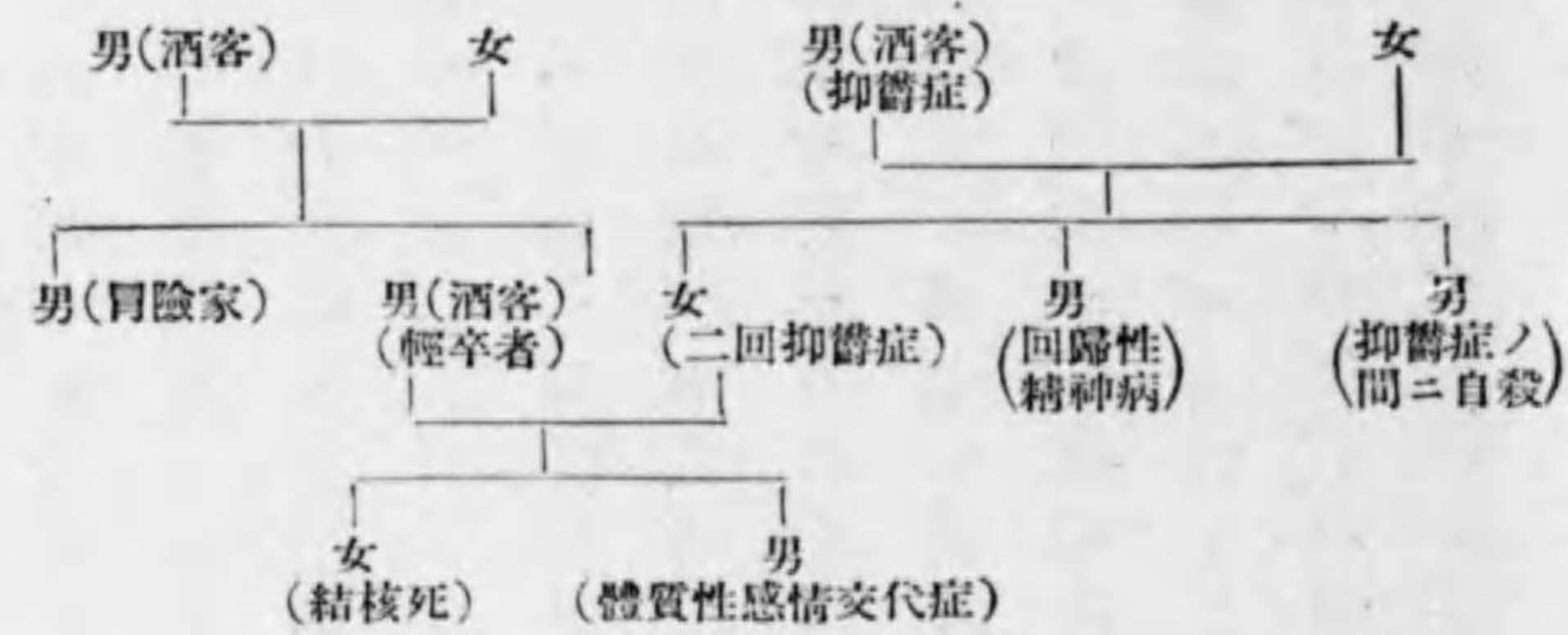
躁鬱病の遺傳

常人の氣質として見られる感情交代症は、それが病的に當すると躁鬱病になると解釋せられてゐる。その點に於て躁鬱病の遺傳關係を研究する上には、感情交代症も重要な注目點となるものである。そこで感情交代現象の發生についてまづ考へて見るに、その交代の機會は環境的外部的に偶然感動を起すやうな機因があつて、其の機會に氣分の轉換を起す人もあり、又何等外部からの精神的原因の認むべきもののないのに、熱病に罹つたとか、婦人ならば分娩、經週期等とかの折に突然氣分の轉換する如き人もある。何れにせよ、交代性氣質者ではその氣分が躁と鬱との間に夫々轉換して行く有様は、比較的不安定 *Tadil* であつて、内外のいろいろの機因によつて動かされるものらしい。それ故或人は躁と鬱とには夫々に特有な優生因子 *Genotypus* が存在するのではなくて、一つの特有な「躁鬱性の因子」なるものがあつて、その上へ何かの外因 *Konstellation* が作動して起す現象型 *Phänotypus* の別に外ならないと解してゐる。即ち或家系で三代の間に憂鬱症者計り發した

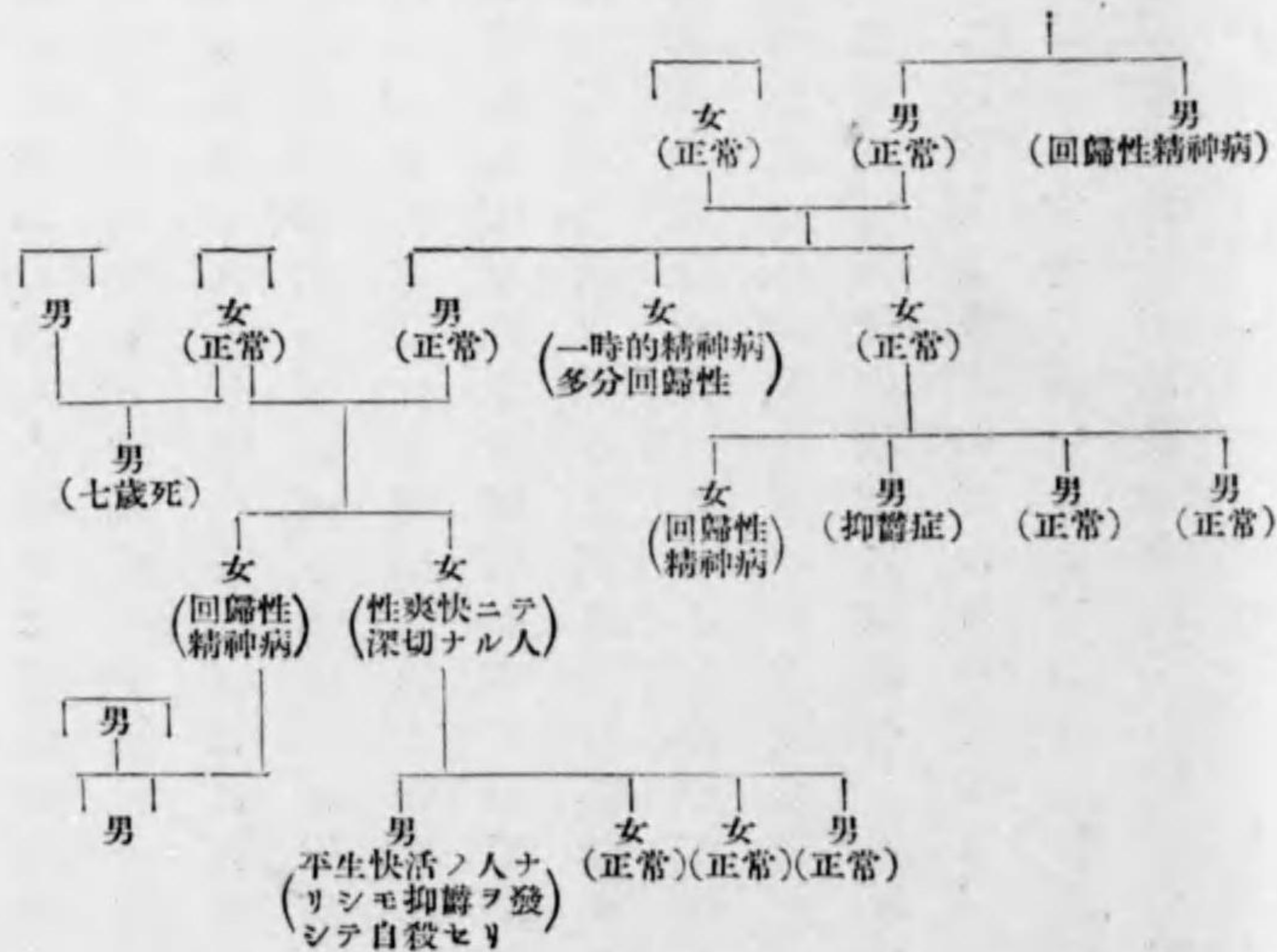
とか、又は週期性躁鬱病者計り發したとか云ふのは、つまりその優生因子は何れも單一であつて、たゞ偶然その家系に他の一定の外因が固着してゐて、それがために夫々の特有な現象型を現はすに至つたのであらうと解せられるのである。一般に躁鬱病者の家系には定期性躁鬱病者のみ、又は定期性鬱病者のみ、又或は週期性躁鬱病者などが、非常に不規律に混合して出現するのを例とするのであるが、之に對してストランスキー *Stranlsky* は、臆説を下して曰く、躁鬱病には一定の素質的反應型が基本となり、之に誘因が加はつて始めて發病するものである。だから幸にして誘因が存しなければ、素質は存してゐても一生涯躁鬱病を發病しないで経過する人もある譯である。その誘因とは何等かの外來性害因 *Exogene Noxe* なのであつて、素質の力が強いときには、日常生活に於いて心身に觸れるやうな些細な刺戟からでも、それが蓄積すると發病させる丈けの強さになるのであるし、素質の力が弱いと、些細な刺戟は害因となり得ず、その躁鬱性は單に體質性感情交代症の程度に止まり、著しい病的症狀を發しませんでした。又刺戟が相當に強いときには、思ひがけない劇しい躁又は鬱の反應狀態を發生することがあるが、一旦病的狀態

を發すると、段々體內に抗毒素の如き反對物質が發生して來て、遂にその害因を中和して、一定の時期の後にはその病的状態が自づと治癒するのである。しかし何回も反復して發病するときには、その抗毒物質生成の力が弱まつて來るためか、治癒の時期が長引くやうになり、終ひには慢性的の躁又は鬱状態が生じて、之が不治のまま、で持續する如きこともある。と、之がストランスキーの説である。即ち躁鬱病の發生には堅固な内因と、並びに變化し易い外因との併合を要するので、その何れの一方が強力に作用するのかは、人と場合とによつて異なる。しかも婦人では、經過期に初老期憂鬱症 *Involutions melancholic* を發し易いことは周知のことで、又一般に男女とも内生殖腺の退行現象に伴つて憂鬱性に傾き易いことも著しい事實である。しかし、どんな新陳代謝的關係によつて之が起るものかは明かでないが、生來性の躁鬱病性素質の上に或内分泌性變化が働きかけて生ずるものたるは云ふ迄もない。而も一面に婦人であつて三十歳位の時に何の故とも分らず憂鬱症を發し乍ら、經過期には何の故障もなしに過ぎるといふやうな人もあるのである。又生物學的に見て同一の躁鬱病性素質者に於いて何故に或時には躁揚状態を

躁鬱病者の系譜(一)



躁鬱病者の系譜(二)



發し、又或時には抑鬱状態を發するのかと云ふに、恐らく血中に相反對的の二種(d)のホルモンが存してゐて、その一方(d)が作用すると抑鬱となり、他の一方(e)が作用すると躁揚となり、又兩者が同量に存してゐて相中和するときは何の症狀も發しないものであらう。而して思春期経過期、老年期、妊娠中等の如き生殖腺内分泌の變動の時期に於いては、之等の(d)(e)の割合に變化を起し、人によつてはいつも同一種のもの(例へば(d)のみを多量に發生して定期性の發病を來すのであらう。現在の所では遺傳素質は同一と假定して、左の如き種々な現象型に影響する他の要因の存在を考へることによつて、躁鬱病の發生を解することになつてゐる。之によつて別表の系譜に見る如き抑鬱、躁病、或は回歸型等種々の病型の者が同一家に種々とり合せて發現して來る事實を、凡て素質の相違に歸因せしめないで、各自の身體上の害因(Noxæ)の相違によつて説明しようとしてゐるのである。

尙注意すべき事實は、躁鬱病は男子よりも女子に多いことである。躁鬱性男兒は屢々同病を有する母より遺傳を受け、躁鬱性の父は多くその娘に同一の病を傳へるといはれる。父から男兒へ本病の傳はる例は殆んどない。之によつて見て

も本病の遺傳因子は多分單一な優性因子ではないのであらう。

リュウデン Rhein の擧げた所によると、一人が躁鬱病者であつて、其の配偶者には全く躁鬱性の傾向なき夫婦の間から生れ出た子供を、多數に綜括して數へて見ると、全數百二十四人中

(一)明かに内因性の氣分轉換を示す子供は三十九人即ち三一・四%

(二)著しい躁病性又は鬱病性(回歸性)の氣分を示す子供は四十九人即ち三九・五%

(三)通常の感情性回歸性の氣分を有する者は七十四人即ち六〇・〇%

で、即ち兩親の精神病そのものの傾向が直接にその子供に傳はる率の非常に高いことが認めらるゝと共に、又此の種の遺傳は主として優性遺傳因子によるものなことが分るのである。しかし種々の家系によつては、もつと複雑な現象が現はれる所を以て見ると、その遺傳因子は單一性のものではなくて、恐らく基本となるべき躁鬱病性因子の外に、之が發現を促進する因子や、その發現を抑止する因子や、いろ／＼他のものが複合し、それによつて家族に於ける病氣の輕重、躁と鬱との別、其他が定められるのであらう。本病が女子に多い所から見ると、幾分性に伴ふ特

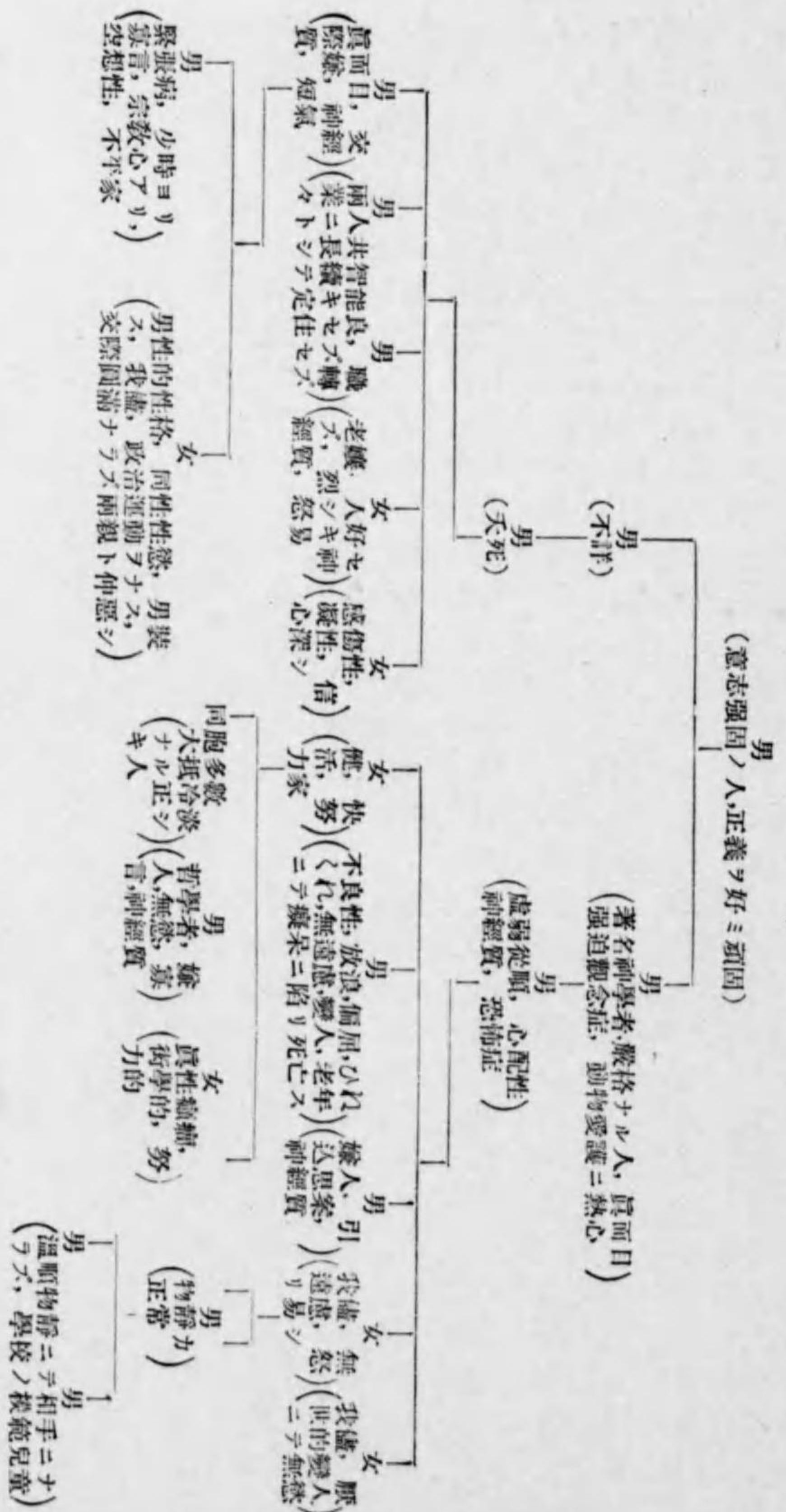
性もあるのであらう。又本病が直接遺傳する場合には、子供に於いてはいつも親よりもその初發の時期が早いのが例であつて、つまり兩親双方から躁鬱病性遺傳因子が二個結合する時には、子に於いて發病時期を早くする傾きを生ずると見るべきであらうと思はれる。

第二節 早發性癡呆(理智型)又は乖離型素質の遺傳

乖離型素質の遺傳

乖離型素質の遺傳に就いては、回歸型素質の遺傳の場合と同様に未だ不明の點が澤山にある。試みにクレッチメルの擧げた遺傳系譜の一例を次に掲げておくが、之を見ると、各世代に亘つて乖離型素質者が多數に現はれてゐることが認められるけれども、之等は凡て單に氣質の異常のみに止まり、早發性癡呆者は現はれて居ない。しかし乖離型素質者の家系中には性慾異常者だの神經質者だの又癲癇者なども少しく混つて現はれてゐる。

クレッチメルの示せる乖離型家系



リューデンの考へる所によると、早發性癡呆なる精神病は父方及び母方の双方に乖離性の遺傳因子が存在し、それが偶然相合して初めて發生するものであつて、その何れか一方のみの部分的遺傳因子だけの場合には、早發性癡呆等は起らないが、各世代に亘つて頑強にその部分的遺傳因子が傳はるために、種々の特殊な性格異常者、特に乖離型氣質に屬する種々な型の性格異常者が現はれる。重い場合には時として思春期から急激に性格の乖離性に變化するやうな者も見られることがあるが、之は恐らく早發性癡呆に近い特異な病型と看做すべきであつて、父母兩方から極めて微力な乖離型遺傳因子が傳はつて併合した時に起る現象なのであらう。他の種々な系譜を参照して見ると、乖離性の因子の上に他種の遺傳因子が相合すると、一時その乖離性が潜在して現はれないことがある。殊に之が回歸型素質と合はざると、回歸型の素質の方が力強く氣質の上に發現することが多い。此の乖離型氣質なるものは恐らく數個の異なつた遺傳因子の結合によつて生ずるものらしく思はれる。それが後にその結合がはなれて個々の精神的特徴を夫夫別個に現はすやうに思はれる例もある。即ち數人の同胞に於いて夫々異つた

然かも乖離性に屬する特徴的性質を別々に示す如き例が往々あるのである。又兩親の一方が早發性癡呆者であるが、他の一方は何等乖離性の遺傳因子を持つてをらない如き場合に、その間に出来る子供が乖離型氣質を示す例が甚だ多い。又乖離型氣質はそれが子供に傳はつた場合には、種々な變型を示し、その變型が又後に何代も續いて現はれる。然かも斯うして一旦遺傳因子が力を弱められ形を歪められた素質者同志がお互に結婚するときには、再びその因子が強く結合して、典型的の乖離性氣質者を産み出すことになるのである。何れにせよ、多數の例を通じて見ても、色々な上記の如き可能性は認められるのであるが、しかし何等法則とすべきものは未だ分つてゐない。

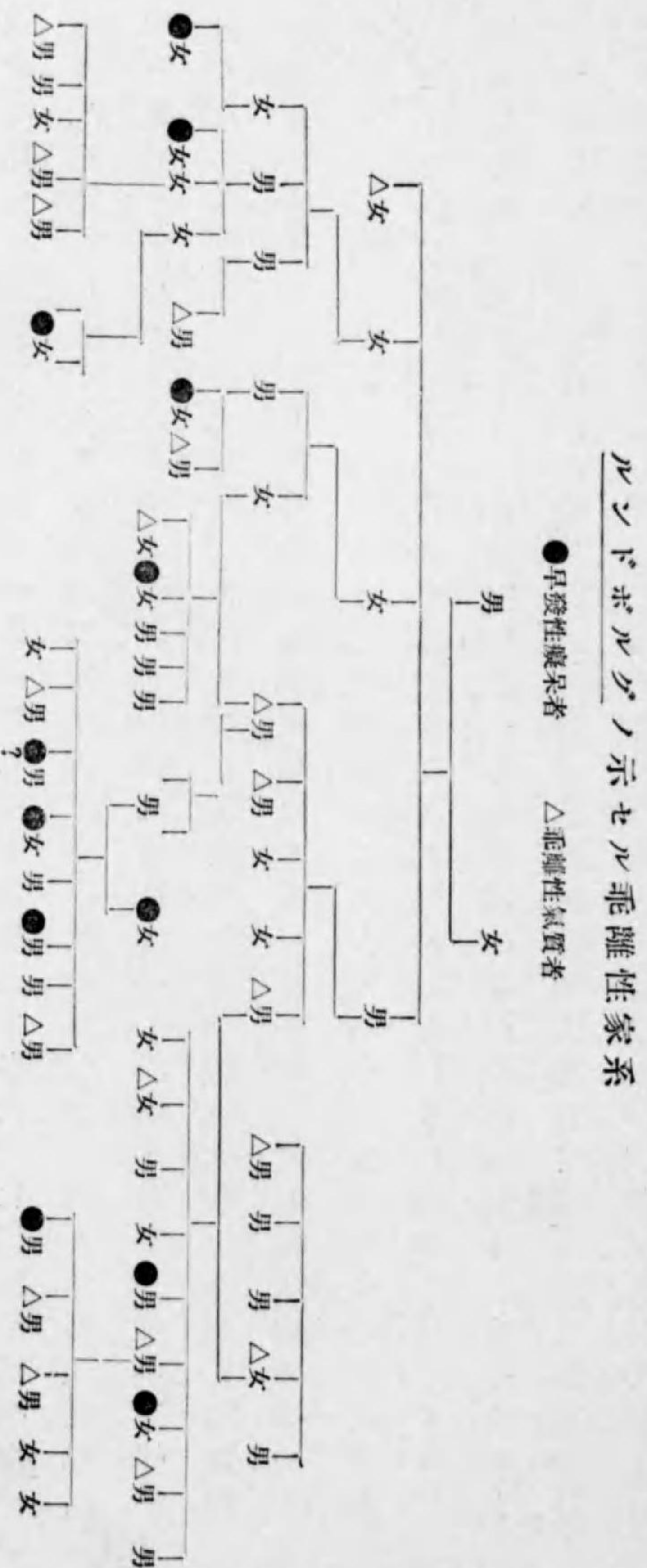
唯就中著明なことは、兩親共に乖離型素質がある時は、その子供に早發性癡呆を發する例が屢々見られることである。之はストローマイエル Strohmayer が詳しく調べたバイエルンの王家 Bayernkönige 特にオットー一世及びルードウィヒ二世等の系譜に就いて明らかに認めることが出来る。この系譜の中にも外見上少しも精神病の素因を認められない王及び王妃の間に、突然早發性癡呆の王子が生れたや

うに認められる例もあるが、實際上子に早發性癡呆を發した場合に、その兩親には外見上何等著しい精神病的傾向を認められない場合が世間に多いのである。しかし之等の系譜から古い所に溯つて探ると、その家系には潜在的には乖離性遺傳因子が兩親の双方の系圖に流れてをつたことが認められるのである。そしてその因子が偶然に適當な結合をなした場合に於いて、その子に精神病を發するに至るものと考へざるを得ない。このバイエルン王家の系譜によれば、度々血族結婚が行はれてをる。之もこの王家に早發性癡呆者の多く出た原因の一つであらう。而もストローマイエルは血族結婚の際、特に病的遺傳因子は母方の系統のものに藏有せられることを指摘してゐる。

早發性癡呆の遺傳

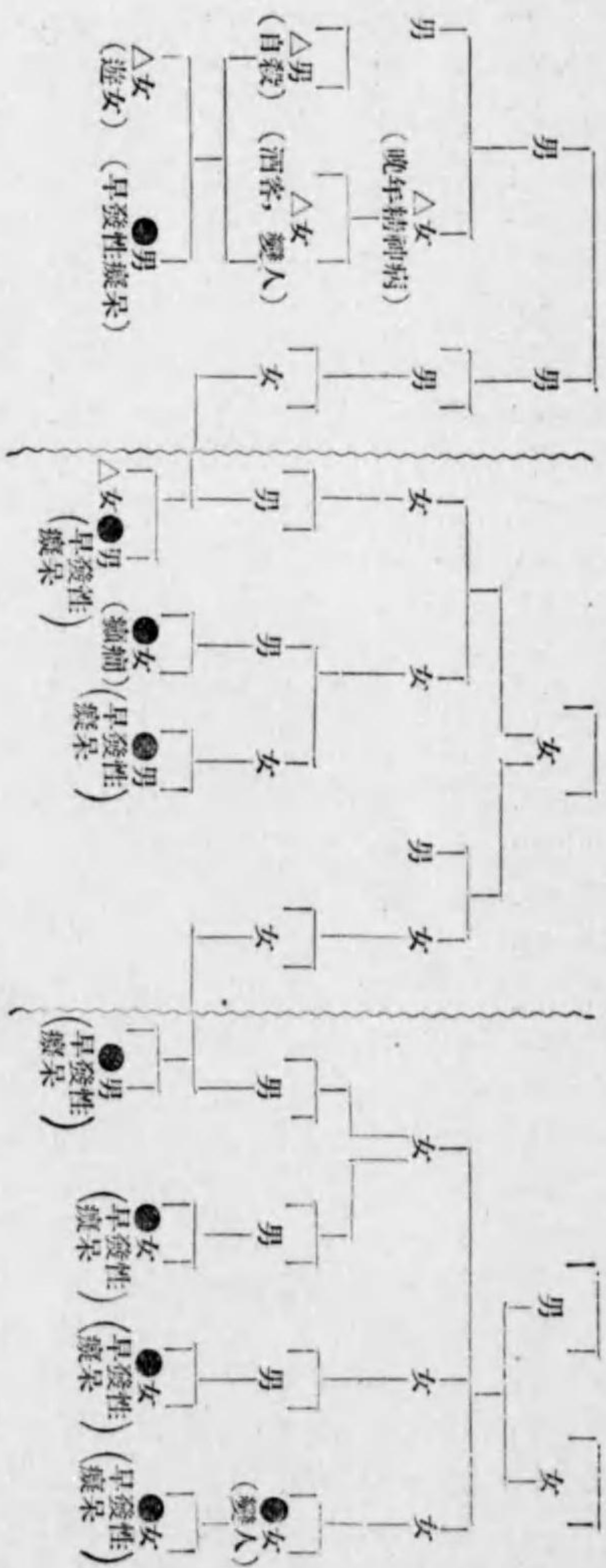
別記の遺傳系譜を見ると、その中には乖離性素質者を澤山に出すに止まらず、早發性癡呆者をも交へて發してゐる例がある。lundborg Lundborgの研究によると、早發性癡呆は不規則な間接遺傳を示すもので、屢々傍系遺傳を示すものも認

められる。そして兩親から直接に本病がその子に遺傳することはむしろ甚だ稀で、然も初代の早發性癡呆者から數へて三、四世代の間には、乖離性素質者は澤山に出てはゐるが、早發性癡呆患者は一人も出てをらない。而して外見上健全に見える兩親の間から間接遺傳的に早發性癡呆者が現はれて來るやうである。もしも



早發性癡呆の遺傳因子が優性のものならば、直接遺傳で各世代に絶えず同病者が現はれて來るべきであるが、間接遺傳の例が多い所を見ると、本病も亦劣性遺傳因子によつて傳はるものと察せられる。殊に劣性因子の特徴としては、傍系遺傳が見られるのであるが、本病にも亦その例が甚だ多い。實驗遺傳學に於ては、屢々偶發變異 Mutation と稱して、今迄その系譜中に見られなかつた新しい遺傳因子が突然に現はれ出て來ることがあると云はれてゐるが、早發性癡呆も屢々今迄全く健全に見られて來た家系内に突然に發生したと思はれるやうな例がないでもない。即ち今日未だ明かでない或原因によつて或遺傳因子が早發癡呆性に變化するものではないかとも疑はれる。併し従前の實驗遺傳學に於いては、學者は偶發變異とは要するに今迄潜在してゐた或種の遺傳因子の幾個かが偶然結合して發するによるものと解せられてゐる。バイエルン王家の系譜に於ても、其の一部分をとり離して見ると、偶發變異の如くに思はれるものでも、矢張り古きに溯つて十數世代に互つて調査して見ると、その潜んでゐた素因が從來存在してゐたものと考ふるのが穩當であらう。而して多くの實例を見ると、早發性癡呆は兩親の胚種中に

於けるむしろ多數の可能性の因子の結合によつて來るものと考へられ、唯比較的子供の數の少ない場合に、偶然その發病に適合するやうな因子結合が行はれて、それでつまり本病が突發したやうな感が與へられるものであらうと解せられる。現に親族關係を示す三つの家族で、偶然多數の早發性癡呆患者をその親族間に示したので之を系譜にとつて見ると、別表の如く極めて鮮かな劣性遺傳の有様を示



し、それが偶然現世代に於いてその三家を通じて連鎖狀に多數の早發性癡呆者を發して居つたと云ふことが判明したのである。何れの家系に於いても明らかにその系譜上の特質が分ると云ふ譯ではないが、確に或家系にありては、乖離性遺傳因子が蓄積してをり乍ら、その配偶者の分布宜しきを得た爲めにか、又遺傳因子の分配が甚だ倖運であつた爲めにか、多數の子供が生れ乍ら、一人も早發性癡呆が發生しないで過ぎたやうな者も多數にあり得る筈である。之は早發性癡呆を構成する特有な一部の遺傳因子の缺如せるためか、或は偶然その結合の仕方が適合しなかつたかに歸すべきであらう。それ故早發性癡呆者の兩親は、必ずしも二人とも何時も著しい乖離性氣質者であるとは限らない。例へば、母は外見上全く正常で乖離性の氣質は示さないが、その傍系者に早發性癡呆の者を持ち、父方の家系を見て、もその中に乖離性氣質者を持つてゐたとする。今之を理論的に考へる場合、假に早發性癡呆は a 及び b と名付くる二個の遺傳因子が結合せねば生じないものとす。この a 及び b が種々な力〔ポテンツ〕を持ち得る譯であるから、早發性癡呆を生ずる場合にも、b の〔ポテンツ〕が a の〔ポテンツ〕よりも高い場合もあらうし、又

その反對の場合もあらう。そこで a も b も双方共〔ポテンツ〕が高いと、本病の病症が重くなり、發病の時期も早くなり、その症狀も亦強く永く現はれるのであらうが、もし a も b も共にその〔ポテンツ〕が低いと、本病は軽く經過するであらう。もし a、b の一方の〔ポテンツ〕が高く、一方が著しく低いと云ふ場合には、それが平均して a、b 共に中等度の〔ポテンツ〕を持つてをる場合と同様な軽い症狀を發するか、或は又それに適する特殊な病型を示すのであらう。然しその a なり b なりを別々に一方だけ持つてゐる乖離性氣質者に於いては、その a、b の〔ポテンツ〕と併行した特殊な症狀を示すといふことはない。それ故兩親の性格氣質等を見ても、それに依て直ちにその間の子に早發性癡呆の發病するや否や、又その病型、輕重などを推察することは到底出来ない。斯う云ふ假說のものに考察して見ると、通常見らるゝ乖離性氣質の人は結局 a の因子を持ちながらその〔ポテンツ〕の極く低いものと考ふべきで、そのみでは精神病までは發しないのである。そこへ他の家系に屬するもので、〔ポテンツ〕の高い b を持つてをる乖離性氣質者があつて、この兩者が結婚して a と b とが結合した場合に、初めて精神病を發するので、つまりその a b の強さ

には發病までに或る強さの限界が必要であり、それ以下では精神病は發するに至らないらしい。然も双方が共に a 又は b のみである場合には、性格異常は強度であつても精神病にはならない。

尙ほ或る家系に a なり b なりが存してゐても、之と異なる或は之と反對なる回歸性氣質遺傳因子 c が同時に存すると、それによつて a、b の「ポテンツ」が被はれて了つて、病氣として現はれて來なくなる。即ち父方に於いては a の他にそれよりも「ポテンツ」強き遺傳因子 c を有し、母方は b を持つてをる場合、その子に於ては a、b は存してゐても、その外に c が同在してゐるために、早發性癡呆が起らずに了ふか、或は病症が軽く済むことがあり得ると思ふ。併し前述せる如く中間遺傳型「*termediäre Vererbung*」の精神病がある。即ち早發性癡呆でありながら、回歸性の精神病の症狀（爽快・抑鬱等）を交へたり、又その反對のものなどがあるわけで、今述べた如く回歸性遺傳因子は屢々乖離性を被うて了ふ例が多いやうではあるが、必ずしもさうとも限らず、その邊の關係は甚だ複雑なものと思はれる。

第三節 癲癇

癲癇の遺傳

普通に癲癇と呼ばれるものには、眞性癲癇、即ち素質的の癲癇の他に、外因によつて起る症候性の癲癇をも包括してある。即ち癲癇性痙攣發作は屢々腦外傷、傳染病或は中毒により、殊に微毒や酒精のために誘起される例の多きことは醫家のよく知る所である。然し前章にも記した如く、斯う云ふいろ／＼の外因によつて癲癇發作を起すものは、矢張り其の家系中に癲癇素質の遺傳因子を持つてをるものに現はれることであつて、さうして見れば、こゝには單に眞性癲癇の遺傳關係についてのみ論ずれば足りると思ふ。

癲癇者の性格に特殊の異常の存すべきことは、前に一寸述べた所であるが、然しその身體並びに智能等の上に、癲癇に特有なる素質があるか否かに就ては、今日未だ明らかでない。スタイナー *Steiner* は之を研究して、癲癇と左手利きとの間には

特殊な遺傳的關係があると述べてゐる。即ちスタイネルは右手利の癲癇者の家族中に、甚だ屢々左手利の人間があると云ふことを見出し、即ち九一人の右手利癲癇者が八一人の左利きの家系者を持つてゐる割合で、即ちこの率は八九%に當る。レドリック Redlich は同じ關係を調べて、四八・五%を得たと云ふ。又癲癇者の子に左手利の子供の出ること多きを述べてゐる。即ち普通の右手利の人間に於けるよりも、癲癇者に於て左手利家系者を有すること一〇——一五%多いと云つてゐる。尙スタイネルは左手利の人の家系に於ては右手利の家族よりも癲癇性病者を出すことが多い。二九四人の左手利の家族中に四八%の者が眞性癲癇を有してゐたが、二七三人の右手利の家族にては、殆んど前者と同一の環境に在る者(兵士)に於いて、一人も癲癇者を見なかつたと述べてゐる。右手利(即ち左側大脳半球の主として活動する者)は優性遺傳因子であり、之に反して左手利(右側大脳半球の主として活動する者)は劣性遺傳因子である。それ故に左側大脳性の者の内に、純粹の右手利者と左手利きの家系なる右手利者とを區別せねばならぬ。又左手利の家系に屬する右手利者は、左手利きを劣性因子として持つてゐるのであるから、左手

利き型の中に數ふ可きものである。しかし中には普通人であつて、右側大脳半球の病的障礙のために左利きを示す者もないとは云はれない。之は決して遺傳因子としての左手利きと同一視することは出来ない。

斯う云ふ風に其の條件を定めて統計をとると、スタイネルは七四人の癲癇者に於いて、左手利者一三例、即ち一七%であつて、この中八例は家系的に左手利きであり(その中四人は病的)残り五人は單獨孤立的に左利きを示すもの(中三人は病的)である。病的の左手利きは斯う云ふ癲癇者の家系には比較的多く見られるものである。斯くの如く明らかに左手利きは家系的關係を有することを認められたのであるが、それと同様に、癲癇と言語障礙(吃音、訛音)等との關係も著しいもので、之に就いてもスタイネルは綿密に實例を調査してゐる。或家族に於ては、癲癇と言語障礙と左手利きとの三種を同血族の者の中に同時に示した例もある。同一の人間に以上の三つが同時に現はれることもあるが、又同胞の間に之等が分配されて現はれることもある。又斯う云ふ特殊な病的素質者には、屢々遺尿症の著しく現はれる者が多く、之亦恐らく大脳に癲癇と共に他の素質要素を有するため起る

現象なのであらう。

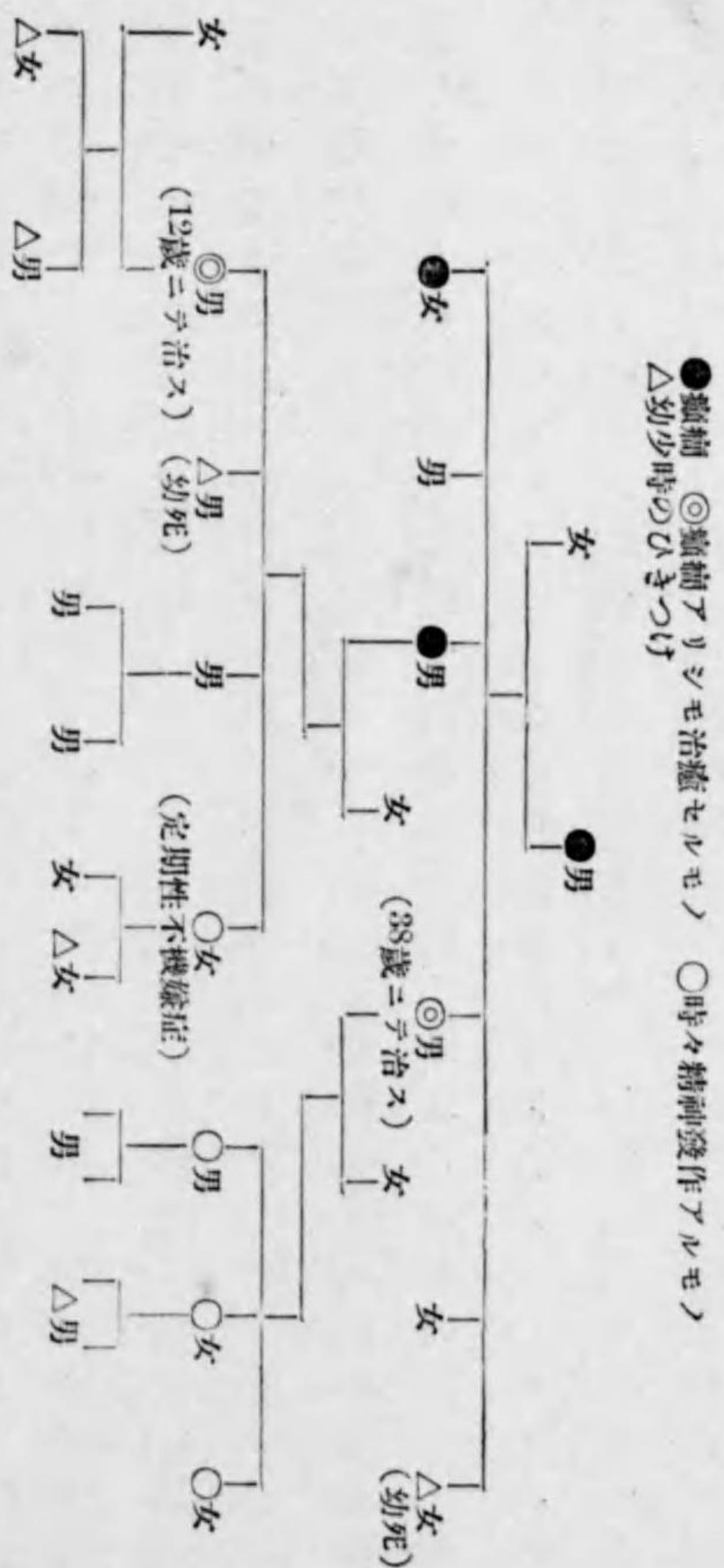
カーン *Kahn* の云ふ所に依ると、癲癇素質者には内分泌性或は自家中毒性の特異の現象があつて、それに基づいて癲癇性痙攣発作が起るのであると云ふ。普通人に於いても種々な外因によつて痙攣発作を起すことがあるのであるが、その際痙攣の強度は矢張りこの内分泌性の影響によつて規制せられるものらしい。癲癇の素質があつても精神発作のみで、痙攣発作の伴はないもの、或は癲癇性性格異常だけで實際の癲癇性の発作の伴はないもの等は、つまり癲癇素質の如何によるもので、癲癇素質者に於ける内分泌機能の質又は量の差に歸すべき特質であらう。それ故、癲癇発作なくとも癲癇に特有な素質を有するものは、此の種の異常者の中に一括して數へ、之を癲癇性素質者と呼ぶべきことをカーンは主張してゐる。併しこの癲癇の素質に關する説は未だ確定的のものではなく、さう云ふ素質者は他にも見られることがあるとも云はれてゐる。

ダヴェンポート及びウィークス *Davenport and Weeks* の研究によると、癲癇と或る精神薄弱(低能)型との間に關係があると云はれ、低能同志の父と母との間に癲癇の

子供が生れ(二人中五人)、又その反對に癲癇を持つ父と母との間に低能の子供が生れる事實のあることを觀察した(三人中一人)。さうしてこの癲癇に關聯せる癲癇性低能を特別な臨床型として研究してゐる。

癲癇の遺傳の様相を見ると、癲癇者の母方の祖父母等に之を見ることが多く、又兄弟の間には癲癇が同時に發することは稀である。一般に癲癇者の家系に於ては癲癇發作を有せずとも、非常に興奮し易く、又暴行に出易く、紛争を好むといふ性格の人が多いやうである。之等によつて見ると、癲癇は恐らく劣性遺傳因子に屬するものであつて、*Hoffmann* の云ふ所に依れば、癲癇者の子供二七人中、癲癇を示せる者は三人、即ち一〇%に過ぎず。之は早發性癡呆の遺傳率に近い數字である。併しずつと多數の例に就て統計すれば、如何なる結果になるか測り知られぬが、兎に角癲癇を此の數字から見て優性遺傳因子によるものと考へることは出來ない。別圖に *Oberholzer* の示した系圖を掲げておくが、之を見ると、數代に亘つて癲癇の直接遺傳のあることが稀でない。レントツは之を以て兩親に於て癲癇性の遺傳因子の合併が起るためであらうと考へてゐる。一般に

オーベルホルツェルノ調査セル家系圖



優性遺傳因子ならば、三世代位に亘つて直接遺傳の見られることはむしろ當然のことであるが、オーベルホルツェルの系圖では、實際上三代に亘つて癲癇發作をもつ癲癇者の遺傳があることを認められる。併し之を見ても、世代を重ねるにつれて段々發作が少なくなつて行き、四代目には小兒期にひきつけを起した者が見ら

れるだけで、本當の癲癇病者は現はれて居らない。二代目に於ても既に三十八歳で癲癇發作が止まつて了つた者が現はれてゐる。即ちこの系圖に於て癲癇の遺傳因子は、代を重ねる毎に段々再生回復 Regeneration の傾向をとり、遂に消滅するに至る可能性あることを示してゐる。即ち癲癇性遺傳因子はその軽いものは小兒期癲癇を起すに止まり、稍重いものは定期性精神發作、それに次いで稀なる癲癇發作を起し、一番重いものは遂に癲癇性癡呆に陥る。その間色々の程度があるが、この程度の相違は癲癇の因子以外の他の因子の干涉によつて來るものではなくて、恐らく癲癇性因子そのものの「ポテンツ」が異なるがためであらう。そして其の「ポテンツ」が世代を重ねると共に弱まつてゆくものではないかと考へられる。

廣く癲癇の遺傳例を見ると、癲癇は劣性因子による間接遺傳を示すことがむしろ通例である。多數のものの中には今述べた如く優性因子の如き形をとるものも見られるが、眞性癲癇は生物學的には恐らく單一な因子によつて來るものではないらしい。又レンツの言によれば、癲癇は男子に多く、即ち男性に伴ふ遺傳因子であるらしいとの事である。

癲癇の素質の混合

従前から癲癇の家系者には癲癇以外に乖離性素質者及び早發性癡呆者が著しく多く見られると注意せられた。別項に説くゼロネの家族の如きは其の好適例である。時には同一人にこの両者が混合して現はれ、早發性癡呆者で癲癇發作を伴ふといふ如きものが稀ではない。カーンの例によると、ハルトマンと云ふ男は癲癇性朦朧状態に於いて屢々緊張病性症狀を示したが、その母の兄弟には癲癇があり、父は非常に吝嗇家(性格異常)であり、その弟は早發性癡呆にかゝり、本人の妹は母の躁鬱病性傾向を受けて躁鬱病様の傾向を示したのであつたが、青春期には月經の度毎に癲癇發作を起し、更年期に至つては憂鬱症にかゝり、而も晩年にはこの憂鬱症を起した時に當り、はげしい幻覺があつたりしたが、併し感情及び意識は通常であつた。即ちこの女は子供の時は癲癇を示し、後年にそれが潜んで了つて、代りに憂鬱症となり、更に數ヶ月の後に早發性癡呆様の症狀を呈した例である。之等は明らかな混合遺傳の一例として見る事が出来る。癲癇は今述

べた如く乖離性素質と混合して現はれることもあり、又回歸性素質と混合して現はれることも稀ではない。それ等の關係を示す系譜は省略するが、癲癇の代理症として不機嫌症 *Periodische Verstimmung* を示したりする者は、恐らく癲癇と抑鬱症との混合によるものなのであらう。

又渴酒症 *Dipsomanie* と名付けて、時をきつては數日間大酒をする特殊な發作性の精神病がある。之はエコンモ *Economus* の研究によると、明らかに其の者の二分の一には癲癇の遺傳と躁鬱病の遺傳とが合併してゐる事實が證明せられたといふ。

第四節 精神薄弱症(低能)の遺傳

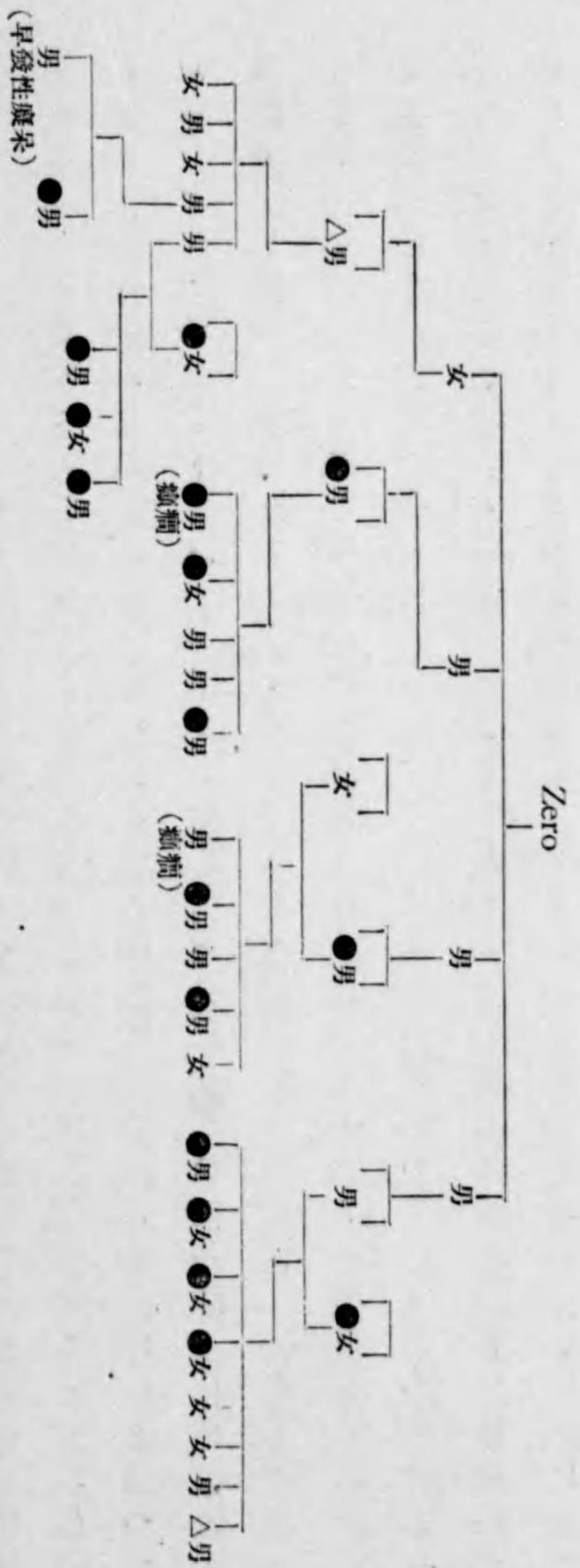
精神薄弱症(低能)と名付けられるものの中には、必ずしも家系の遺傳の原因による生來性精神發育制止症のみに止まらず、幼少時の外傷や傳染病その他後天的獲得性の原因によつて生ずるものも少からずあるのであるが、その智能の發育不良なる症狀のみを捉へて直に遺傳研究の資料とすることは、判断の錯誤を起す恐れがある。殊に遺傳性の低能者の如くに見えても、實際兩親の微毒、酒精中毒等によ

種の障礙に基いて生ずるもので、それを以て家系の遺傳因子に歸することの出来ないやうなものも亦屢々過まつて統計中に數へ込まれるやうなことがある故、研究上餘程注意しなければならぬ。低能 Schwachsinn には臨床上三つの階段を設け、白癡 Idiotie 癡愚 Imbecillität 並びに魯鈍 Dehilität と呼んでゐる。而して其の中の白癡者は自ら結婚して子供を生む如きことは全くないから、白癡そのものが遺傳的の因子として傳はる如きことは決して有り得ない。遺傳上に於いて注意せられるものは、癡愚及び魯鈍の程度のものである。而して之等の精神薄弱の程度の相違は、同一の遺傳因子による「ポテンツ」の相違によるか、或は特殊な素質的の區別があるのか、それについて色々疑はしい點もあるが、アメリカのゴダード Goddard は低能者の遺傳に關して、特に廣汎なる材料について精細な研究を遂げ、低能者は少なくともその三分ノ二は遺傳因子によつて發するもので、而もその遺傳因子は優性で且單一なるものであると結論してゐる。然しエリアソフ Eliassow は低能兒學校の收容生徒に就いて研究の結果、低能の發生は遺傳的素質のみならず、環境の影響も亦重大なるべきことを述べ、或家系に於ては酒精中毒及び結核の影響が著しい

ものであつたことを述べてゐる。親の低能なる者は二例即ち二・八%、兩親の精神病なるもの二例即ち二・八%、家族に癲癇ある者は四例即ち五・五%であつて、其他には純粹の遺傳のみの原因により起つたと考ふべきものは認められないと云つてゐる。ダヴェンポート及びウィークス Davenport and Weeks は同一家系に癲癇者と低能者とが同時に現はれることが多く、この兩者は生物學的に親和性のある因子によるものであると云ひ、兩親共に低能なる六夫婦から十六人の低能者及び五人の癲癇者の生れた例を擧げてゐる。又二組の癲癇者夫婦から三人の癲癇者と一人の低能者の生れた例をも擧げてゐる。然し一面に先天性微毒などの原因から癲癇も低能も發生し得る可能性があるのであるから、僅かな數の例より直に癲癇と低能と素質上の關係がある如くに結論するは早計であるとも云へやう。然し別表に示すゼロ Nemo の家系を見ても、ゼロなる犯罪者の家系中に癲癇者と低能者とが同胞中に同時に多數現はれてゐる實例が顯著にあるのだから、癲癇と低能と直接に遺傳因子的の關係があるとも云はれるし、又此の家系には双方の遺傳因子が偶然合同したのだとも考へられないでもない。又低能者であつて同時に感情

刺戟性の強い癲癇様異常性格を持つ者も亦決して稀ではない。
癲癇性の低能者に對して又乖離性氣質をもつ低能者も認められる。即ち稀ではあるが、癡患者であつて同時に著しくその氣質の乖離性傾向を示すものも見ら

Zeroノ家系圖(●白癡又ハ癡患者、△魯鈍者)



れるのである。ぼんやりしてゐて昏迷状態であり、感情の極めて冷淡な靜かな癡患者であり、而も自我的で我儘で少しも他人の云ふことをきかない者なども亦此の例である。又接枝性破瓜病 *Prädisposition* と名付けて、初めは生來性低能の病型を示し、思春期より後に徐々にその上に更に幻覺妄想の如き早發性癡呆の症狀の加はつて起つて來る如き者もある。

ゴダードは有名なカリカック *Kallikak* の家族を調べ、別表に示すやうな興味ある家系圖を擧げてゐる。即ち之によれば、マルチン、カリカック *Martin Kallikak* が正常な娘と結婚して擧げた子孫の中には、六世代二八〇人中に一人も低能者も精神病者もなく、むしろ中には智能優秀なる者が多く見られてゐるに反し、同人が名もなき低能の娘との間に儲けた子供は明らかな低能者であり、又その者が常人との間に生んだ八人の子供の中五人までが低能者であり、斯くしてその後六世代の間四三〇人の子孫に就いてゴダードの調べた所によると、殆ど大部分が低能者、精神病者、癲癇者、犯罪者等であつて、正常者は四〇人に過ぎない。殊に低能者同志の夫婦關係四〇組に於ては二二〇人の低能者が生れ、通常兒は僅かに二人に止まつてゐる

この世代の重り合ひが行はれるために直接遺傳の如く見えるのである。白癡は殆んど子供を産むことがないから、白癡そのものが優性遺傳因子として傳はる筈は決してない。そこでレンツは兩親の何れか一方に低能の遺傳因子があり、即ち異種因子の結合することによつて癡愚者及び魯鈍者が生れ、兩親の双方に低能の遺傳因子があり、即ち同種因子の合流が行はれるときには白癡が生ずるのであると述べてゐる。この因子は優性のもものと劣性のもものとが共に存してゐるものと考へられてゐる。此の説をとれば、事實上の低能者の系譜をよく説明し得るのであつて、丁度前に天才の遺傳關係に就いて述べた處とよく似通つた關係を示してゐるものと云へる。而して低能にも諸種の他の因子が複合するものである故、單純に之を考へ去るわけには行かないのである。

第五節 妄想性精神病

精神病各種の中で症狀として種々の妄想を現はすものは早發性癡呆麻痺性癡呆、老人性癡呆等いろいろあるけれども、特に妄想を主徴候とし比較的纏まりのあ

る系統的の内容ある妄想を長い間に亘つて固持し、其の間、其の妄想内容に段々と系統的に變化を加へ來り、所謂「妄想の城府」を築くに至るものを一般に妄想性精神病と云ひ、之に亦幾種かの特別な病名が與へられて居る。妄想なるものの發生の心理的解決に就いては精神病學上興味ある問題であるが、夫れに就いて今は詳説する事を避け、唯妄想なる症狀が遺傳學的には如何なる特質を持つかに就いて研究して見やうと思ふ。夫れには前記の如く妄想を主徴候とする精神病を二三の種類に分けて左に考察する事にする。

(甲) 妄想性憂鬱症 Paranoïde Melancholie

元來躁鬱病なる精神病には妄想は主要なる徴候ではないけれども、併し例へば躁病を發する度毎に誇大妄想を起すとか、鬱病を發する毎に被害妄想を伴ふとか云ふ如き例は、屢々聞く所である。之れは其の基本となる感情状態に因つて續發性に起るものであつて、殊に初老期憂鬱症 *Involutionsmelancholie* と名づけ婦人に於いて其の更年期(閉經前後)に往々頑固な憂鬱症を呈すると共に被害追跡等の消極的内容の妄想を示すものを、屢々見るのであるが、之れは果して躁鬱病に屬するもの

かどうかは今尙議論のある所である。併し遺傳學的の經驗によると、斯う云ふ病者の子供に早發性癡呆が屢々見られる事は事實である。或る例に於いては患者は躁鬱性の傾向を示す愉快な氣質の持主たる婦人であつて、之が初老期憂鬱症に罹つた。其の夫は交際嫌ひな嚴格且冷酷な性格の者で、明かに乖離性素質者である。然かるに其の間に出來た子供が三人あつて、中一人は教員となり、此の者は感情性に豊かな人で、常に快活な、然かも一寸變つた風のある空想性の旺な人物であつて、明かに乖離性と回歸性との混合氣質を示したのである。第二子は女子であるが、子供の時分から興奮し易く、少しも愛嬌がなく、他人に親しまない者であつたが、後年に早發性癡呆に罹つた。第三子も女子で、之は極く眞實な理智型の者で、男性の様な氣質で、父とよく似た乖離性氣質者であつた。つまり此の家系では父は乖離性であり、母は回歸性の氣質で、しかも従前にも屢々抑鬱状態を呈したのであつたが、遂に初老期憂鬱症に陥つたのである。元來早發性癡呆は前にも述べた如くに二個の劣性遺傳因子の相合する事によつて發生するものと考へられる。夫れ故恐らく此の母の方にも一部の早發性癡呆性遺傳因子が潜在して居たもの

と假定しなければ、此の三子の精神病的特質を解し難いのであるが、斯う考へると母の初老期憂鬱症の發病には、乖離性素質が一部分混つて居つて作働したものと考へなければならぬ様に思はれる。同様な例は他の學者からも擧げられて居る。

(乙) 「パラフレニイ」 Paraphrenie

クレペリンは「パラフレニイ」と名くる妄想性精神病の一群を早發性癡呆の中から引き離して特別な病氣と考へた。本病の特徴は中年から徐々に發病して、系統的の妄想殊に被害・發明・系圖・誇大・宗教性等の妄想を作り出し、之れを一生の間持續するものである。然るに早發性癡呆の一型たる妄想性癡呆に於いては、段々晩年に至るに従ひ癡呆状態に陥り、妄想の内容も亂れて荒唐無稽になつて來るのであるが、此の「パラフレニイ」では少しも癡呆状態に陥らず、晩年益々妄想内容は精密を極はめ、其の者の一般感情や性格は少しも侵されず、一生を通じて此の精神病に陥つた以前からの性格がよく持續せられる點に特徴がある。然かも其の者の氣分は寧ろ快活の方で、回歸性氣質に屬する様に思はれる。今「パラフレニイ」患者

の家系に就いて取り調らべた學者の報告を見ると、或る家系では患者は愉快な社交的な人で、四十三歳から徐々に追跡妄想を發し、後ち之が誇大妄想に變じ、自分が皇族であると云ひ出して虚談症的な空想性の内容を示し、二十年間も此の妄想が續いたが、その間感情は少しも侵されず、丁度輕躁病 Hypomanie の様に見えた。診斷は虚談性「パラフレニイ」Paraphrenia confabulatoria であつた。其の妹は物靜かな無口な人で、三十九歳の時に抑鬱性の妄想性精神病に罹り、只管自責の念に驅られ、被毒恐怖症を示したが、後ちに純然たる早發性癡呆症に陥つたといふ。

次に擧げる例の婦人は五十歳から發病して、氣分抑鬱し、種々な罪業妄想に捉はれ、十年の後ち、ほゞ治癒し、其の後は普通の快活な性質に歸つたが、以前の病氣當時の話しをする時は多少抑鬱性の氣分になつた。其の者の診斷は「パラフレニイ」であつたが、當人の母の弟の娘は四十歳から緊張病を發し、十年後に癡呆状態に陥つた。又當人の妹の娘は二十五歳から早發性癡呆に陥つた。之等の系圖から見ると、之も亦回歸性と乖離性の兩氣質の混合を示す様であつて、生物學的に謂へば乖離性素質の因子が存在せずしては「パラフレニイ」は起らないものと考へられる。

併し「パラフレニイ」其のものは、早發性癡呆に對しても直接遺傳の關係は少しもなく、本病患者の兩親は多くは精神健全の者で、其の家系に早發性癡呆者がよしあつても常に傍系に於いてである。夫れ故「パラフレニイ」に對しては矢張り乖離性の潜在因子が働きかけて居るものと察せられる。

(丙) 「パラノイア」Paranoia (偏執病)

「パラノイア」は元、體質的に生來性精神變質症として起るものであつて、その者の智力には何等の異常なく、唯系統的内容の妄想が存してゐて、それが力強く其の人の日常の行動を支配するもので、勿論幻覺もなく、癡呆にも陥らない。ブロイレル Bleuler は嘗つて「パラノイア」は恐らく慢性に持續する早發性癡呆の一型で、其の経過の特に緩かなものと見るべきであらうと云つたが、之も一理ある。併し眞の「パラノイア」なるものは臨床上あまり多く遭遇しない稀なもので、其の研究には困難がある。殊に「パラノイア」と「パラフレニイ」とは仲々區別が出来ない事がある。グッチ Gutsch の研究によるベッツェル Petzel 一家の例を擧げると、患者ベッツェルは「パラノイア」で、宗教的や又宇宙的の妄想系統の思念を持つて居つたが、其の談話は甚

だ上手で、一見其の感情性も亦常人の通りであつた。然かるに患者の弟は又宗教的妄想を持つて居つたが、之れは明かに早發性癡呆者であつた。他の弟は自我的性向の頑固な人間で、窃盜罪を犯して監獄にはいつたが、屢々狂暴の發作に陥り明かに乖離性の素質であつた。患者の子は三人あつて、其の一人は神經質な然かも才能のある者、二は怒りつばい短氣な人で、後ちに早發性癡呆に罹つた。三は他人の言ふ事を聞かない變人の一種で、その性格は乖離性であつた。尙患者の妹は酒精中毒性精神病 Saufwahn Sinn に罹り、患者の弟の一人は酒亂 Aufgeregter Trinker であつた。尙ガウプ Gaupp の擧げた例でも、或る「バラノイア」患者の母の兄弟二人は早發性癡呆に罹つたと云ふ。然かるにスベヒト Specht は之れに反對に「バラノイア」患者で主として回歸性の遺傳素質を示した例を擧げて居る。恐らく之等多くの例から推論すると、誇大妄想性「バラノイア」は乖離性素質と主として躁病の傾向を有する回歸性素質との結合せるもの、感傷的な微小妄想性「バラノイア」は乖離性素質と主として抑鬱性の回歸性素質と結合せるものではないかと考へられる。何れにせよ、系統的の妄想を作ると云ふ症状は乖離性素質の因子の現はれと見るべきであらう。

「バラノイア」は其の傍系に早發性癡呆を有することから見て、優性の遺傳因子によるものでないことは明かであるが、兩親の遺傳因子に於いて、恐らく極めて稀有な複雑な結合によつて生ずるものであらうと思はれる。

(丁) 好訴妄想 Querulantenwahn

之れは好訴性妄想を有する「バラノイア」の一種であつて、其の妄想の傾向が主として自分の利害關係を争ふといふ方にのみ向ふ。此の好訴狂を發すると僅かに一錢二錢の利害のことから生涯に亘つて裁判を續けると云ふ如き例もある。此の好訴妄想を發する者は、大抵幼少の時分から怒りつばく我儘で、他人を信用しない、且非常に打算的な利己的な性格を示すもので、遺産争ひなどに當つては非常に執拗く自分の權利を主張するものである。斯かる好訴性の性格異常者に就いていろいろな調査があるが、エコンモ Leonomo の擧げた例に依ると、或る好訴症者の子供四人の中、一人は正常であつたが二人は早發性癡呆、他の一人は非常に猜疑心の強い性格異常者であつた。其の他斯う云ふ例はヒッチヒ Hitzig シェリ Jolly 等に

よつても擧げられ、云ふまでもなく好訴症者自身の性格も乖離性素質に屬するものであるが、其の遺傳系統を見ると其の直系傍系の中に自我的な猜疑的な變人を見る事多く、即ち乖離性素質者が非常に多い。好訴症其のものが直接遺傳する事はないが、乖離性素質は直接遺傳の傾きを示すものである。

(戊) 老耄性追跡妄想症 Senile Verfolgungswahn

老耄性癡呆 Dementia senilis に陥つた際に、追跡又は被害妄想を發するものが非常に多く、殊に老人性被害妄想と云ふ病名さへ與へられて居るほどであるが、併し斯う云ふ妄想を起した者の若い時に生んだ子供の特質を見ると、夫れには乖離性素質の性格を示し、或は早發性癡呆に罹つた様な者が比較的多く見られるのであつて、多分老人性追跡妄想症も早發性癡呆症の中に數ふべき一變型ではないかと考へられる。

何れにせよ妄想性の症候は即ち乖離性又は早發性癡呆性の症狀に屬するものと看做されるのであつて、従つて妄想を主徴候とする種々な精神病は恐らく其の家系の乖離性素質の因子から誘發されるものであらうと考へられるのである。

第六節 強迫觀念症

前節に妄想性精神病の遺傳の事實に基き、妄想を主徴候とする精神病が乖離性素質の一劣性因子の干涉によつて發するやうに考へられる旨を述べたが、妄想に近似してをるものでも強迫觀念症の遺傳には、別個の傾向が存在してゐるやうに思はれる。即ち強迫觀念症、病的恐怖症等は神經質者に來るもので、或特別の觀念と不快な感情とが強く聯合してゐて、その觀念の思ひ浮べられる度毎にその不快な感情がいつも結びついて起つて來て堪へ難くなり、強ひてその觀念を抑へんとし又は之に基く行爲をおしきつて行はうとすると、忽ち苦悶の發作を生じて到底之を忍ぶことが出來なくなる。此の際の感情はいつも不快な抑鬱的苦悶のものであるから、一見しては躁鬱病の抑鬱状態に髣髴してゐるが、然し其の兩者の間には著しい相違がある。即ち強迫觀念症では、その不快感情がその病者の全精神界を支配して、その言動が凡て強迫觀念に囚はれて居るが、抑鬱状態では一般感情刺戟性の減退或は不快情緒の持續があるのみで、一般精神作用は寧ろ減退して居

るのが常である。又抑鬱状態は自然の経過又は醫療によつて治癒するけれども、強迫観念症は中々簡單には治癒せず、周囲の者の扱ひ方が悪いと益々症状が増進する氣味がある。強迫観念症は強迫観念の強く起つて來た時だけ苦悶があるが、他事に取りまぎれてゐる時には著しい抑鬱性不機嫌の状態が認められない。そこで強迫観念症者の遺傳的關係を多くの學者の記述によつて調べて見ると、ステッケル *Stöcker* に依れば、或る婦人の強迫観念症の患者は、平生は輕躁病に類する状態であり、又その家族にも輕躁病性の者が多く見られた。然かもこの患者は妊娠の度毎に強迫観念症を發したといふ。又他の強迫観念症の患者は平生は愉快な人であつたが三十七歳の時強迫観念と抑鬱苦悶とを發した。其父は活動家であつたが、抑鬱状態を起して自殺を遂げ、患者の妹はやはり一度抑鬱病にかゝつたことがあつた。他の例では母親は神經質な苦勞性な人で抑鬱病にかゝつたことがあつた。その子が亦生來神經質で苦勞性で、いつも不機嫌なものであつたが、十五歳以來時々氣分の轉換激しくなり、爽快となつたり悲觀となつたりしたが、二十五歳で遂に強迫観念症に陥つた。斯かる例は他にも多數あつて、これ等を通じて見ると、

強迫観念症者の大多數は明らかに回歸性氣質者に起るものの如く思はれる。ステッケルはそれ故に強迫観念症者を躁鬱病の抑鬱状態と深い關聯のあるもの如く考へたのである。しかし往々その傍系に前記の如く乖離性素質者も現はれることがあつて、純粹の回歸性のものとは云へないらしい。又ピルツ *Pilz* の研究によると、強迫観念症者の父母或は兄弟に神經質な、又は同様な強迫観念症或は躁鬱病の患者が見られたと云ひ、即ち同種の強迫観念症の直接遺傳の事實もあることを述べてゐる。然し多數のものを通じて、回歸性の遺傳因子が主となつて、それに他の因子が相加はつて之を起すものらしいが、然しその本人は初めから神經質で苦勞性で眞面目で然も同情に富み、且つ非常に感動し易い素質を早くから示してゐるものが多いので、純粹な回歸性氣質とも乖離性氣質とも考へることは出来ない。即ち強迫観念症はその素質の上から云ふと、種々複雑な因子の混合によるものらしく、恐らく乖離性と回歸性の双方の遺傳因子が同時に存し、その優劣を相争つてその一方が潜在せず、両者が同時に優性となつて現はれやうとすることによつて起る症状であらうと考へられてゐる。それ故父と母との双方から異なる

つた因子が複合して發生するもので、中々簡単にその遺傳的關係を明らかにすることは出来ないもののやうである。

第七節 精神病の遺傳關係を研究する目的

精神病の遺傳關係を調査研究することは、理論的並びに科學的の目的の上から云ふと甚だ興味あることではあるが、實際問題として如何なる利益を社會に投ずるものであらうか。即ち優生學的に考察して若しも之等の精神病の遺傳關係に一定の法則の存することが證明せられたら、之に基いて後に述ぶる斷種法其他の方法により、人爲的に精神病を人類から除去して、所謂民族の素質改善を計るべき原理がそこに闡明せられ得る譯である。

即ち(一) 現在精神病的遺傳因子を藏有する精神病患者、犯罪者等に對し合理的處置をすることによりて、今後精神病患者、精神變質者の發生増加を豫防することを得。
(二) 現在智能又は性格の上に優秀な素質を有する者を合理的の處置によつて保護して、その素質を後裔に存續せしめ、之が他の變質性素質によつて障礙せられ

ることのなきやうにする。

然し今日の遺傳研究の結果は未だ甚だ不充分のものであつて、今迄述べた所によつても、上記の如き目的に直ちに到達する程の域には達しをらぬこと、甚だ遺憾なことであるが、今後倦まざる研究の蓄積によつて、いつかその目的の達成せられる日も決して遠くないであらう。現に第一の目的に對しては總括的ではあるが、斷種法の施行で多少の効果を擧げてゐる(後文參照)。

現在の精神衛生上の可能性を有する範圍としては、梅毒、酒精中毒の如く、國民大多數のものの胚種を障礙する恐れあるものを、及ぶ限り正しき知識の普及によりて防ぐと共に、少くとも精神病的優性遺傳因子を有する者に對しては、その遺傳因子の廣く傳播することを防止する方法を講せねばならぬ。それには極端な方法としては、斯かる變質者の結婚を絶対禁止し、不良なる遺傳因子を負ふものの生れ出でざるやうに圖ることであるが、然し之は云ふべくして中々行はれない。即ち結婚は人生の重大事である。單に法律を以て之を禁ずることも出来ないし、又結婚せずとも子を産むことはいくらも有り得るのである。そこで斷種法が考慮せ

らるゝことになるのである。然し一面には不良な遺傳因子でも純潔な素質者代々結婚を重ねて行くことで、數世代の後には段々と再生機能によつて、その不良性の度が減退することも事實であり、又早發性癡呆の如き恐らく劣性遺傳因子によると見らるゝものでも、世代を重ねると共にその家系の罹病率が少くなるのみならず、早發性癡呆者の子に優れた素質者の出たことも例がある。それ故唯、早發性癡呆の家系者と、同じく早發性癡呆の家系者とを結婚せしむる如きことのないやうに注意すべきであつて、健全な素質者と結婚することは毫も差支なからう。何れにせよ重い家系的の病的傾向を持つものは、成るべく健全な家系から出た健全者と代々結婚を重ねて行くことが必要である。然し現に精神病であり、又は曾て精神病であつた者に就いて調べて見ても、早發性癡呆者の子供の中で同病に罹病する者は一〇%、躁鬱病者の子供の中で同病に罹病する率は四%、癲癇者の子供で同病に罹病するものは一〇%であり、その他の病の者の子供では更に率が少なく、唯低能者犯罪性性格異常者其の他の變質者に於て其の率が割合に高いことに注意せねばならぬのである。

然し一面に天才者といへども、變質に屬する幾個かの遺傳因子が偶然都合よく結合することによつて發生するものであつて、然かもこの遺傳因子は變質性因子と密接な關係があるのだから、此の點に餘程注意せねばならぬ。天賦すぐれた父と、同じく天賦すぐれた母との間に、必ずしも天賦すぐれた子のみが生れるものとは限らないが、又變質者同志の結婚と云ふ危険を冒さなければ天才者の生れ出る可能性はないわけである。唯實際上同じ變質の中でも、常習性犯罪者、重い癡愚者の如きものに於いては、如何なる場合にも天才者を生むべき可能性はないのであるから、結局は更に遺傳上の事實を精細に調べて、天才者を發生する條件を一層精密に研究して、之が實現を期せねばならないことになる。

第九章 犯罪發生の原理

犯罪と云ふ言葉は、法律的に云へば世界各國とも現行の刑法其の他の法律上に規定せられたる所に抵觸した行爲を指して名けるのであつて、其法律上の犯罪を犯した者は犯罪者として所定の刑罰を受け、社會的には一種の社會生活不適應者として社會生活から除外隔離せしめられることになつてゐるのであるが、しかし法律の中には所謂手續法と云ふものがあつて、何等惡意がなくとも、その法律上の手續を知らなかつたと云ふだけで罪におちるものがある。例へば極端な例で云へば、北米合衆國のカンザス州に於いては、紙巻煙草の廣告を記載したる新聞紙を携帯頒布する者は罪に問はれるのであるが、往々旅行者などが何の考へもなくさう云ふ廣告の載つてゐる新聞紙を持つてゐるのを發見されて處罰されるさうである。しかし斯う云ふ處罰を受けた人が性格上に缺陷のある所謂犯罪者であるとは常識的にも到底考へられない所であつて、此の行爲は決して初めから社會の秩序を紊すやうな意圖があつて行はれた譯ではなく、單なる無智や誤解のために

さう云ふ手續を誤まつて、思はず知らず刑罰に問はれるのであつて、之に類した例は世の中に決して少なくない。しかし吾々が茲に主として考察しやうと思ふ犯罪なるものは、さう云ふ一般のことを指して云ふのでなく、主として精神病學の上から云つて、行爲の外形又その後果の上から見て云ふよりも、寧ろその行爲の動機や行動進行過程の上に重きをおいて、其の人の性格的に既に社會生活に適應しない或本來の根本的素質を持つて居り、その素質より湧き出たその人の自然な自發的又は反應的行爲の中、特に社會生活の秩序に反するやうな傾向を著しく見られる如き場合に對して犯罪と云ふ名を附けるのであり、又さう云ふ反社會的の傾向をあからさまに示しそれをその性格の一要素として有するやうな人物をば狹義の犯罪者と呼ぶのである。一體現代人の本性は、今將に進化の中途の段階にあるものである。即ち吾々現代人の本性の中には、吾々の祖先であつた原始人が嘗て有して居たやうな個人的主我的の傾向を示す種々の原始本能を強く有して居り、又一方に之に反して吾々の比較的近い祖先から段々と醸成して來た社交的生活に適應するやうな本能があり、此の兩者が共に同時に同一人の性格の中に存在

して居るのである。本來或一個人の成長の過程の上から云ふと、四五歳位の幼児期までは、主として原始的本能のみが力強く現はれてゐるのであるが、六七歳の頃から段々と社交的本能が発達して來て、その上に更に家庭、學校等の倫理的、社會的教育の効果によつて、漸次に始めに生じた原始本能が壓抑せられて行き、自發的に進んで社會のために奉仕しようとする努力が生じて來、斯くて漸次に吾々の道義的修養を積むことに依て、社交的の性格が出來上つて來るのである。それ故に主として原始本能の方だけを觀察すると、吾々の性はもと惡であり、個人本位であり、反社會的である。然るに社交本能の方より觀察すると、個人惡の素質は存在してゐながらも、尙之を壓抑し、矯正しやうとする社會善の本能が存在してゐることが分り、孟子の所謂惻隱の情が何人にも備はつてゐるのであつて、つまり人間の性はもと善なるものと云へるのである。

今兒童期に現はれる原始本能の方面について先づ説明を試みやうと思ふ。吾々の幼少の頃に於て、即ち生後二、三歳乃至四、五歳までの間は、まづ色々な所有本能又個人的榮養の本能に基く衝動的の傾向が極めて顯著に且露骨に現れる。例へ

ば所有本能に就いて述べると、兒童は頻りと目にふれるものを何でも欲しがり、そして一旦それを與へると、堅く手の中に握つて取上げようとしても中々放さうとしない。強ひて之を奪ひ取れば、必ず大聲をあげて號泣する。だまして之を穩かに取らうとするには、口先でごまかすよりも、兒童のもつと好みさうな別のものを見せて、之と交換するより他にたしかかな方法は無い。此の所有本能は恐らく原始人の遊牧生活時代に、各家族が夫々一單位として群居生活しつゝ、食物の蒐集や保存や貯蓄などにつとめて居つた時代の生活習慣が、本能的に吾々の神経系統内に遺傳的の構成として固着して居り、その傾向が強くと現はれるものと考へられる。又兒童期には鬭争、破壊の本能がある。即ち兒童は周圍の年長者が監視をしてゐないと、必ず同年輩の他の兒童と喧嘩をしたり、物を奪ひ合つたり、玩具や家具などを破壊したり、小さい動物などを苦めて殺したり、可なり残忍な行爲を平氣でやるものであるが、之は吾々の祖先の遊牧生活時代に他の家族が自分の住んでゐる場所の附近に出現すると、之を敵視して、先づ之と鬭つて、完全に征服して了はなければ安心が出來ないので、常に自分と同じやうな力の者に對しては、敵意を抱いて警

戒して居つたことの遺傳を考ふべきであらう。他の動物を見ても、犬や猫などが偶然出會つても、直ぐお互に敵意を示すやうな表情や行動をする。之には多少性的立場からの敵意も含まれてゐるやうであるが、人間の少年期に於ては、性的の意義よりも寧ろこの原始本能的な傾向に基いて、自分の「ライバル」と思はるゝものに對する敵意が起り、それに依り自分の周圍に在つて自分の自由を妨げると想察せらるるものを凡て破壊したり、殺害したりして了はなければ安んじないといふ本能が起るのである。一體に之等の鬭争、破壊等の本能は、道義心が發達した成年の後までも、可成り力強く残つてゐるものであつて、普通の人も、道義的關係の全然ないやうな場合に、他人の喧嘩を眺めてゐたり、角力や「スポーツ」をやつたり、又色々なものを打ち壊したり、大きな建設物の破壊するのを眺めたりすることは、誠に愉快な感じを伴ふものである。又酒などに酔つて一時的に理智の行爲抑制作用が脱落すると、多くの人は暴行、破壊、色情的行爲等の仕業を平氣でするものであるが、之等は平生には理性の壓抑作用に依て斯うした原始本能の發露を抑止して居るのであるが、何等かの機會に自由にその本能を發露することが許されるやうな場合

には、何人も非常に愉快を感じるものなのである。

又兒童期には弄火本能なるものがある。之は人類に於いて始めて火を用ふることを知り、それを應用して始めて人類今日の文化が開けて來たのであると云はれ、即ち食物を調理して、之に或るやはらかさと、よい味ひとを與へることを知つたものは人間だけである。其他火力に依つて吾々の文化が益を得たことは決して少ないことではない。凡ての鐵の文化、光の文化は火によつて得た。或學者は人類を定義して「人とは火を用ふることを知る動物なり」と云つた程である。従つてその火を用ふることを知つた原始人の始めての喜びが、本能として今日にまで残つて居るのかも知れないし、又幼少の頃に於て兒童自身が火を初めて見た時に、この原始人と同じやうに非常な驚異の感に打たれ、その不思議に魅惑せられるためであるかも知れない。何れにせよ、兒童は火を弄ぶことを非常に喜ぶもので、子供は火なぶりをして火鉢の火をつゝき消し、或は燐寸などを持ち出して非常に危険な遊びをすることがある。この火を弄ぶのを喜ぶ本能は、大人に至つてもその力は失はれずに、残つてゐる。そのため俗人が火事を見るのを喜んだり、花火や「イル

ミネーションに驚嘆の目を見はつて楽しむのは、即ちこの弄火本能の現はれであると解せられる。併し大人は火の喜ぶべきことを知ると共に、又その恐ろしき魔力について警戒すべきことを知つてゐる故に、火の取扱ひに注意するものであるが、低能者や酩酊者、精神病者などは、よく、單に火事を見たいと云ふだけの單純な衝動から、何の顧慮もなく、他人の家に放火をする者などが屢々ある。この弄火本能も原始本能としては、かなりに力強いものである。

尙次に少年期の徘徊本能を挙げねばならぬ。幼ない子供が泣いて止まない時には戸外に連れ出せば、すぐ泣き止むものであるし、又親に伴はれて郊外へ遠足や用達などに出ることを此の上ない楽しみとなし、時には無斷で單獨に冒險的に旅行を企てることなどさへもある。大人が旅行を好むのも、つまりはこの徘徊本能の延長であり、浮浪者、乞食等の生活に於いて如何にも自由不羈な生活が喜ばれ、乞食を三日するとやめられぬとさへ云はれ、物質に乏しく不自由なことも意にかけないで、苦しい旅びをする。この本能が如何に力強い魅力を持つてゐるかは想像に餘りあることであらう。この徘徊本能の發生は恐らく、之又吾々の原始生活時

代の先祖が放浪生活を營んで居た時の喜びの記憶が残つてゐる故であらうと思はれるが、兎に角に乞食、旅人など徘徊放浪の生活を營みつゝあるものが、往々それと共に自づから他種の原始本能までも誘發して、所有本能の發現である所の竊盜、強盜行爲や、又は弄火本能の現はれである所の放火等、色々の原始本能的の犯罪行爲をも平氣でやる危険があるので、其の點を警戒しなければならぬ。つまり旅の耻はかきすてといふ氣分である。併し吾々が曾て日本全國の感化院に互つて其の收容兒童の調査をしたことがあつたが、その特に興味深く感じたことは、それ等兒童の感化院に入院する迄に行ふた犯罪行爲としては、主として今述べた、所有本能に基づく強盜竊盜、徘徊本能に基づく家出、逃走、浮浪、弄火本能に基づく放火、鬭争、破壊本能に基づく暴行傷害が殆んどその總てであつて、之等の少年者に於いては、理智作用を加味した詐欺、横領、其他謀殺等の計畫的犯罪などは一例もなく、皆總て原始本能に基づく衝動行爲がそれ等少年の不良性なるものの總てであることが分つたのである(附録參照)。

即ち之等の原始本能は總べて吾々の先祖の未だ社會文化の充分に發達しな

つた遊牧時代の個人的生活上の習慣が遺傳的に現はれるものなのであるから、従つて其の本能の傾向は、總て個人的であつて、少しも社會的生活に適應するやうな傾向を含んで居らない。之等の幼少年者の日常に本能に基いてなす所の行爲をそのまゝ、成人が家庭外で行つたとしたならば、それは總て重大な犯罪に當るべきものばかりである。

而して兒童が六、七歳の頃になると、その神経系統の自然の發育に伴つて徐々に社交的の本能性が發現して來るのである。即ち第一には自己の周圍の者、家族等のなす所、云ふ所をそのまゝに眞似をしやうとする模倣の本能が現はれて來る。此の本能は社交生活の基礎となるものであつて、之があるが故に吾々の言語・風俗・習慣が一定の形式を保ち、お互に同一の言語を用ひ、同一の禮儀を交はすやうになり、家風・郷土の風又は國民性等が出來上るのである。表情運動作用は一體に原始本能的に自づと幼少時からその身體の上に現はれて來るものではあるが、夫々の表情は又他人の模倣に依て段々と強められ、又醇化せられ、斯くしてお互ひが一定の言語動作によつて、一定の思想内容や感動を表現し、又他人の思想内容を理解するこ

とが出来るやうになつて行くものである。次には友愛親善の本能であつて、四五歳の頃までは兄弟と雖も、常に所有や權力を争つて喧嘩ばかりをし、少しも互に相親しんで遊び楽しまうと云ふやうな傾向が存在しないのに、七八歳頃からは段々と同年輩の者が親善和樂し、嬉戲して以て樂しみを共にしようと思ふやうな傾向が現はれて來る。それから次には犠牲本能と名付けて、多數の人の樂しみや喜びのためには、自分一己の苦痛を犠牲にしても厭はぬ、又或る一定の目的のためには各自が犠牲となつて、相協同して努力的に動作をしやうとする如き協同本能などが起り、之が進むと云ふと、自分の所屬する團體のためには、自分の趣味意向に反してでも、それと歩調を合せて働かうとする團結本能、又他の團體に負けまいとする競争本能、明日の己れを今日の己れよりよき者として行かうと努力する向上の本能等が段々と力強く起つて來る。

一方に又教養によつて道徳や宗教等の理想を教へ込まれると、その理想に従つて行爲することの誇り、即ち徳義本能が段々と起つて來て、之等が今迄家庭内のみ留まつてゐた兒童を社會的に進出せしめ、茲に現代社會生活の端緒が開かれる

やうになるのであるが、一方に社交本能が七、八歳の頃から徐々に起つて来て、小にしては一家庭内、一住居區域内に於いて、稍々大にしては一學級内、一學校内に於いて、朋友各自が和合し借樂して、以て社交的生活を楽しむやうになるのが、即ち人間の本性なのである。この社交本能が発現して来ると、今迄力強く存在してゐた原始本能の發露を、つとめて蔽ひかくさうとし、一方には家庭の躰け、學校の訓練、道義的の制裁、法律的の懲罰或は社會の良風美俗の模範獎勵等によつて、兒童は段々と意識的に原始本能の發動を抑壓することを學んで、斯くして段々と完全な社會的人格を作り上げるに至るのである。併し幼少時初めから持つてをつた原始本能は、神經系統の發育して行くにつれて、多少微力にはなつても、全く消失して了ふものではなく、いつ迄もその性格の中に固着してゐるものであつて、たゞ修得した理智の作用によつて、その發露を抑壓してゐるのに過ぎない。其の抑壓の努力を指して今日人格的修養と名付けてゐるのであるが、一旦この理智の抑壓作用が、病的原因或は偶然の機會に於いて脱落すると云ふと、その時には抑壓されてゐた原始本能が突然に力強く發露して、思はずもその今迄の修養を裏切つて、反社會的犯

罪的の傾向を示すやうになる人が決して少なくないのである。

尙、成長して青春期の年齢になると、後發的の原始本能として性慾衝動が起つて来る。この本能も矢張り原始的の本能と認むべきものではあるが、身體發育の關係上、思春期年齢に達して後に初めて強く發動して来るものである。併しもともと性慾本能は、自分の個人的性的慾求を満足させやうと云ふのがその當面の目的であるから、従つて時には社會の色々な規約や事情と衝突して、何等の障礙なしに思ひのまゝに性慾本能を充たすと云ふことは、現代に於いては困難なことが往々あるのである。この性慾本能も幼少時の凡ての原始本能と同じく非常に力強い自我的の傾向をもつものであつて、往々所謂道義的社交的本能を無視して、個人の性慾本能の發動のために、却つて社會の秩序を紊し、所謂犯罪に陥るものが少くないのである。性的犯罪については、幼少時の原始本能と異なり、色々身體的精神的の病的現象とも複雑な關係があるから、之については特別に考較する必要があると思ふけれども、兎に角この性的本能の發動する頃には、普通の心身の發育を遂げた青年では、大抵は既に強力な道義的情操が形成された後であるから、大多數の人

は、その性的本能の發動し始める頃から、既に之を合理的に抑制することを知つて居つて、性慾本能が道義的社交的本能と衝突する場合に於いては、成るべく道義的本能の方に従つて、性慾のためにその徳操を傷つけないやうに努力をして行くのが常である。

何れにせよ、兎に角に之等の原始本能は、人間性の中に當然具はつてゐる力強い衝動の羈絆なのである。そのまゝ、其の本能に従つて行動すれば、多くは所謂犯罪的の行爲を構成するもので、原始本能そのものは社會生活に適應しない純個人的傾向のものと認められるのが例である。併し一面に之等の原始本能の發動を抑壓して、社會生活の向上を計らうとする社交本能も、亦少年期以後に於いては、力強い本能的の傾向として起つて來るので、人間の生活の上には可成りの行動支配力を持つものである。従つて常人に於いては此の兩者の間に絶えざる内面的闘争が營まれるのであつて、理性の作用さへ完全であれば、いつでも良心的道義的本能の方が勝ちを占めて、吾々の日常行動を反社會的傾向に陥らしめないやうに、うまく舵をとつて行くものなのであり、之が即ち人生の苦闘でもあり、又現代人の努力

でもあるのである。即ち社會進化の理想に志す向上心の現はれと見るべきものである。唯併し一般の人間は何等かの機會にこの統御する理智の作用が、一時的又は永久的に脱落することがあり得るものであつて、斯かる場合には即ち原始本能に對する抑壓が一時的に脱落し、即ち反社會的の行動が自然と現はれるやうなことになるのを免かれない。さうして見ると、吾々が醫學的に考へる時には、一般に反社會的の傾向に基づく總ての犯罪行爲は何等かの意味に於てその正當なる理智作用の活動が障礙を起したことにその發生の原因を求むべきものであつて、即ち吾々は一般に犯罪行爲發生の原因を次の如き場合に求めやうとする。

第一、一時的に理智作用の脱落を來し、偶然の外界刺激に對して何等の抑壓なしに直ちにその原始本能的反應行爲が現はれた場合。

第二、その原始本能的傾向が或個人に於いて病的に強力であつて、通常の理智的抑制作用の力を以てしては、どうしても完全に抑壓することが出來ず、遂にその原始本能に基づく反應行爲が發露するに至つた場合。

第三、生來性にその理智作用の發育が制止せられ、即ち所謂低能の状態にあつ

て、そのために偶然に起る原始本能的の反應行爲を抑制する力が足らず、遂にそれが發露して了ふもの、所謂低能者の場合。

第四、生來性の原因でその原始本能的傾向が病的に強く存して居り、理智の作用は通常に存してはゐるが、そのみでは原始本能的反應の發動を抑壓することが出來ず、自ら惡事と知りつゝも之を抑へることが出來ないで、見す／＼犯罪行爲に走る者、即ち不良少年、常習性犯罪者の如き異常性格者の場合。

第五、精神障礙(精神病者の如き持續的精神障礙、或は「ヒステリー」癲癇の如き發作性の精神異常をも含む)により一旦發達を遂げたる理智作用が一時病的に脱落を來し、而もその原始的本能作用は、理智の統御を受けざる状態に於いて、そのまゝに存續し、之が外界刺戟のある度毎に少しも抑壓なく發露する場合。

等に分けることが出來ると思ふ。實際の例で云へば、飲酒酩酊の場合とか、非常時に際會し絶體絶命の絶望的の感動などにより、一時的に腦髓の異常充血を起し、意識の濁濁を來した如き場合、かあつと上氣して夢中になつた如き場合、又急性の精神病による精神錯亂の場合などに於いては、平生理智作用の完全であつた其

の人の持前の性格とは、全く異なつた原始本能をば、その儘に發露するに至るやうな例が決して少くないのである。多くの人々が醉漢、狂人などを何とはなし恐怖して近付かうとしないのは、夫等の人達の理智的社交的抑制作用を失つてゐて、何時その自我的原始本能的傾向による反應行爲、即ち思ひがけない犯罪行爲に出づるかも知れないといふので、つまりそれを恐れるためであらう。夫等の人であつても、その一時的精神異常の時期が經過して、通常の理智的抑壓の力を取り返した時に於いては、全くの常態に歸るのであつて、再びその原始本能の發露を抑壓することが出來るやうになるものである。併し右に述べた中の生來性原因による原始本能の強盛なるに因る犯罪傾向の如きは、自然となほることは寧ろ期待し難いことである。例へば低能者、病的性格異常者、殊に年長じて迄も犯罪的傾向を保持する常習性犯罪者の如きは、中々其の自然治癒は望み難い。之に對して少年犯罪者所謂不良少年少女と名付けらるゝもの、即ち原始本能的傾向を比較的強く示すやうな者でも、その年齢の尙少ない者は、その後の社會生活或は自然的大腦發達等によつて、遲蒔ながら社交本能が徐々に發達して來て、ために少年時の反社會的

不良傾向を漸次に抑制して行くことが出来るやうになり、之と共に理智作用に對する教育的の効果も加はつて、結局その性格が社交的生活に適應するやうに變化して行くことが決して少なくないのである。斯く不良性の原始本能傾向を強く示してゐる少年でも、理智を向上せしめ並びに社交的生活に訓練せしめることによつて、漸次に社會適應を得させるやうに導いてゆく方法をば、感化教育と名付けてゐる。併し斯う云ふ異常性格を示す不良少年も、恐らくは始めから先天的の精神發育制止症(精神薄弱症)が存してゐて、特に性格の構成上社交本能の發達が不完全なのか又は遲滯してゐるものが多いから、特に方法的に感化教育を施さずとも、自然の發育に任せておいても、相當の年齢に達すると、その社會不適應性を漸次失つて行つて、善良なる性格に歸趨する者が決して稀ではないのである。

通例新聞記事に屢々現はれる種々な社會的偶發犯罪の發生原因に就てよく考へて見ると、精神の異常に基いて起されるものが甚だ多いやうである。即ち偶發犯罪者は日常の生活に於いては、外見上何等明かな精神異常の徵候を持つて居る

ものではないけれども、不景氣のために生計が逼迫するとか、他人から侮辱などを受けて自我心を著しく傷つけられた場合とか、又は種々な原因により激しい憤怒、怨恨等の強い感動を起した場合などには、その時に一時的にその感動に對する反應的の心持ちが力強く全精神作用を占領して了つて、理性の行動抑制作用の力が微弱となり、遂に我知らず原始本能的に反應して、思はず抑制なく犯罪的の行爲に趨つて了ふものなのである。勿論偶然とは云ひ乍ら、之を誘發するやうな機會的原因が存しなければ決して犯罪行爲に陥ることもない筈の人間ではあるけれども、何か思ひがけない強激な刺戟や絶體絶命の如き強い絶望的感動に囚はれた時には、誰れしも一時腦髓の異常充血状態を起して、そのため一時的に理性の行動抑制作用が失墜し、或場合には意識濁濁を起し、即ちのぼせて夢中になつて了ふこともあり、或場合には又意識は失はないでも、一時理智の統制力を失ひ、ふら／＼とへんな氣になつて、あつと思ふ間に原始本能的の反應行爲に出るものもある。殺人、暴行乃至自殺などが、斯うした一寸したはづみで行はれる例が少なくない。その際若し第三者が傍にをつて制肘するとかすれば、それに牽制せられて理性を失は

ないで済むものが、さう云ふ抑制の機會のなかつた時に、偶然犯罪行爲に走つて了ふのである。尤も誰でもさう云ふ場合に、いつも犯罪に陥ると限つた譯ではなく、矢張りその精神作用に生來的に抵抗微弱な所があり、平生から精神作用の不安定を有して居る、云はゞ感情に走り易い氣質の人に於て、さう云ふことが起り易いのであつて、眞に長い間の修養的努力によつて思慮の堅實になつてゐる人に於いては、如何なる場合に當つても物に動せず、決して犯罪的反應行爲に出るやうなことは萬々ないことである。それ故偶發的犯罪と思はれるものであつても、仔細にその動機並びにその犯罪者の精神神経病的素質等を検査して見ると、案外に先天性に精神變調性の素因を持つてゐる人物なのであつて、之に感動の機因が偶然に加はつて犯罪を構成するに至つたと解すべきものが實際少なくないのである。

尙世間には所謂「惡黨」なるものがあつて、長い期間に亘り、故意に計略を弄し、計畫的に詐欺、横領等の犯罪を企らんで惡事を續け、それが露見して處罰せられても、少しも改悛せず、何度でも反復して同様な犯行を續けて行ひ、所謂常習性犯罪者 *Beschäftigungsverbrecher* と呼ばれるに至るものが少くない。斯う云ふ人達は無論そ

の理智作用の上には何等の病的缺陷はなく、唯それを悪い方に働かすと云ふのみである。然も道德的情操の發達が乏しくて、少しも己れの良心に訴へて、その行爲をして咎められても恥づる、悔いると云ふことなく、尤も中には一種の社會に對する反抗的氣分より意識的に反社會的行爲を續けて行ふといふひねくれ者もあらうけれども、何れにしても犯罪と知りつゝ、自ら少しも道義的に之を抑制することなくして、その犯行を繼續することは、つまりその道德性情操の缺陷に歸すべきものであると考へる。ブリチャード *Prichard* は斯くの如く理性に缺陷なく道德性のみに缺陷ある者に、悖徳狂 *Moral insanity* と云ふ名を與へ、一種の精神變質者であることを述べて居るが、實際上ロンブローゾ *Lombroso* などの調査によつても、斯う云ふ常習性犯罪者は著しき精神病的の遺傳傾向を示し、之を常人として見るべからざるものなることは云ふ迄もない。

斯くの如く多くの犯罪發生の場合を考察して見ると、犯罪者の精神作用及びその神経系統には、何等かの病的缺陷があり、此の一次的又は持續的の精神障導が直接の原因となつて犯罪を發生するに至るものなることは、誠に明らかなる事實で